

---

# 僕の村は釣り日和

栗原峰幸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の村は釣り日和

### 【Nコード】

N4570I

### 【作者名】

栗原峰幸

### 【あらすじ】

僕は玉置村に住む小学校六年生の桑原健也。二学期の初め、東海林正という男の子が転校してきて、村のため池でブラックバス釣りをしていたことから近づく。しかし、ブラックバスを害魚と決め付ける農家の人々により、すでに駆除されていた。僕の父親がブラックバス釣りをすることもあり、東海林君と僕は親しくなる。東海林君は父親を事故で亡くしていた。

一方、東海林さんとガキ大将の高田君との抗争は激化する。

僕の父親は竜山湖へ東海林君も誘って一泊でブラックバス釣りに

行くことを提案。そこで僕は初めてブラックバスを釣り上げる。ポールさんというアメリカ人が現れた時、東海林君に大物が掛かった。ポールさんは大きなブラックバスをくれれば、経営するペンションに無料で泊めてくれるという。こうして大きなブラックバスはポールさんの手に渡った。僕たちはポールさんのペンションで美味しいブラックバス料理をご馳走になる。

翌朝、ワカサギが接岸する岸边で再び釣りをした僕は偶然にもニジマス釣り上げる。ニジマスもまたアメリカから輸入された魚で、他の小魚を襲うという。その後、竜山湖の周囲をドライブするが、ワカサギが産卵する川に垂れ流される汚水、観光のために駐車場にされてしまった葦の原を目撃する。

学校では、ふとした事件をきっかけに東海林さんと高田君が和解し、三人で笹熊川へ溪流釣りに行くことになる。釣り上がっていくと、猿の大群に遭遇、もう少しで襲われそうになるが、モヒカンのような鬣をした猿に助けられる。東海林君はそのモヒカン猿が亡き父親にそっくりだと言う。

ある日、皆瀬さんという村役場の人と出会う。再びモヒカン猿と遭遇した僕たちは導かれるように、鬼女沢の不見滝へと向かう。その傍らには又吉じいさんが住んでおり、彼から滝つぼに潜む、身の丈三尺もある、大イワナ、釜の主の話が聞かされ、釣るための作戦を練る。

ある日、学校で小野さんと僕は言い合いとなるが、小野さんから釣りを教えて欲しいと頼まれる。僕の心は次第に小野さんに傾き、彼女もまた釜の主の秘密を知り、協力してくれることになる。

ブラックバス用のルアーを改良して釜の主を攻略することを提案。やはりモヒカン猿に導かれ、皆瀬さん、東海林君、小野さん、僕で不見滝へと向かう。そこで死闘の末、釜の主を見事、釣り上げることに成功した。

## 第一話

その日はまだ夏の匂いが残っていた。

先生が夏休み中も掃除を欠かさなかつたのだろう。木造の校舎の中は清潔に保たれていた。とは言つても古い建物だ。傷んだ箇所は目立つ。先生たちはそれを「学校の歴史と勲章だ」といつも言っていたっけ。

僕は桑原健也。この玉置村に住み、玉置小学校に通う、ここいらでは平凡な六年生だ。唯一、みんなと違うことと言えば、ほとんどの子供たちが地元の農家の子供であるのに対し、僕の父親は隣の笹熊市にある会社まで通っていることくらいか。

僕たち六年生にとって小学校最後の夏休みも終わり、教室の中はざわついていた。

都会の学校では小学校一年生から六年生までが違うクラス分けになっていると聞いたが、うちの小学校は何せのどかな山間の小学校だ。四年生から六年生までがひとつのクラスとなっている。

あらためて見てみると、夏休みの間、毎日のように遊んだ友達もいれば、久々に話をするやつもいる。とはいっても狭い村の中だ。どこかでは顔を見ている。

「よう、元気か？」

「笹熊山でオオクワガタ採ったぞ」

「俺なんか二連滝でつけえイワナ捕まえたもんね」

みんな一斉にそれぞれが、夏休みの自慢話を始めた。

僕だつて負けてはいない。山間のこの小さな村で、船に乗って海釣りに行ったのは僕くらいものだろう。どうしても海釣りがしたくて、海辺の町に暮らす祖父の家まで泊まりに行き、父に連れて行ってもらったのだ。

僕の祖父は海辺の町で、のんびりと釣りを楽しんだりして暮らし

ている。もともとはこの村の人なのだが、昔から「鉄砲玉」などと呼ばれ、よく遠くまで釣りに行ったりしていたっけ。

そんな祖父に船宿を紹介してもらい、船釣りをしたのだ。

船長さんはイカツイ顔をした、いかにも怖そうな人だったけど、意外と優しくかった。

そんな船長さんの親切なアドバイスで僕はカサゴという魚を、見事にたくさん釣ることができたのである。もっとも魚を釣った時のあのドキドキと、船酔いの気持ち悪さが入り交じった複雑な楽しさだった。

「僕だってカサゴを五十匹は釣ったぞ」

僕も自慢げに友達に言った。五十匹というのは大げさである。

よく「釣りの話は手を縛ってしろ」と言うが、どうやら口も縛ったほうがよさそうだ。

「カサゴ？ 何だそりゃ？」

「どんな魚だ？ 食べるのか？」

どうやら山間の村ではカサゴなんてみんな知らないらしい。

「そりゃ、おいしいさ。刺し身や煮付けにすると最高だぜ。もっとも見た目はちよつとイカツイけどね」

僕はみんなの知らない魚を少し得意げに紹介した。そして自由帳にカサゴの絵を書いてみせた。

「何これ？ ブラックバスにそっくりじゃん」

同じ六年生でガキ大将の高田君が茶々をいれた。するとみんなが僕の周りに集まってきた。

「ブラックバスは悪者なんだぞ。桑原、お前は悪者を釣って自慢してんのか？」

高田君は更に僕を追い込むように巻くし立てる。

教室のみんなも冷ややかな目で僕を見ていた。

そんな時、教室の扉がガラガラと開いた。みんなは一斉に自分の席に戻る。

担任の斎藤先生と一緒に一人の男の子が入ってきた。転校生だ。

この地域で転校生は珍しい。何せ古くからの地元の子供ばかりだ。転校生はシヨルダーバッグを肩に下げ、みんなと目を合わせることなく、教室の天井を見ていた。僕も教室の天井を見る。古ぼけた染みがオバケのような顔をして、そこにあつた。

転校生は着ている服といい、シヨルダーバッグといい、こんな山間の小学生とはセンスが違っていた。どこか都会の匂いをプンプンさせていた。

先生が黒板にチョークで何やら書き始めた。

「東海林正」

黒板にはそう書かれていた。

(とうかりんただし？ 変な苗字……)

僕は心の中でそうつぶやいた。

「みなさん、おはようございます。今日は二学期から六年生としてみなさんと新しくお友達になる、『しようじただし』さんが転校してきました」

先生がそう言うと、ガキ大将の高田君がいきなり席を立った。

「でも、何で『とうかいりん』で『しようじ』なんだよ？」

「昔からそういう読み方をするんです。東海林さんは神奈川県から引越してきたばかりで、この辺のことはよくわからないから、みんな仲良く、親切にしてあげてくださいね」

子供の素朴な疑問に少し困ったのだろう、先生は頭をかきながら、照れたように言った。

「変なの……」

「やっぱり、『とうかいりん』でも、いいんじゃない？」

「わははは……！」

その爆笑に転校生が教室中をジロリと睨んだ。妙に殺気立ったやつだった。

「先生、席はどこですか？」

学級委員長の小森さんが優等生らしく先生に質問をする。別に点数稼ぎをするつもりではないことはわかっている。小森さん流の気

遣いなのだ。

「おお、そうだな。桑原の隣が空いているな。とりあえずそこへ座つてもらおうか」

こうして転校生、東海林正は僕の隣へ座ることになったのである。東海林君が座る時、僕は「よろしく」と声をかけたが、彼から返事はなかった。彼はただ虚ろな目で黒板の上にある時計を眺めていた。

(こいつ、僕を、この村をバカにしているのかな?)

ただ、東海林君は下校まで誰とも口をきくことなく、ただボンヤリとしていた。

下校の時、東海林君は誰よりも早く下校した。その後ろ姿がどことなく寂しそうだった。

「おい、桑原！」

不意に後ろから斎藤先生の声がした。先生が手招きをしている。

近寄ると先生は腰を落とし、目線を僕の目線に合わせた。

「あのなあ、先生からのお願いなんだけど、何とか東海林を元気づけてやってくれんか？」

先生は本当に困ったような顔をしていた。僕は「学校に慣れさせるのは先生の役割だろう」とも思ったが、斎藤先生の顔を見ていると、とてもそんなことは言えなかった。

「できるかどうかわからないけど、やれるだけやってみます」

今はそう答えるのが精一杯だった。

次の日も、東海林君はショルダーバッグでやってきた。他の子はみんなまだランドセルだ。

僕はショルダーバッグに付いているマークを見て、ハツとした。

「ねえねえ、これフォックスファイヤーじゃないの？」

すると東海林君は「何で知っているんだ？」とでも言いたげな表情をして固まってしまった。

「僕のお父さんも持っているよ。このメーカーのバッグ」

「そうか。こんな山間の村でもフォックスファイヤーのバッグを売っているのか」

「まさか。隣の笹熊市の専門店で買ったらしいよ。釣り道具なんかもよく買ってるよ」

「お前のお父さん、釣りをするのか？」

「よく行ってるよ」

「でも、フォックスファイヤーを知っているやつがいて少しホツとしたぜ」

東海林君の口元が少し緩んだ。こわばっていた目も緊張が少しほぐれたように思う。僕は自分の席の座り心地が、昨日より少し良くなった。

その日も東海林君は真つ先に下校した。他の子はみんな校庭で野球をしたり、ドッジボールをしたりして遊んでいる。僕も泥まみれになりながら野球をした。

校門を出たのは西の山があかね色になってからだ。僕はあぜ道の赤トンボを脅かすようにして家へ向かった。足元ではバッタやキリギリスが時々、驚いたように跳ねる。

ちようど、農業用のため池の手前に来た時だった。ため池のほとりの草むらの中から、棒のようなものが振られるのがえた。

(誰か、釣りをしているぞ)

僕は駆け寄ってみた。ガサガサと藪をこぎ、ため池のほとりへ出てみると、そこには釣竿を握る東海林君がいた。

「東海林君！」

「よう」

東海林君の竿は2メートル弱くらいで、手には太鼓型のリールが握られている。東海林さんは夢中でリールを巻いていた。僕はこの道具を見てピンときた。

(東海林君はブラックバスを釣っているんだな)

東海林君の竿がヒュツと上がった。その釣り糸の先には小魚の形をしたルアー(疑似餌)が付いている。



よく見ると、東海林君の竿のグリップはコルクが汚れて黒くなり、リールも傷だらけだ。とても小学校六年生が使い込んだ道具とは思えない。

「その竿もリールも、ずいぶんと古そうだね」

「お父さんの形見なんだ。あのフォックスファイヤーのバッグも」  
「えっ？」

僕は一瞬、言葉に詰まった。それでも東海林君は僕の方を向くことなく、またルアーを投げた。

「お父さん、交通事故で死んだんだ。それでお母さんの実家に引越してきたってわけさ。俺だってこの土地が嫌いなわけじゃない。俺が生まれたのはここだからな」

そう言いながら、ひたすらリールを巻く東海林君の横顔に一筋の滴が流れた。それが夕陽に輝き、いつか博物館で見た水晶の原石のように光っていた。何とも悲しい水晶だった。

僕は何て声をかけていいのか正直なところわからなかった。何とか話題を変えて、つなげることしか思いつかなかった。

「ところで、ブラックバスを釣っているんだらう？ だったらここにはいないよ」  
「えっ？」

東海林君が驚いたような顔をして僕の方を向いた。

「ウソだろ？ 何年か前にここに遊びにきた時、いるって聞いたぞ」  
東海林君がルアーを拾い上げる。そして絡み付いた藻を丹念に針から取り除いた。そしてまた僕の顔をまっすぐに見た。

「確かに何年か前まではいたらしいんだけどね。大人たちがブラックバスは悪い魚だって言って、ため池の水を一度全部抜いちゃったんだ。そしてブラックバスだけ殺したんだよ。この辺りじゃ竜山湖まで行かなきゃブラックバスは釣れないね」

「ひどいことじゃがるぜ、大人たちは……」

それでも東海林君は釣るのを止めなかった。何度も何度もルアーを黙々と投げたのである。その姿はまるで何かに取り憑かれている

ようだった。僕はそんな彼を飽きもせず、腰を下ろして眺めていた。「なあ、お前は釣りをしないのか？」

突然、東海林君が僕に尋ねてきた。

「たまに行くよ。ブラックバスはまだ釣ったことないけどね。川でウグイを釣ったり、それとマス釣り場のニジマス釣ったりするくらいかな。でも僕のお父さんはブラックバスを釣るんだ」

「へー、やるじゃん。お前のお父さん」

東海林君の口元が少し笑ったような気がした。その時だった。急に竿が満月のような円を描き、リールがジリジリと軋んだ。

「まさか、ブラックバス？」

体育座りをしていた僕は、慌てて立ち上がり、東海林君の方へ駆け寄った。見ればリールからは糸がどんどん引っ張り出されている。相当の大物だ。

「いや、違うな。バスの引きじゃない。絡み付くような変な引きだ」

東海林君は何度も竿を立てては寝かせ、その度にリールを巻き取る。先程の涙は乾き、今彼を濡らしているのは汗だ。

魚も疲れてきたのだろうか。次第に岸边に寄ってきた。

「うわっ、何だこりゃ？」

何と釣り糸の先には、大きなヘビのような魚がうねっているではないか。僕はその不気味さに思わず尻餅をついてしまった。

「すげえ、カムルチーだ」

「カムルチー？」

「ライギョのことだよ」

東海林君はその得体の知れない魚を岸にズリ上げた。そして、ルアーをガツプリ啜えたカムルチーを高々と持ち上げる。それはドジョウを大きくしたような、ヘビのような顔をした魚だった。

「ブラックバスを殺しても、カムルチーは殺さなかつたんだな」

東海林君がカムルチーを繁々と眺めながらつぶやいた。

「何なの、その魚？」

「昔、朝鮮半島から輸入された魚さ。こいつも獰猛でね。小魚やカ

エル、ヘビ、鳥まで襲って食っちゃまう」

「へー……」

「ブラックバスは許されなくて、何でこいつは許されるんだろう？」  
そう言った東海林君の目は怒っているようでもあり、悲しそうでもあった。

また、その問いは子供の僕にも素朴な疑問として胸につかえた。

東海林君はプライヤーでカムルチーの口から針を外すと、そっと池に返してやった。カムルチーは何事もなかったかのように悠々と泳いでいき、濁った水の中へと消えていく。それを二人で見送った。  
「俺、明日から他の池でも釣ってみるわ。もしかしたらブラックバスが残っている池があるかもしれないからな」

そう言うのと、はにかむような笑いを残して、東海林君は藪の中へと消えていった。

それから数日後。

「おい、ブラックバス！」

ガキ大将の高田君が東海林君をそう呼び付けていた。

「お前、ため池を回ってブラックバスを釣っているだろう？ ブラックバスは他の魚を食う悪い魚なんだぞ。そんな魚を釣ってんじやねえよ！」

高田君は腕組をして東海林君の机の前に立った。僕は隣でヒヤヒヤしながら事の成り行きを見守るしかなかった。本当ならば東海林君の肩を持ってやりたかったが、何せ相手が悪すぎる。

「お前だって塩サバくらいは食うだろう？」

東海林君は淡々と言って退けた。

「何だと？」

高田君の顔が赤くなった。足がカクカクと震えている。

（ヤバイ。キれる前兆だ！）

僕は肘で東海林君の腕を突ついた。しかし、東海林君はまったく動じない。

「だいたい誰がブラックバスを悪者と決めつけたんだ？ 大人が勝手に言っているだけだろう？ もともとブラックバスは……」  
「うるさい！」

高田君の拳が東海林君の右頬に飛んだ。東海林君は少し後ろによるけたが、薄笑いを浮かべている。

「そうか、ちよつどいいや。俺もムシヤクシャしていたところなんだ。ケンカなら買うぜ」

「来いよ。都会育ちのモヤシっ子！」

東海林君の体がユラーツと立ち上がったと思つたら、俊敏なパンチが高田君の顔面に炸裂した。

「やりやがったな！」

「このジャガイモ！」

「くそ、ブラックバスめ！」

二人はなじり合いながら、もつれ、殴り合う。

教室の男子たちはヤンヤヤンヤと囁し立て、大騒ぎになっている。女子はただ呆然と対極的な二人の対戦を眺めている。手のひらで顔を覆う者もあった。

後はもう揉みくちやだった。どちらが優勢とも劣勢とも言えない。お互いの意地のぶつかり合い。そんな感じがした。

考えてみれば高田君の家は農家で、ため池の水を抜いた発案者でもある。そんな家で育った彼にとって、ブラックバスは許すことのできない存在なのかもしれない。

教室の扉のガラスの向こうに人影が見えた。だが不思議なことに、その人影は一向に入ってくる気配がない。

(何やってるんだよ先生。早く止めに入ってよ)

僕はそう思ったが、先生は動かなかつた。

ゼーゼー、ハーハー……。

東海林君も高田君もTシャツの襟は伸び、口元から薄っすら血が滲んでいた。

「お前、都会者の割にはなかなかやるな。だがよ、俺はブラックバ

スなんて絶対に認めねえからな」

高田君が吐き捨てるように言った。

「認めなくて結構さ。だが俺のすることに口を挟むな！」

お互いの信念の塊は混ざり合うことなかったようである。

そこへ、ようやく扉の向こうにいた人影が入ってきた。

「みなさん、おはようございます。騒々しい朝でしたね。物事は落ち着いて考えましょう。頭に血が上ったら、まともに考えられなくなりますよ。そうそう、世の中にはね、答えがいくつもあるっていうことがあるんですよ。小学校の算数なんかは答えが一つしかありませんけどね。さてと、今日の日は誰だったかな？」

僕は横に座る東海林君の横顔を見た。唇を噛み締めたその顔はまだ悔しそうだった。

僕は「大丈夫かい？」と声をかけようとも思ったが、今の彼には慰めにもならないと思ってやめた。

何となくモヤモヤした一日が過ぎていった。

「なあ、お前のお父さんの釣り道具、見せてくれないか？」

東海林君が僕にそう語りかけてきたのは、下校間際だった。

「いいよ」

僕は笑顔で答えた。

僕の父は隣の笹熊市にある会社まで車で通っている。会社帰りに釣り道具を買ってくることも多い。僕はそれで東海林君の気が少しでも紛れるのなら、父の釣り道具を見せてやりたいと思った。

「本当か？ 今日はずストレス発散をしたいんだ。目の保養に頼むぜ」

「あまり、いじくりまわさなければいいよ」

「何せこの村じゃ、ルアー用品を売ってないからな。引っ越してくる前は、毎日のようにショップへ冷やかしに行っていたからな」

「この村で釣り道具を売っているって言ったら、雑貨屋の杉本商店くらいかな。それも安物の竿だよ」

その日は校庭で遊ぶことなく、東海林君と僕は早々に下校した。

「あら、今日は早いのね」

母が夕飯の支度をしながら、台所から顔を覗かせた。

「今日は友達を連れてきたんだ。ねえ、お父さんの釣り道具が見た  
いんだつて。いいだろ？」

「いいんじゃないの」

母は父の趣味にあまり口を挟まない。

「お邪魔します」

東海林君は丁寧に僕の母に頭を下げると、靴を脱いで揃えた。

僕は冷蔵庫からサイダーを取り出し、戸棚からポテトチップスをかっさらう。すると、母が僕の襟元をムンズとつかんだ。そして小声でささやく。

「ちよいと、あの子、転校生の子だろ？ アザだらけだし服はボロボロだし、まさか、お前がやったんじゃないだろうね？」

「違うよ。高田のやつだよ。あいつが因縁つけてケンカになったんだ」

「そうかい。まだ友達も少ないだろうし、親切にしてやるんだよ」  
「うん。わかってるよ」

そして、東海林君と僕は二階にある父の部屋へと向かった。

父の部屋はいわゆる「趣味部屋」で、釣り道具やキャンプ用品がわんさかと置いてある。家をリフォームする際に「どうしても、父親がこだわって作った部屋なのだ。」

「おおっ、すげえ！」

父の部屋には釣竿が何本も立て掛けてあり、戸棚には年代物のリールが並べられている。僕にはその価値がよくわからないが、東海林君は目を皿のようにして見入っている。

「これはガルシアのロッド（竿）じゃないか。こっちはフェンウィック。これは初代のスピードスティック！」

きつと、マニアにはたまらない竿なのだろう。東海林君は竿の一本一本を食い入るように眺めている。

「なあ、触ってみてもいいか？」

「折らなきやいいよ」

ビュツと風を切る音がした。父がいつも竿を振る時の音だ。僕が竿を振ってもこのような音はなかなか出せない。それはおそらく釣りに対する想いに反応して出される音なのかもしれない。

「あれっ、お前のお父さん、トラウトもやるのか？」

「うん。この近辺は溪流が多いからね。イワナやヤマメを狙ってるよ」

「すげえな。トラウトロッドはパームスじゃん」

「お父さんのお気に入りはストリームマスターの66ってやつなんだ。『この竿はいい竿だ』って、酔っ払うといつもうわ言のように言っているよ」

東海林君の目は戸棚の中にあるリールに移る。

「おおーっ、リールもすげえや。アブのアンバサダー5000Cがあるよ。5500Cじゃなくてギア比の低い5000Cを使っているあたりがマニアだな。黒いボディもイカすぜ。あっ、こっちはカーディナル33とミツチエル408じゃないか」

僕には東海林君が何を言っているのかよくわからなかったが、学校での虚ろな目とは違い、この時、彼の目は明らかに輝いて見えた。今日、高田君との一件があっただけに、そんな彼の輝かしい目を見ることができて、僕まで何だか嬉しくなってきた。

東海林君は僕が勧めたサイダーにもポテトチップスにも手を伸ばすことなく、ただただ釣り道具を眺めていた。

僕はタックルボックスと呼ばれるルアーケースを広げた。そこにはぎっしりとルアーが詰まっている。

「おおっ！」

東海林君からため息のような声が漏れた。

「す、すげえ。レア物ばかりじゃないか！」

「そうなの？」

「バルサ50にズイール、スミスにヘドン……」

「ヘドンって怪獣の名前みたいだね」

「ぶぶつ！」

今までクールを決め込んでいた東海林君が、思わず吹き出した。

「いやー、すごいな。下手なシヨップよりお前の家のほうが品がそろっているぜ……」

「僕には価値がイマイチわからないだよ」

「マニアにはたまらないぜ。それにお前のお父さんは釣りが上手いな。ルアーのそろえ方を見ればわかるぜ」

「と言うことは、君も上手いってことだね」

「……まあな」

東海林君は照れたように頬をかいた。

「そろそろ晩ごはんよ。お友達もご家族が心配しているんじゃない？」

母の声が響いた。

「いけね」

窓の外を見ると、もう陽はとっぷりと暮れていた。

「どうもお邪魔しました」

東海林君は帰り際にも深々と頭を下げた。母も「またいつでも遊びにいらっしやい」と笑顔で送り出す。

「僕、送っていくよ」

「いいよ。大丈夫だよ」

「いいって、いいって」

暗くなった夜道を懐中電灯で照らしながら、二人で歩いた。秋の虫の音がそこから中から聞こえる。

「自然が豊かかっていうのはいいなあ。でも都会で育った俺にはどこか寂しい気がするんだよな」

東海林君がしみじみと言った。この地で育った僕にとっては当たり前の景色や音が、彼には違って見えるのだろうか。

「そんな日本の自然にブラックバスは溶け込めないんだろうか？」

もともと人間がよかれと思って持ち込んだ魚なのに。ブラックバスに罪はないのに」



そう呟く東海林君の声は秋の虫の声と重なって、どことなく寂しそうだった。僕は思わずそんな彼に同情してしまった。

東海林君の家は僕の家からそれほど遠くなかった。距離にして300メートル程だろうか。古い旧家の作りだった。僕はこの家を知っていた。確かおじいさんとおばあさんの二人暮しだったはずだ。

「ただいま。友達の家に行っていて遅くなっちゃった。ごめん」

東海林君の声を聞き付けて、彼の母親が慌てて奥から飛び出してきた。本当は綺麗な母親なのだろう。しかし、ずいぶんとやつれて見えた。髪は乱れて、頬のあたりもこけているように思える。

「まあ、正、こんな遅くまでどこ行っていたのよ。それにどうしたの？ アザだらけになって、服もボロボロだし……」

東海林君の母親は口に手を当てて驚きを隠せない様子だ。

「学校でケンカしたんだ。それで帰りにこいつの家で釣り道具を見せてもらってたらさ、夢中になって遅くなっちゃった。ごめんなさい」

東海林君は頭をペコリと下げた。しかし、母親はわなわたと震えている。そして東海林君に駆け寄ったかと思うと、思い切り抱き締めた。

「お父さんがあんなことになって、その上、お前の身に何かあったら、私……」

そこから先は言葉にならなかった。東海林君の母親の目からは大粒の涙がボロボロとこぼれ出していた。

「まあまあ、無事に帰ってきたんだからいいじゃないか。男の子はそのくらい元気がなくちゃ」

奥から東海林君のおじいさんらしき人が顔を覗かせた。

「それにしても派手にやったもんじゃのう」

おじいさんも東海林君のアザや服を見て言う。

「ケンカはやり過ぎなければ大丈夫じゃ。わしもガキの頃は派手にやったもんじゃて」

おじいさんがにつこり笑いながら、東海林君と母親の肩に手を置いた。しわだらけだが、ずいぶんと温かそうな手だった。

「君は桑原君じゃな」

おじいさんが僕の方を向いて笑った。

「はい、桑原健也です。同じクラスで隣の席なんです」

「そうか、そうか。それにしても大きくなったのう」

おじいさんが目を細める。

「僕のこと知っているんですか？」

「なーに、この村じゃ2、300メートル先はお隣さんじゃよ」

おじいさんが豪快に笑った。母親はまだ東海林君を抱き締めたまま涙を流している。

「今日、僕の家で釣り道具を見ていたんです。そしたら夢中になっちゃって。つい遅くなっちゃいました。済みませんでした」

「いやいや、いいんじゃないよ。この村じゃ悪さをするやつはおらんで」

おじいさんは村人のことをすっかり信用しきっているようだ。それはこの村に長く住んでいるからこそわかるのだろう。

「でもね、正。最近お前、ため池の周りで釣りをしてるだろう？」

私がお前が池に落ちて、溺れたりしないか心配で……」

母親が涙をぬぐいながらつぶやいた。

「ふーむ……」

おじいさんが腕組みをして真剣な顔付きになった。

「確かにため池の周りにはぬかるんでいて危ないな。それに正が狙っているのはブラックバスじゃろう？」

東海林さんが「うん」と呟く。

おじいさんは玄関の照明を見つめながらため息をついた。

「この村、いや今の世間ではブラックバスは悪者扱いされているからう。農家のみんなはそれを信じきつとる。そしてブラックバスを釣るやつも白い目で見られる。この小さな村ではなおさらじゃ」

僕はふと疑問に思った。なぜこんな山間の村のため池にブラックバスがいたのだろうか。

「なぜ、ため池にブラックバスがいたんですか？」

「それはな、十年以上前になるかのう。ちょうどブラックバスを釣るのがブームでのう。誰かがため池にブラックバスをこっそり放したんじゃ。村の者はそんなことはせん。きつとよそ者の仕業じゃな」なるほど、と僕は思った。ただこの時まで、勝手にブラックバスを放流するのが良いことなのか、悪いことなのか、僕にはまだわからなかったが、人間の都合で殺されていくブラックバスの運命に同情せざるを得なかった。

「じゃあ、遅くなりましたので僕はこれで失礼します」

僕は頭を下げて帰ろうとした。

「ああ、ちよつと待った」

するとおじいさんが引き留めた。

「転校してきたばかりの正に優しくしてくれてありがとうよ。これからもよろしく頼みます」

そう言ってザルに一杯のナスとキュウリをくれた。

「ありがとうございます」

おじいさんはにっこり笑い、母親は少し不安そうな笑いを浮かべて僕を送り出してくれた。

「遅かったじゃない。心配したわよ」

家に帰った僕を母は心配そうな顔で出迎えた。

父はもう会社から帰っていて、居間で野球中継を観ながらビールをあおっていた。

「おう健也、お帰り。転校生の友達ができたんだって？ 母さんから聞いたぞ。しかも釣り好きらしいな」

「うん。ブラックバスを釣るのが好きなんだ。お父さんの道具を見せたら喜んでいたよ」

僕は母に東海林君のおじいさんからもらったナスとキュウリを差し出した。

「まあ、立派なナスとキュウリじゃないの。一体どうしたの？」

「東海林君のおじいさんにもらったんだ」

「東海林君って、今日遊びに来た子？」

「そうだよ。300メートルくらい上ったところの古い家に住んでいるんだ」

僕がそう言うと、父親と母親が顔を見合わせた。

「それってもしかして、山岸さんの家じゃないの？」

母が驚いたように叫んだ。

「え、でも東海林君は東海林君だよ。何でも、お父さんが交通事故で亡くなったんだって」

「旦那さん亡くなったのか？　そうか、それでも亡くなった旦那さんの苗字から変えていないんだな」

父がつぶやくように言った。

「と言うことは、秀美ちゃんもこの村に戻ってきてるってわけか」

父がチビツとビールをすすった。

「まさか今日来たあの子が秀美ちゃんの息子さんとはねえ」  
母がため息をつく。

「秀美ちゃんって東海林君のお母さんのこと？」

「どうやら、父も母も東海林君の母親のことを知っているようだ。」

「そうよ。東海林君のお母さんと私たちは同級生なのよ。秀美ちゃんも高校を卒業して東京の大学に行って、あつちで結婚しちゃったけど、こんなかたちで戻ってくるなんて思ってもみなかったわ」

母はやり切れないといった表情で、また深いため息をついた。父もビールを飲むペースが落ちてきている。いつもなら流し込むように飲むのに。

「さあ、夕ごはん、冷めちゃったわよ。早く食べなさい」

僕は母に促されてテーブルに着いた。その日は好物のシヨウガ焼きだったが、あまり味がしなかった。味がしなくなったガムを噛んでいるようだった。

## 第二話

食事が終わって部屋に戻ろうとすると、父が僕を呼び止めた。

「ちよつとお父さんの部屋においで」

僕はちよつと胸騒ぎがした。東海林君と父親の釣り道具をいじつたのが気に障ったらどうしようかと思つたのだ

部屋に入ると父はルアーがぎっしり詰まった、タックルボックスというケースを開けて待っていた。

いかにも魚の形をしたルアー。ズングリムツクリとしたルアー。

プロペラが付いた、まるで子供のオモチャのようなルアー。釣りをしなくても、見ているだけで楽しくなるような気分になる。

「みんな綺麗だったり、おもしろい形をしたりしているね。まるでオモチャ箱だ」

「そうだよ。お父さんのオモチャ箱だよ」

ビールの酔いのせいだろうか。父は少し赤い顔で、人懐っこい笑顔を浮かべた。

「これは全部、ブラックバスを釣るためのルアーなんだ」

「へえー……」

僕はプロペラの付いたルアーを取り出し、電球の下にかざしてみる。それはどう見ても小魚はおるか、虫とか餌の類いには見えない。「こんなので本当にブラックバスが釣れるの？」

「条件さえ合えばね。いつでもってわけじゃないよ。これはトップウォータープラグと言って、水面で使うルアーなんだ。プロペラの音がブラックバスの闘争本能を刺激するんだらうな」

「闘争本能？」

「イライラして噛み付くんだよ」

「ふーん」

父がズングリムツクリとしたルアーを取り出した。

「これをよく見てごらん」

そのルアーは木で作られており、表面はニスのようなものでコーティングされているが、そこは小さな傷でザラザラだった。

「その表面の傷はブラックバスの噛み跡さ」

「これが？」

「そう。ブラックバスの歯は紙やすりみたいにザラザラなんだ」

意外だった。獰猛な魚はみんな、もつとギザギザで鋭い歯を持っているかと思っていたからである。

「この傷はな、それだけブラックバスを釣り上げた、言わば勲章みたいなもんだ。これを秀美ちゃんの息子さんにプレゼントしようじゃないか」

父が鼻の下をこすりながら、笑って言った。

「本当にいいの？ お父さんの宝物じゃないの？」

「本当の宝物は胸の中にしまっておくものさ」

少し照れたように、はみかみながら父が言った。でもさすが僕の父親だ。その言葉は僕の胸にズキンとしみた。

「ありがとう、お父さん。東海林君もきつと喜ぶよ」

僕は自分の部屋に戻ると、ランドセルにズングリムツクリのルアーを仕舞った。そして早めに布団に潜った。目をつぶると東海林君の嬉しそうな顔が浮かんで見える。

(東海林君、きつと喜ぶぞ)

その夜はぐっすりと眠れた。

次の日の朝。

僕は駆け足で学校へ向かった。まだ教室には誰も来ていなかったが、ソワソワしながら東海林君が来るのを待った。たまには待たされる気分を味わうのも悪くはないものである。

みんながポツポツと顔を揃え始めると、東海林君がいつものシヨルダーバッグをぶら下げてやってきた。

「おはよう！」

僕は元気一杯に東海林君に向かって声を掛けた。

「ああ、おはよう……」

東海林君は僕の声にびっくりしたように、ちよつとすつとぼけた顔をして言った。

僕は早速、ランドセルからあれを取り出した。もちろんズングリムツクリのあのルアーだ。

「僕のお父さんから、君へのプレゼントだよ」

すると眠たそうな顔をしていた東海林君の目が、大きく見開かれた。

「おおつ、バルサ50！」

「バルサ50って言うんだ？ このルアー」

「もう生産中止になったクランクベイトの傑作だよ。本当にもらってもいいのか？」

「ああ、もちろん」

東海林君が金塊にでも触るかのように、恐る恐る手を伸ばす。そしてズングリムツクリのルアーをすくい上げた。

指先で表面の傷を確かめるようになぞる。その時の東海林君の目がうつとりとっていて、何とも心地良さそうだ。

「きつとこのルアーでたくさんバスを釣ったんだろうな。表面がバスの歯型でザラザラだ。これは勲章みたいなもんだぜ」

「お父さんと同じこと言ったら」

「ありがとうよ。大切にするよ」

その時、僕と東海林君の前にヌツと人影が現れた。ガキ大将の高田君だ。

「何だよ。桑原のオヤジもブラックバスを釣るのかよ。じゃあ、お前のオヤジも悪者だな」

高田君は僕たちを見下しながら、鼻で笑うように言い放った。

「何？」

僕は立ち上がり、高田君につかみかかろうとした。机が倒れ、ガーンと大きな音にクラス中の視線が一斉にこちらに集中する。

しかし意外なことに僕を止めたのは東海林さんだった。

「やめるよ。ピーマンを相手にしても時間の無駄だぞ。疲れるだけだ」

東海林君の腕は、僕と高田君の間にしっかりと割り込んでいる。今度は高田君が東海林君を睨む。高田君は怒るとすぐ顔が赤くなる。丸刈りにしたとあいまって、その様はまるでタコだ。

「おい、お前。俺のことをピーマンとぬかしたな！」  
しかし東海林君は視線を合わせることなく、つまらなそうに続けた。

「お前は『ブラックバスは悪者だ』って言っているが、それは親の受け売りだろう？ 一体お前は一度でもブラックバスを見たり、釣ったりしたことがあるのか？」

「そ、それはないけど……」  
高田君が口ごもる。どうやら形勢は東海林君に分があるように、僕には思えた。

「だったら、俺たちのやることに口を挟むな」  
東海林君の口調は静かだったが、他を圧倒するような迫力があつた。その迫力にさすがに高田君も返す言葉がない。

ガラガラ……。  
教室の扉が開いた。そして、笑顔で斎藤先生が入ってくる。高田君も、他のみんなも一斉に自分の席に着いた。

「みなさん、おはようございます。爽やかな秋晴れの朝ですね。こんな日は心も爽やかにいきたいですね」

先生の視線は僕と東海林君、そして高田君を交互に見ているような気がする。

僕は東海林君を見た。何食わぬ顔で前を見つめている。

僕はこの時、東海林君に感謝すべきだったのだろうが、まだ腹の虫が収まらなかつた。自分の父親を公然と侮辱されて怒らないやつがいるだろうか。

その日も僕は東海林君と早々と下校した。高田君たちと遊ぶ気に



はとてもなれなかつたのである。

「今朝はありがとう」

僕の心の中はまだ怒りに震えていたが、東海林君には感謝の言葉を送らなければなるまい。

「いいんだよ。あいつ単細胞だろ？ 言葉ではこつちが上だつてことをわからせてやったのさ」

東海林君は照れたように笑いながら振り返つた。しかしすぐに寂しそうな顔をするとう立ち止まってしまった。

「どうしたんだよ？」

「お前のお父さんの悪口を言われた時、俺のお父さんの悪口を言われたような気がしてさ。あの時、本当はブン殴つてやるうかと思つたんだ」

東海林君は右手のこぶしを強く握り締め、下を向いたまま呟いた。帽子の影でよくは見えなかつたが、少し目は潤んでいたかと思う。

「俺さ、ここに来る前、空手を習っていてさ。先生から絶対にケンカで空手の技を使うなって言われていたんだ。でも今日ケンカしてたら使つちまいそうだった。だから口ゲンカで収めたんだ」

「そうか……」

僕はこの時、東海林君も僕と同じ屈辱を味わっていたことを知つた。

東海林君が顔を上げた。傾きかけたオレンジ色の夕陽に照らされた彼の目は、やっぱりちよつと潤んでいる。

「それにさ、空手の先生は言っていたよ。空手は体だけじゃなく、心も鍛えるものだつて」

そう言い終えた時、東海林君は握っていたこぶしを解いた。

「君は十分強いよ」

先日の高田君との取っ組み合いといい、今朝の切り返しといい、

東海林君は本当に体も心も強いやつだと思つたものだ。

「冗談言つなよ。これでも一杯一杯なんだぜ。家に帰ればお母さんはお父さんの遺影にしがみついて毎日泣いているしさ。俺くらいは

しつかりして、元気なところ見せないとな」

東海林君は再び拳を強く握り締めた。そしてその言葉は、まるで自分に言い聞かせているようだった。この時、僕は彼の背負っている重荷を少しでも理解してあげたかった。

僕たちは僕の家の前で別れた。僕は帽子を脱いで大きく振った。

「今日はありがとうな。僕も頑張るから、お前も頑張れよーっ！」  
夕陽の中で大きく帽子が揺れ、「おーっ！」と元気な声が返ってきた。この時はもう、不思議と怒りは収まっていた。

夜になって僕は居間で晩酌をする父に、今日の学校でのことを話した。

「あはははは、お父さんは悪者か？」

父は怒りもせず、焼酎の水割りをチビチビすすっている。

「お父さんは悔しくないのかい？」

もう僕の怒りは収まりかけていたが、心の棘が完全に抜けたわけではなかった。

「このあたりは農家が多いからなあ。それだけ素朴で昔からの伝統が守られていて、いい村だと思うんだけど、そういう所は得てして新しいものを受け入れない風土を持っているんだよ」

「ブラックバスもそのひとつ？」

「まあね。でも、それは世論によるところが大きいかな。マスコミなんかもこぞってブラックバスを叩くだろう。最近では行政もブラックバス対策に乗り出している」

「やっぱりブラックバスは悪い魚なの？」

僕は身を乗り出して、父の顔の前に顔を突き出した。

「お父さんはそんなに悪い魚だなんて思っていないよ。むしろ人間の都合のいいように利用された可哀想な魚だと思うな」

「それって、どういうこと？」

僕にはブラックバスと可哀想というイメージがどうも結び付かなかった。

父はテレビのリモコンのスイッチを切った。キッチンからは母が皿洗いをする水の音が聞こえる。

「ブラックバスはね、大正時代に日米親善のために赤星鉄馬という人が、初めて日本に移植したんだ。放流されたのは神奈川県芦ノ湖。それから昭和の時代になってゲーム感覚で釣りをする人が増えたんだな。ルアー釣りは餌も使わないし、西洋風で格好いいっていうんで、ジワジワと人気が出てきたんだ。ルアー釣りをする人の中にはただ『釣り』を楽しむだけの目的の人も多くいたんだ。釣り用語でキャッチ・アンド・リリースって言うんだけど、釣った魚を逃がすんだ。何しろ釣って魚との駆け引きを楽しむための釣りだからね。それまでの釣りはキャッチ・アンド・イト。つまり釣ったら食べるのが当たり前だったんだ」

僕の父は酒が入ると舌がよく回る。

「ふーん。それでブラックバスはどうなったの？」

「そこさ。ゲーム感覚の釣りはおもしろいし、カツコイってことでブラックバスは人気が出て、各地に放流されたんだよ。釣り具メーカーもこぞってバス用品を開発してね。ちょうどお父さんの青春時代だなあ」

父は腕組みをして天井を見上げている。どうやら、思い出に浸っているようだ。口元はニヤニヤしている。

「それで、それで？」

「うーん。その頃からブラックバス害魚論がなかったわけじゃないんだ。それなりに研究も行われていたと思うよ。ちょっと古いけど一九七〇年代に茨城県の牛久沼でブラックバスの胃の内容物の調査が行われたんだ。その結果、ブラックバスの胃の中から出てきたのはほとんどアメリカザリガニやカエルだったんだよ。小魚はほとんど入っていないかったんじゃないかな」

「ふーん。ブラックバスって魚は食べないんだね」

僕は少し安心したような気がして、父の膝の上から降りた。

「安心するのはまだ早いぞ。ブラックバスは魚を食べる。これは確

実なことだ」

「だって今、胃の中からはザリガニやカエルしか出てこなかった、  
て言ったじゃないか」

僕の一旦穏やかになった心臓が、また早く打ち始めた。

「お父さんは釣りに行った時、何度も小魚を襲うブラックバスの姿  
を目撃している。彼らは確実に魚を襲って食べる。これは事実だ」

「じゃあ、やつぱりブラックバスは悪者ってこと？」

僕は不安に駆られて、思わず聞き返した。

「おいおい、それはいくら何でも短絡的すぎないか？ 日本にも他  
の魚を食べる魚はたくさんいるぞ。それにブラックバス以外にも輸  
入された魚で他の魚を襲う魚はいる」

僕は東海林君が釣り上げたカムルチーを思い出した。あの時、彼  
は「なんでこいつは許されるんだろう？」って言っていたっけ。そ  
の答えはまだ僕には見つけられていない。

「そうだ、健也。そういえばお前、まだブラックバスを釣ったこと  
なかったな」

「うん」

「どうだ、今度の土日に秀美ちゃんの息子を誘って竜山湖にでもバ  
ス釣りに行こうか？ テントでも持って行ってさ」

「いいねえ、いいねえ」

僕はすぐ父の誘いに飛びついた。ルアーといえば、まだマス釣り  
場のニジマスしか釣ったことがない僕が、野生のブラックバスを釣  
ることができる絶好のチャンスだ。しかも東海林君と一緒にならば楽  
しい釣りになるに違いない。

「それはいい考えね」

台所仕事を終えた母が、父の肩に手を乗せて笑った。父も母の顔  
を見て笑い返す。こんな家族の旦那さんが僕は好きだ。外で辛いこ  
とがあっても、仲良くやっていける家族に支えられているのだと思  
うと、胸がジーンと熱くなることがある。

「母さん、秀美ちゃんのところにも早速電話をしてみてるかい？」

母が手でOKサインを出しながら電話の方へ向かった。

僕はその夜、父と随分と釣りの話しをした。これまでそれほど釣りに熱中していたわけでもなかった僕が、次から次へと質問責めにするので、父は僕にわかりやすく答えるのに忙しそうだった。

何しろ釣り用語は難解な言葉が多い。ルアーの世界となると横文字だらけだ。まだ英語すら習っていない小学生には少々きつい。

時々、電話の方から母のすすり泣く声が聞こえた。おそらく東海林君のお父さんが亡くなった時の話をしているのだろう。でも僕は聞かないふりをした。母の電話は子供が聞いてはいけない世界のよくな気がした。何となく、そんな気がした。

「東海林君、今度の土日、OKだってよ」

電話口から戻ってきた時の母は、いつもの母の笑顔に戻っていた。「やったあ！」

「彼も楽しみにしてるみたいよ」

母は腰に手を当てて、自慢げに言った。まるで仲人をしたつもりでもいるのだろうか。

「そうだよ。あいつもストレスたまっているだろうから、息抜きさせてやらなきゃ」

「あ、お父さんだって仕事でストレスたまっているぞ」

父親が母親に空になったグラスを差し出した。

「だーめ。今日はこれでおしまい。飲み過ぎは体に毒よ」

「今日は健也ともいろいろ話せて気分がいいんだ。頼むよ、もう一杯！」

母は「しょうがないわね」と言いたげな顔をしながらグラスを受け取った。

僕と父はウィンクをした。「やったね」の合図だ。

僕は気分よく自分の部屋へと向かった。そういえば宿題をやっていない。

(ま、いつか。いつものことだ)

僕はスモールランプにして、布団に潜ってしまった。深い眠りに

落ちるまでの時間は、どんな優秀な医者のかける麻酔よりも早かったと思う。

### 第三話

土曜日の昼過ぎ。

東海林君は母親と一緒に僕の家までやってきた。彼の手には二本の釣竿とタックルボックス。背中にはリュックサックが背負われている。

東海林君の母親は申し訳なさそうな顔をしながら、何度もうちの親に頭を下げていた。そして横目でチラチラと東海林君を見る。本当は心配で仕方ないのだろう。

「大丈夫よ、秀美ちゃん」

僕の母が東海林君の母親の肩をポンと叩いて笑うと、東海林君の母親は泣きそうな顔で笑い返した。

（本当に東海林君を誘ってよかったのだろうか？）

ふと、そんな疑問が僕の頭の中をよぎった。しかし、東海林君は浮かれ気分で、早くも道具をうちのワゴン車に載せている。

「おっ、すげえなあ。天井に釣竿が吊るせるようになってる。まさに釣り仕様の車だな」

東海林君が感心したようにつぶやいた。彼の表情を見ればわかる。久しぶりのトラックバスとのご対面に、心は踊っているのだ。

「よろしくお願いします」

東海林君の母親が深々と頭を下げた。少しパサパサの髪が風になびいて、その顔を隠した。だがその下は不安で一杯に違いない。

「お母さん、行ってきまーす！」

元気よく東海林君が窓から手を振る。後ろを振り返ると、東海林君の母親は小刻みに手を振り、僕の母は大きく手を振っていた。

こうして、僕と東海林君と僕のお父さんの男三人のトラックバス釣りは、心地よい揺れとエンジンの音で幕を開けたのである。

竜山湖まではグネグネ道を走らなければならぬ。その度に僕が東海林さんにもたれたり、東海林さんが僕にもたれたりした。

「ほら、谷底を見てごらん」

父の言葉に僕も東海林君も、道の下を流れる溪流を見た。水は清らかで、速く流れているところもあれば、淀んでいるところもある。それでも水のかたちは1秒たりとも同じではない。躍動感と生命感あふれる流れだった。

「あそこにはイワナやヤマメがいるよ」

肩越しに父が笑っているのがわかる。

「水はいいよな。眺めているだけでもワクワクするよ」

東海林君が目を細めながら、うっとりした表情で谷底の溪流を見つめている。

やがて車はトンネルを抜けると下り坂に入った。

「竜山湖までもう少しだぞ」

少しばかりグネグネ道を下ると、道は直線になった。そこで東海林君が天井を見る。

「おじさん、アブのアンバサダー5000Cを持ってきたんですね」

「ああ、それね。それはおじさんのお父さん、つまり健也のおじいちゃんからもらったものなんだ。当時としてはずいぶんとハイカラなじいさんだね。ルアーが好きだったんだな。よく銀山湖へ行って大きなイワナやサクラマスを釣っていたよ。ブラックバスも芦ノ湖とか河口湖とか釣りに行っていたんじゃないかなあ。アブのリールは頑丈だから手入れさえしっかりしておけば何年でももつよ」

東海林君は父親のリールと自分のリールを見比べている。僕も見るが、色の違いだけで形はよく似ている。丸い太鼓型のリールで、正式にはベイトキヤスティングリールという。

「君のリールも似ていないか？」

僕が東海林君にそう尋ねると、彼は腕組みをして得意そうに解説を始めた。

「俺のリールはシマノのカルカタだ。俺には最高のリールさ」

「リールにはこだわる人が多いからね」

ここから先、父と東海林君は釣り道具の話をや々と続けた。正直、



僕にはついていけなかった。

しばらくすると、竜山湖が見えてきた。

青い湖面に太陽が反射して、キラキラとまぶしい。僕は思わず目を細めた。

近所のため池も時にまぶしく光る時がある。しかし、いつも近寄ってみると、淀んだ緑色をしている。

それに比べて竜山湖の湖面は遠くから見ると限りなく青に近い。そこに太陽の光が命を与えるように降り注いでいるのだ。初めてのブラックバス釣りということもあるが、僕は何か心が踊るような期待を竜山湖に寄せていた。

車は湖畔の空き地に停まった。僕と東海林君はすぐさま駆け出し、湖面を覗き込む。

やはり、ため池の水とは違い、格段に澄んでいる。僕たちが近寄ると、慌てたように何かの稚魚が隊列を組んだまま右往左往していた。

「うーん、クリアウォーターだな」

東海林君が呟くように言った。

「クリアウォーターって？」

「澄んだ水のことだよ。その反対がマツディウォーターっていうんだ。ちょうど村のため池がそれだよ」

東海林君の目はそのクリアウォーターのように澄んでいる。学校でつまらなそうに淀んだ目とは正反対だ。

「さすがはバスマンだ。言葉もよく知っているね」

後ろに立っていた父が、東海林君に笑いながら声を掛けた。

「ええ。死んだお父さんもバス釣りが好きだったんで、よく連れていってもらったんです。そのうちに自然と言葉も覚ええました」

東海林君は八キ八キと答えた。この時彼が、亡くなった父親のことを思い出し、悲しんでいるように思えなかった。

「そうか。それもお父さんの大切な遺産だな」

僕は父のその言葉を聞いてハツとした。僕が今まで父から教わったことって何があるだろうかと考える。しかし、すぐには頭に浮かばない。

僕がボーツとしてしていると東海林君は釣りの支度にかかっていた。「ここは緩やかなカケアガリで、沖にはウイード（藻）が生えてる。夕方には克蘭クベイトでいい型が狙えるよ。今の時間ならワームが有利かな」

父が東海林君に助言した。すると彼は取り出した竿を一旦しまい、別の竿を取り出した。太鼓型のリールではない、スピニングリールというリールが付いている竿だ。

太鼓型のベイトキヤスティングリールが電気コードの巻き取りリールに似ているのに対し、スピニングリールは糸をつむぐように巻き取っていく。扱いも簡単で、初心者でもちよつと練習すれば投げられるようになる。

「じゃあ、スプリットショットリグで狙います」

「おじさんもそれがいいと思うよ」

東海林君は手際よく準備を進めていく。釣りのうまいやつはだいたい準備が早い。糸の先にはワームがぶら下がっていた。

ワームとはプラスチックゴムなどでできたミミズのような形をした柔らかいルアーのことだ。それに専用の針を付けて使用する。よく見ると、ワームの上に小さなオモリが付いている。よく川で釣る時に使うガン玉オモリにそっくりだ。

「これがワームのスプリットショットリグだ」

「スプリットショットって、そのガン玉のことがい？」

「そうとも言う」

東海林君が苦笑いをした。

「スプリットショットはガン玉、リグは仕掛けて意味さ」

「ルアー釣りって何でも英語にしちゃうんだね」

「チツチツチツ、ルアーフィッシングって呼んでくれたまえよ」

東海林君の竿が風を切った。ワームは緩やかな曲線を描いて飛ん

でいく。

僕も無性に釣りがしたくなって父の元へ駆け寄った。父に手伝わしてもらって準備をする。リールは東海林君と同じスピニングリールだ。

ベイトキャスティングリールは僕には扱えない。あれは投げるのが難しく、熟練を要するのだ。下手に投げればリールの糸がグチャグチャになってしまう。だから僕が扱えるのはスピニングリールしかないのだ。

僕が針を結んでいる時だった。

「ヒット！」

背後で東海林君の大きな声が響いた。振り返ってみると、彼の竿が大きくしなっているではないか。僕は道具をそのままにして東海林君の元へ駆けつけた。

水面で銀色の魚体が跳ねた。

「やった。すごいじゃん」

「なーに、小さい、小さい」

東海林君はそう言うが、僕にはそう思えなかった。先程跳ねた魚体に圧倒されたのかもしれない。それに竿だって大きく曲がっている。

東海林君は竿の角度を微妙に変えながら、リールを巻き続けた。すると黒っぽい魚体が近くまで寄ってきた。だが魚は僕たちの姿に気付くと、また沖へと走りだした。

「くっ、このファイトがたまらないんだよな」

東海林君は竿をためながら、嬉しそうにつぶやいた。

ユラーツとまた魚が寄ってきた。今度は竿を大きく持ち上げて、魚の顔を水面に出す。

魚が口を開けてもがいた。だが、東海林君は素早く魚の口に指を入れ、親指と人差し指で魚の下あごをつかむと、そのまま一気に抜き上げた。魚は尾をばたつかせながら抵抗するが、あごをしつかりとつかまれているため逃げられない。

東海林君が高々と揚げた魚は、背中が黒く、腹は銀色で、体の脇に黒い大きな斑点がある。間違いない。ブラックバスだ。大きさにすると25センチほどか。

「すごい、これがブラックバスか」

「何だ、本物見るの初めてか？」

「うん。間近で見るのはね」

「俺も久々に釣ったよ。サイズとしてはちょっと小さいけど、いいフアイトをしたぜ」

東海林君は得意げな笑顔をたたえて、ブラックバスを繁々と見つめていた。久しぶりのブラックバスとのご対面に感動しているのだろう。

「いやー、お見事、お見事。さすがだね」

父が拍手をしながら近寄ってきた。父も繁々とブラックバスの魚体を眺める。

「この湖には滋賀県の琵琶湖からブラックバスが移植され、放流されているんだ。だから相当デカイのもいるはずだぞ」

父がブラックバスの魚体をなでながら言った。

「何でわざわざ琵琶湖からバスを持つてくるの？」

「僕は素朴な疑問をそのままぶつけた。」

「琵琶湖じゃ迷惑な魚なんだよ。嫌われ者だからな。ブラックバスは」

答えてくれたのは東海林君だった。

「まあ、琵琶湖でもバス釣りのガイドがいるからね。観光資源として成立しているとは思っただけど……。とにかくこの湖は漁協がバスの存在を認め、放流しているんだ。だからここに来る前に遊魚券を買っただろう？」

父が湖を見渡しながら言った。

「漁協って、村の笹熊川にもある……」

「そう、漁業協同組合のことさ。魚の管理をしている団体なんだよ。この湖ではブラックバスも大切な資源として認められているんだね。」

遊魚券もそうだし、貸しボートなんかでももつかるだろう?」

「ふーん」

ブラックバスは日本のどこへ行っても悪者扱いされていると僕は思っていた。しかし、このような湖もあるものなのか。

東海林君はブラックバスの口から針を外すと、優しく水へ返してやった。手で魚体を支えながら、何度かエラに水を通す。するとブラックバスは元気にくねりだし、やがて彼の手から離れ、沖の群青色の水の中へと消えていった。

「お前も早く支度しろよ。一緒に釣ろうぜ」

東海林君に促されて、僕はまた釣り支度に戻った。糸の結び方がうまくいなくて、何度も結び直す。あせると糸がヨレてしまう。それでも父は黙って僕の仕草を見ていた。

結局、支度ができるまでに十五分程はかかっただろうか。僕も東海林君と同じくワームのスプリットショットリグにした。そして僕が彼の元に駆けつけた時には、既に彼は二匹目の魚を掛けていた。東海林君の竿は柔らかいのだろう。満月のようにしなっている。

「さっきよりのかはいいサイズだ」

そう言いながら、彼は竿を上下左右へと振って、魚の動きに合わせている。

水しぶきが炸裂した。太陽の光を反射して輝く湖面に、銀色の魚体が跳ねる。サングラスが欲しくなるまぶしさだ。跳ねた魚体は確かに先程のやつより大きそうだった。

東海林君が慎重に魚を寄せる。そして先程と同じく口の中へ指を突っ込み、魚体を抜き上げた。

「35センチくらいはありそうだな」

僕はポカーンと口を開けたまま、その魚体に見取れていた。大きく開いた口。意外とつぶらな瞳。背びれは尖っていて、触ると痛そうだ。

東海林君は今度もブラックバスを水へと返した。

ブラックバスの釣りはキャッチ・アンド・リリース、つまり釣っ

たら逃がすのが基本である。それがゲームフィッシングと言われるゆえんだ。

僕も負けまいと、すぐにワームを沖へ向かって投げたが、それは投げ損ないのライナーとなって、足元にポシヤリと落ちてしまった。

「あーあ、指を放すタイミングが遅すぎるんだよ。力まないで軽く投げてみるよ」

東海林君が僕にアドバイスをくれた。目の前で立て続けに二匹も釣られて、僕も少しあせっていたのだろうか。

僕は後ろを振り返った。父はパイプ椅子を持ちだし、優雅にタバコをふかしている。家をリフォームしてからというもの、父は家中でタバコを吸わせてもらえない。いわゆるホタル族というやつだ。こんな時くらい思いつきり吸いたいのだろう。

それにどうやら父は、僕と東海林君の関係に口を挟む気はないらしい。

僕は気を取り直し、リラックスした気分で竿を振った。すると今度は沖に向かって、曲線を描いてワームが飛んでいった。

「ナイスキャスト。やればできるじゃん」

「えへへへ」

僕は照れながらリールを巻き始めた。

「ゆっくり巻くんだぞ。ワームが湖底をはいながら、ユラユラ揺れるイメージだな」

僕は想像する。糸の先につながれたワームは今、湖底に着いたり、ちよつと浮いたりしながらブラックバスを誘惑しているに違いない。僕は竿先をツンツンと動かしながら誘いつづけた。モゾモゾとした感触は藻だろうか。

何度かワームを回収しては投げる動作を繰り返す。何投目だっただろうか。僕の手元に藻とは明らかに違うググツとした魚の感触が伝わった。そして竿先が一気にしぼり込まれる。

「き、きたー！」

僕は竿を立てて、反射的に合わせていた。魚が掛かった時には、針掛かりするように竿を立てて「合わせ」という動作をする。それは餌釣りでも同じことだ。

「きたか。スプリットショットの場合はもつと優しくゆっくり合わせた方がいいんだけど、バレていないか？」

東海林君が僕の竿先を眺めながら、心配そうに言った。だが竿は弧を描くように曲がっている。

ちなみに、「バレる」とは釣り用語で、掛かった魚が針から外れて逃げられることをいう。

「大丈夫。バレてないよ。しっかりと掛かっているみたいだ」

僕は必死にリールを巻きながら答えた。その時、銀色の魚体が跳ねた。僕の心臓の鼓動はドクン、ドクンと高鳴り、竿を握る手からも汗が出ているようだ。リールをつかむ竿のグリップが汗で滑りそうなくらいだ。

「落ち着け、落ち着くんぞだ！」

東海林君が隣で励ましてくれる。そんな声も耳に入らないくらい僕は動転し、そして夢中だった。

目の前に魚が寄ってきた。ワームを口にくわえてヌーツと泳いでいる。

(こいつが俺の釣ったブラックバス。初めて釣ったブラックバス…)

そう思うと心臓の高鳴りは頂点に達した。この時、僕はブラックバスの存在感に圧倒されていたのかもしれない。

さて困った。僕には東海林君のように、ブラックバスの口の中に指を入れて引き抜くなんて技は到底できそうにない。

「そのまま岸にずり上げちゃえよ」

東海林君も僕にそこまでの技量がないことはわかっているのだから。無理せず、岸にずり上げることを勧めた。

僕は彼の助言どおりにブラックバスを岸へと寄せる。それでもブラックバスは最後まで抵抗をあきらめなかった。岸辺で激しい水し

ぶきが上がった。それが僕の顔にかかり、冷たい。

それでも、気が付いた時には30センチはあろうかというブラックバスが、水辺の石の上に尾をばたつかせながら横たわっていた。

少々格好悪い取り込みだったが、こうして僕の人生初のブラックバスは見事に釣り上げることができたのである。

「やったな、おめでとう。綺麗なバスじゃないか」

東海林君が僕を讃えてくれた。僕はブラックバスを改めて眺める。そして触ってみた。

ざらついた、粗いウロコの感触がいかにも異国の魚のような印象だ。

「どうだい、初めてのブラックバスは？」

携帯灰皿を手にした父が歩みよってきた。

「すんげー、ドキドキしたー」

実際に僕の心臓は、まだバクバクと脈打ち、体の隅々まで血液を送っている感じた。

「そりゃ、初めては誰だっけそうさ」

東海林君がフォローを入れてくれた。

初めて自分で釣ったブラックバスは、太陽の光を反射して腹側が銀色に輝き、背中では東海林さんのおじいさんにもらったナスのように黒光りしている。

僕は針を外すと、東海林君のように口に指を入れ、下アゴをつかんでみた。するとブラックバスはバタバタと暴れ、僕の手には生命の躍動感が伝わった。

（立派に生きているんだな。ブラックバスも……）

僕が繁々とブラックバスを眺めていると、東海林君が魚体に触った。

「リリース（放流）するんなら早くした方がいいぞ」

僕は東海林君に促されて、魚を水へ戻した。東海林君を見習って、何度か魚体を前後させ、エラに水を通すようにする。すると少し弱りかけていたブラックバスはみるみるうちに回復し、元気に沖へと



泳ぎ出していった。

「初めてのブラックバス、おめでとう。ちゃんとリリースまでできたね」

背後で父の声がした。

「お父さんは釣らないの？」

「夕方になってから釣るよ」

父はそう言うと、またパイプ椅子へと戻り、本を広げ始めた。

「今日はコンディションがいいぜ。さあ、釣ろう」

東海林君はそう言うと、またワームを投げた。僕も投げる。

やはり友達と釣りをするのは気分がいいものだ。そんなことを思った午後だった。

夕陽が山を紅く染め始めた頃、父が竿を持って近寄ってきた。釣り糸の先には、あのズングリムツクリのルアーが付いている。

「これからの時間はクラנקベイトでよく釣れるんだ」

父のリールは東海林君がかじりつくように見ていたアンバサダーの5000Cだ。

父の言葉を聞いて東海林君が車に戻った。そして同じようなベイトキャストイングリールの付いた竿を取り出すと、父からプレゼントされたバルサ50をぶら下げて戻ってきた。

「さっそくそれを使うのかい？ そのリールはカルカタ200だね？」

父の目が輝いた。

「ええ。お父さんの形見なんです」

「そうか。それじゃあ、大切に使わないとな。そのカルカタは二代目だね。初代は回転が良すぎてバックラッシュをよく起こしたんだ。それで改良されて二代目が登場したんだ」

バックラッシュとはリールの糸がモジャモジャにからまることだ。ベイトキャストイングリールは熟練しないと、このバックラッシュがよく起こる。だから僕はスピニングリールしか使えないのだ。

「健也もクランクベイトに変えるか？」

父親が小さめのズングリムツクリを渡してくれる。メタリックに輝く、きらびやかなルアーだ。

「ダイワのピーナッツ？っていうルアーだよ。けっこう釣れるんだぞ」

よく見ると、そのルアーにも細かい傷がたくさん付いている。おそらくたくさんのブラックバスが、このルアーに噛み付いたのだらう。

こうして、三人並んでズングリムツクリを投げることになった。

意外にも、最初に魚を掛けたのは僕だった。リールをただゆつくり巻いていると、不意に竿が引ったくられるように重くなった。そして魚が暴れだす。

「き、きたっ！」

先程のワームの時とは違い、硬い、プラスチックのルアーを動かして釣るのは、いかにもルアー釣りをしているという気分になる。

「おう、さっそくきたな」

父が満足そうに笑った。

夕陽に銀色の魚体が跳ねた。魚は潜ったり、跳ねたりを繰り返して、抵抗を続ける。

それでも僕は竿の角度を変えながら、リールを巻き、足元まで魚を寄せることができた。まだ口に指を突っ込む勇氣はないが、岸辺に魚をずり上げる。

30センチに満たないくらいのブラックバスだ。

ワームの時とは違い、ズングリムツクリのルアーには三本の針が付いている。僕が針を外すのに手間取っていると、東海林君が見かねてプライヤーを貸してくれた。

「さっさと外さないと、魚のダメージが大きくなるぜ」

その言葉はブラックバスを愛する釣り人の、本音以外の何物でもなかった。

その後も僕は快調にブラックバスを釣り続けた。型は小さいが相  
当な数を釣ったと思う。それに比べ、父も東海林君も沈黙したまま  
だ。二人ともまだ一匹も釣っていない。

「二人とも、このルアーに変えたら？」

僕がそう助言しても、二人とも「いや、いいんだ」と言い、ルア  
ーを変えようとはしない。どう見ても、僕の使っているピーナッツ  
？より、一回りか二回りは大きいルアーだ。

それでも二人は黙々とルアーを投げ続けている。まるで自分のル  
アーを信じきっているようだ。

おそらく、父や東海林君には、たくさん魚を釣ることよりも大事  
なことがあるようだ。二人を見ていると、そんな気がした。

だけど、初めてブラックバスを釣る僕にとっては、今はたくさん  
釣ることが目標だ。黙々とルアーを投げる二人を横目に、僕はそ  
の後も順調に数を伸ばしていった。もう何匹釣ったか覚えていない。

「ちょっと隣で釣り、いいですか？」

舌足らずな日本語で話しかけてきたのは、金髪の外国人だった。

下腹がでっぷりと出たおじさんだ。

「夕飯を釣りにきました」

そう言って、金髪のおじさんは小魚の形をしたルアーを投げた。

おじさんのリールは見たこともない変わったリールだった。

「そのリール、ゼブコのクローズドフェイスリールですね？」

父が珍しいものでも見るように話しかけた。

「オー、このリール、最高ね。三十年付き合ってるよ。私、プロじ  
やない。楽しみだから、好きなように釣る。これ、最高のぜいたく  
ね」

金髪のおじさんが豪快に笑った。

「クローズドフェイスリールって？」

「今の日本じゃ、あまり見なくなっただけど、ああいうリールもある  
んだよ。うちにも天袋を探せばあるんじゃないかな。捨ててはいな

いと思うけど」

父が懐かしむように、おじさんのリールを眺めながら言った。

「オー、ヒット、ヒット！」

おじさんの竿が絞り込まれた。おじさんは愉快そうに笑いながら、魚の引きを楽しんでいる。

「アーハッハッハッ！」

おじさんのふくよかな笑顔を見てみると、こちらまで笑いたくなる。おじさんは魚をそのままゴボウ抜きにした。

「まずはワイフ（妻）のおかずね」

おじさんは満足そうにブラックバスを握り締めた。そして金属性のストリンガーという道具に魚をつなげる。

「ブラックバスを食べるんですか？」

僕はブラックバスを食べる話など聞いたことがない。目を丸くしておじさんに尋ねた。

「アメリカでは普通に食べるよ。もちろんゲームフィッシングの対象でもあるけど、皮をむいて食べるとおいしい魚です。キャッチ・アンド・リリースも大切だけど、日本人は何でも形にこだわり過ぎね」

おじさんがにつこり笑いながら答えた。

「確か、芦ノ湖に行った時、ブラックバス料理を出しているレストランがあったな。聞いた話ではスズキに似ているらしいけど」

父が少し考え込むような顔をしてつぶやいた。

「私、ポールといいます。そこでペンションを経営しています。ブラックバス料理はなかなか評判ですよ。でも今日は土曜日なのに予約客がゼロ。だからワイフと私の分だけ釣れば十分ね」

東海林君は会話に参加せず、黙々とルアーを投げては回収している。何か執念に取り憑かれているようだ。目付きが昼間とはまるで違う。

「オー、クレイジーボーイ！」

ポールさんがそんな彼を見て、また豪快に笑った。

その矢先だった。東海林君の竿が大きく曲がった。彼が今使っている竿はそれなりに硬いはずだ。それが根元近くから曲がっているかなりの大物だ。

「ヒット！」

東海林君の声が夕暮れの岸边に、一際大きく響いた。

「やったね。デカそうじゃん」

「40センチオーバーは確実だろうな」

父は目を細めて笑いながらも、どこかうらやましそうな顔をしている。

東海林君と大物との駆け引きは続いた。東海林君は魚の動きに合わせて竿の角度を変えたり、リールを巻く早さを変えたりしている。一方、魚も負けてはいない。何とか針を外そうと、ジャンプしたり、潜ったりして必死の抵抗を見せる。

跳ねた魚体からして、やはりかなりの大物だ。ポールさんのお腹のような、でつぶりとした銀色が夕陽に染まってオレンジに見えた。ついに、東海林君の勝利の時がやってきた。疲れきった大きなブラックバスは体を横に向け、近寄ってきたのである。僕はそのあまりの大きさに圧倒されてしまった。と言うより、恐ろしささえ覚えただけだ。ブラックバスの口には三本針がガツチリと食い込んでいる。これならバレることはあるまい。

よく見ると、東海林君の膝が震えている。いや震えているのは膝だけではない。体全体が震えている。

「大丈夫か？」

「あ、ああ、たぶん」

そう言う声も震えていた。きっと彼もこれほどの大きさのブラックバスを釣り上げたのは初めてなのだろう。

「ランディング（取り込み）はまかせて」

父が水辺へ近づいた。父の影を見て、ブラックバスはまた沖へと突っ走る。東海林君の竿がきしんだ。

だが彼がゆっくりと竿を持ち上げると、魚はまた浮いてきた。

「こいつもよく頑張った」

父は大きなブラックバスを褒めたたえた。東海林君がリールを巻き取り、一段と高く竿を持ち上げる。すると、ブラックバスの大きな口がガバツと水面で開いた。それは僕のこぶしなど簡単に入ってしまった。大きい口だった。

父親はブラックバスの下アゴをつかむと一気に抜き上げた。水しぶきが舞い、でっぷりとした魚体が夕映えの空に輝いた。

「オー、ビッグ！ オー、ファット！」

ポールさんもさすがに東海林君の釣り上げたブラックバスの大きさに驚いている。

東海林君が父親からブラックバスを受け取り、下アゴをつかむ。

その大きさと重量感を確かめているようだ。

その時、彼は笑ってはいなかった。むしろ目が潤んでいたように思える。もしかしたら天国にいる彼の父親に報告しているのかもしれない、と僕は思った。

「すげえバスだな。こんなのもいるんだな」

僕が驚いていると、東海林君はていねいに針を外し、魚体にメジヤーを当てた。

「53センチ。俺の新記録だ」

「やったね。おめでとう」

僕は手を差し伸べた。

「ありがとう」

東海林君は少し照れながらも、強く僕の手を握り返した。

それはそうと、先程から父とポールさんは何やら英語交じりで話をしている。

東海林君と僕がブラックバスに見とれていると、父が駆け寄ってきた。

「ポールさんがね、そのブラックバスをくれないかって言ってるんだ。その代わり、今夜はポールさんのペンションにタダで泊めてくれるらしい。どうする？」

ポールさんも円満の笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

「最高のブラックバス料理をごちそうしますよ」

東海林君と僕は顔を見合わせた。今夜はテントで寝る予定だった。それはそれでよかったのだが、やはり柔らかい布団で寝たいものだ。

「いいよ。その前に記念写真を一枚、撮らせてよ」

東海林君と僕と父と、そして53センチの大きなブラックバスを囲んでポールさんにシャッターを押してもらおう。

デジカメの画面に写った顔は、みんな満足そうな笑顔だ。ただブラックバスだけがつぶらな瞳を輝かせている。とても悪口を言われる魚の目には見えない。

## 第四話

ポールさんのペンションは湖畔から少し山の方へ入ったところにある、しゃれたログハウスだった。車から降りたとたんに、桧のよい香りが鼻をくすぐった。

「さあ、カモン、カモン」

ポールさんに続いてペンションに入ると、いかにも家庭的な作りで、なぜかホツとする。まるで友達の家に遊びに来ていている感覚に近い。

キッチンの奥からポールさんの奥さんが顔を出した。

「紹介するよ。マイワイフのキャサリンです」

「こんにちは。はじめまして。大きなバスをサンキューです」

キャサリンさんの日本語もなかなか上手だ。そう言えば、ポールさんは日本に来て十二年になるそうだ。

僕たちはポールさんに案内され、二階の部屋に入ると、そこはまるで清潔感のあるロッジという感じだった。そこに荷物を置き、再び一階に戻る。するとキャサリンさんは既にキッチンでブラックバスをさばいていた。

東海林君も僕も興味津々でキッチンを覗き込んだ。一体どんなふうにブラックバスが料理されるのか知りたかった。

「バスはともおいしい魚ですよ。今日はムニエルにします」

キャサリンさんがニッコリ笑って言った。目が細くなり、目尻のしわが極端にしぼんだ。

「ムニエルですか。それは美味しそうだなあ」

父が舌なめずりをした。

キャサリンさんの日本語はポールさんよりクセがなく、上手だ。

それにポールさんがでっぷりとしているのに対し、キャサリンさんは痩せている。その対照的な夫婦が仲良く暮らしているのが、どこかほえましくもあり、おかしかった。



程なくして僕たちの目の前にブラックバスのムニエルが運ばれてきた。それは皮をむいた、厚みのある切り身で、食べごたえがありそうだった。おそらく東海林君が釣った、あの53センチのブラックバスに違いない。ニンニクのよい香りが食欲をそそる。

「おおーっ、これがブラックバスのムニエルかあ……」

僕が驚きながら眺めていると、ポールさんが東海林君と僕にオレンジジュースを運んできてくれた。ポールさんと父親は早速、ビールで乾杯をしている。

「いただきまーす」

僕はナイフをブラックバスの切り身に入れた。思ったよりも柔らかく、脂がジワーツとにじみ出てくる。僕は一口大に切ったブラックバスを口へ運んだ。

「うまい。うまいよ、これ！」

僕は思わず叫んでしまった。ニンニクと特性ソースがからみ合い、川魚独特の臭みは感じられない。ムニエルだから油っこいかと思っただが、意外とさっぱりしている。僕は次から次へとブラックバスを口に運んだ。

「いやー、本当においしいなあ。確かにスズキに似ているかもしれない」

父もそう言いながら、ブラックバスを頬張っている。

向かいに座っている東海林君を見ると、まだ手をつけていない。両手を組み、まるでお祈りでもしているかのようだ。一分くらいして、静かに目を開けると、彼はようやくブラックバスをナイフで切り始めた。

「うん、うまい！」

東海林君が静かに言った。彼は一口一口噛み締めるように味わっているようだ。彼の新記録となったブラックバスの味は、きつと僕の舌とは違う味をとらえているのかもしれない。

「おかわり、ありますよ。どんどん召し上がってくださいね」

キャサリンさんがエプロンを着けたまま、テーブルに座った。ポ

ールさんが彼女にもビールを勧める。するとキャサリンさんはチビとすすり始めた。まるで父親が焼酎を飲む時のようだ。

「それにしても、今日使ったルアーは魚に全然似ていなかったな」  
僕が東海林君に話しかけた。

「ああ、クランクベイトのことかい？ あれは魚に似せて作られているんじゃないよ。あれはバスの攻撃本能を刺激するんだ」

「ああ、なるほどね」

僕は釣りの前に父から見せられたルアーを思い出していた。するとそこに、ほんのり赤い顔をした父が口を挟んだ。

「バスをイライラさせるんだよ。今日、健也に貸したルアーを振ったら、音がしなかったか？」

「何か、カラカラ音がしたけど」

「あのルアーにはラトルという玉が入っているんだ。音でもバスを刺激するように作られているんだ」

「へえー……」

「俺が前に住んでいた神奈川では、よく真夜中に暴走族が走っていてね。うるさいのなんのって。張り倒してやりたかったよ。それと同じだな」

東海林君が笑いながら、張り手をするふりをする。

まったくルアーとはよくできているものだ。僕はルアーの奥の深さに少しだけ首を突っ込んだような気がした。

「人間ならば手で追い払うところだけど、魚には手がないだろう。だから口で噛み付いて追い払おうとするんだ」

東海林君がパーの手を勢いよく握り、グーを作った。まるで魚が一瞬で口を閉じるように。

「ところでブラックバスは本当に他の魚をたくさん食べるの？」

僕がそう尋ねると、父がやや神秘的な顔付きになった。

「明日の朝、また釣りをしよう。その時、答えを教えてやるよ」  
父親はビールをグーツとあおった。

「おかわり、ください」

僕がそう言うと、キャサリンさんはニッコリ笑って、ムニエルを皿の上に乗せてくれた。

「東海林君はいいのか？」

「いや、俺はお腹というより、胸がいつぱいだ」

そう言いながらサラダに手を伸ばす。

「焼きたてのパンもあります」

キャサリンさんが持ってきてくれたパンは形こそ不格好だが、いい匂いが漂ってくる。食べ盛りの僕としては、本当はご飯を食べたいところだが、たまには夜にパンを食べるのも悪くない。

僕は早速パンに手を伸ばした。

「あっちちちっ！」

焼きたてのパンは本当に熱かった。パンをフーフー言いながら食べる機会など、そうざらにあるものではない。僕は少し粗っぽいけど、素朴な小麦粉の味を噛み締めながら飲み込んだ。

ポールさんと父親はビールからウイスキーに変え、釣りの話で盛り上がっている。

東海林さんが急に立ち上がった。彼は部屋の隅に立て掛けてある古びたギターを手にすると、ポロンとかき鳴らした。

「これ、弾いてもいいですか？」

「プリーズ。どうぞ、どうぞ」

真つ赤な顔をしたポールさんが答える。

東海林君はペグを回しながら音を調節し始めた。彼がギターを弾けるなど今まで知らなかった。

ポーン、ピーン……。

絃を調節する音が響く。みんな東海林さんに注目した。

東海林君がギターをつま弾き始めた。続いて澄んだ美しい声が僕の耳に。

「いつくしみ深き 友なるイエスは……」

そう歌い出された曲は、親しみのあるメロディだった。

「何の曲だろう？」

僕は父親の耳元で、歌を邪魔しないようにささやいた。

「賛美歌だよ。イエス・キリストをたたえる歌さ」

ポールさんもキャサリンさんも、真顔で東海林君の歌に聞き入っている。東海林さんの澄んだ歌声は、ログハウスの桧に染み込んでいくようだった。そしてその声は、いつも学校の音楽の授業でつまらなそうに歌う東海林君の声とは、まるで別ものだった。

「アーメン」

その言葉を最後に曲は終わった。みんなで東海林君に拍手を送った。彼は照れ臭そうに頭をかいた。お酒を飲んだわけでもないのに顔は真っ赤だ。

「あんた、クリスチャンかね？」

ポールさんが親しげな笑みを浮かべて、東海林君に歩み寄った。

「僕は違います。でも死んだ父がクリスチャンでした。よく教会にも連れていつてもらったので、この曲が耳に残っていて……。好きなんですよ、この曲」

東海林さんはギターを元の場所に戻しながら、照れ笑いをしながら言った。

「実は私たちもクリスチャンです。神を賛美し、感謝することは大切なことね。お客さんの前ではお祈りしませんが、いつも心の中でお祈りしてます。今日、バスが釣れたのも、こうやっておいしい食事ができたのも神のみ恵みです。感謝の気持ちを忘れないでください」

ポールさんはやや熱い口調でそう語った。東海林君は真剣な目でポールさんを見つめ返していた。

僕は神様などいるかどうかわからなかったが、確かに感謝の気持ちは大切だと思う。

「お礼に私も一曲、お聞かせしましょう」

ポールさんは窓の脇にあるピアノに向かった。学校の音楽室にあるピアノは、シロナガスクジラの口のような大きなピアノだが、ここにあるのは家具調のかわいらしいピアノだ。

心地よい和音が響いた。ポールさんが何やら英語で歌い出す。

「ビートルズのレット・イット・ビーだな」

どうやら父はこの曲を知っているらしい。ポールさんの声は少しわ枯れているが、深みのある声だ。

「レット・イット・ビーってどういう意味？」

僕が父に尋ねる。

「なすがままに、というさ」

「ナスがママ？」

「そのままにとか、自然にまかせてってことさ」

「ふーん」

深みのある声と繰り返される「レット・イット・ビー」という言葉は、僕の頭の中をグルグルと回った。

それはブラックバスの問題や東海林君の心の傷を、成り行きにまかせると言っているようにも聞こえる。

ポールさんが歌い終わり、みんなでまた拍手をした。ポールさんは照れることなく、自信たっぷり「イエーイ！」と叫んでいる。

まるで自分の演奏に酔っているようだ。

ポールさんが新しいウイスキーを開けた。父はあまり飲んではいないが、ポールさんはかなりの酒豪である。そして豪快な笑いが絶えない。楽しい夜だった。

僕はふと思った。アメリカ人と日本人がこうして仲良く暮らせるのに、どうしてブラックバスは日本の魚と仲良く暮らせないのかと。

その夜は早めに床についた。翌朝は早くから釣りをするらしい。

だがポールさんと父はテラスで何やら話をしている。時折、英語交じりの会話が聞こえた。

「なあ、さっきの賛美歌、すごくよかったよ」

僕は隣のベッドに横たわる東海林君に話しかけた。

「ああ、あれね。教会でよく聞いていてさ。自然と覚えちゃったんだ。俺は洗礼も受けていないし、心の底から神様を信じているわけ

じゃないけど、あの曲は好きなんだよな」

東海林君が天井を見つめながら言った。

「ギターはどこで覚えたの？」

「お父さんのギターを触っているうちにね。最初は見よう見まねで、そのうち教本を買ってきて独学で覚えたのさ」

「もしかしてギターで賛美歌を歌ったのは、お父さんへの報告だったんじゃないの？」

「ピンポン。ご名答だよ。お父さんが釣ったバスは52センチが最高だった。俺はそれを1センチ上回る53センチを釣ったんだ。ついにお父さんを越えたぞ。でも、これもお前のお父さんのお陰だよ」  
東海林君が僕の方を向いてニツコリと笑った。その笑顔は心の底から感謝をしているような笑顔だった。

「ああ、心地いい疲れだな」

東海林君があくびをしながら、体を伸ばした。僕もつられてあくびをする。自然と涙が出る。あくびをすると涙が出るのはなぜだろうか。

いつの間にか東海林君の寝息が聞こえた。規則的に繰り返される呼吸は、子守歌のように僕を眠りへと誘った。自然とまぶたが重くなる。

外で豪快な笑い声が聞こえたような気もする。しかし羊を数える必要はなかった。

翌朝は四時過ぎには目が覚めた。心なしか右手が痛い。昨日、たくさんブラックバスを釣ったせいで、筋肉痛にでもなったのだろうか。

僕がモゾモゾと動き出したので、東海林君も目を覚ましたようだ。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

東海林君は眠たそうな目をこすったが、すぐにパチツと目を開いた。おそらく早朝の釣りかしたくてウズウズしているはずだ。朝と

か夕方はよく魚が釣れる時間帯なのだ。

父は深酒が過ぎたのか、ゴーゴーといびきをかいて寝ている。だが父が車を出してくれなければ釣りはできない。少々かわいそうな気もしたが、僕は父の体を揺すった。

「お父さん、朝だよ。釣りに行こうよ」

「うーん。もう少し……」

寝ぼけた声で父が返す。半分開いた目もまた閉じてしまった。

「会社じゃないんだよ。釣りだよ、釣り！」

僕が大きな声を耳元で上げると、ハツとしたように父が跳び起きた。

「ああ、そうだったな。支度でもするか」

父はヒバリの巣のようになった頭をかきながら、あくびをするとベッドから足を降ろした。

ポールさんはまだ寝ていた。僕たちを見送ってくれたのはキャサリンさんだった。

父はハンドルを握り、車を竜山湖へと走らせる。昨日のお酒が残っていないか心配だったが、僕の父はかなりの酒豪だ。ふだんは母にお酒の量を抑えられているだけである。おそらく心配はないだろう。

竜山湖は朝日にキラキラと輝いていた。昼間とも夕暮れとも違わずすがすがしい湖面の青だ。

父は昨日と同じ場所に車を停めた。

釣り支度をする前に、東海林君と僕は早速水の中を覗き込んだ。

透明な水に5、6センチ程の小さな魚が群れを成して泳いでいるのが見える。

「ワカサギだ！」

東海林君が叫んだ。

「そう、ワカサギだよ。使うルアーは何にするか、君ならわかるだろう？」

父の声が背後からした。

「もちろんミノーです」

東海林さんが振り返って、目を輝かせながら答えた。

父の手には既にミノーが握られていた。小魚の形をしたルアーだ。「これはラピッドというルアーのワカサギカラーさ。もともと溪流用に開発されたルアーなんだけど、どうも今のワカサギと同じくらいのサイズだし、動きもいい。使ってみるかい？」

僕も東海林君も父親からラピッドを受け取ると、急いで車へと戻った。もちろん釣り支度をするためである。

東海林君は相変わらず支度が早かった。僕がまだルアーに糸を結んでいる間に、もう岸辺でルアーを投げている。

父も早々に支度を済ませ、ミノーを投げ始めているではないか。僕は少しあせりながらも、ていねいに糸を結んだ。

僕が岸辺に着いた時、二人は黙々とリールを巻いていた。時折、竿先をツンツンと動かしている。

僕もルアーを投げ、二人のまねを試してみる。だが、ミノーはすぐに足元に戻ってきてしまう。

よく見ると、東海林君は時々、リールを巻く手を休めたりしている。

「ヒット！」

父が叫んだ。そう言えば、父親は昨日一匹も釣っていない。これが一匹目となる。父の竿が絞り込まれた。父は溪流用のストリームマスターという竿を使っている。イワナやヤマメを相手にする竿だから、ブラックバスが掛かると満月のようにしなるのだろう。

ブラックバスが針を外そうと、必死にもがき、水面で暴れた。しかし、しなやかな竿は魚のショックを吸収して、それを許さない。父親も竿の角度を変えながら、確実に魚を寄せていた。

父がブラックバスの口に指を突っ込んだ。そして抜き上げられた魚体は、あまり黒くない銀色だった。サイズはそれほど大きくないが、きれいな魚だ。

ブラックバスは自分が釣られたことが信じられないような顔をし



て、エラをリズミカルに動かしている。時々尾ビレを動かして抵抗するが、しっかりと下アゴをつかまれているので逃げることはできない。

「やっぱり、トウイツチとポーズですか？」

東海林君がリールを巻きながら父親に尋ねた。

(トウイツチ？ ポーズ？)

それは僕にはわからない釣り用語だった。

「そうだね。軽くトウイツチングして、少しポーズを入れた方がいいみたいだね」

父が針を外しながら答えた。それにしてもワカサギに似せたルアーに食らいつくとは、やはりブラックバスは小魚を食い尽くす害魚なのだろうか。

「トウイツチっていうのは、竿先をツンツンさせながらリールをまくことで、ポーズっていうのは、リールを巻くのを止めることさ。それをテンポよくリズミカルに行うんだ」

東海林君が初心者 of 僕にていねいに解説してくれた。

僕はもう一度ミノーを投げて、言われたとおりやってみる。だが意識し過ぎていいのか、どうもギクシャクしてしまう。

「リールを巻くのがまだ速いよ。それじゃあ、バスは追いつけないぜ」

「だってブラックバスは他の魚を食べるんだらう？ だったら猛スピードで追いかけてくるんじゃないの？」

僕はブラックバスが大きな口を開けて、猛烈なスピードでワカサギを大量に飲み込む姿を想像していた。

「ワカサギの体の形と、ブラックバスの体の形を比べてごらん」  
父がポツリとつぶやいた。

僕は昨日の夕方に東海林さんが釣り上げた、あのでっぷりとした大きなブラックバスの姿を思い出した。それに比べてワカサギは流線型で細長い。

「ワカサギは細長いから水の抵抗も少なくてスピードが出るのさ。」

一方、ブラックバスはズングリムツクリしていて、それほど泳ぐのが得意な魚じゃないんだ。ワカサギがスポーツカーだとしたら、ブラックバスはワゴン車だな」

「じゃあ、何でミノーで釣れるの？」

「だからトウイツチやポーズで弱った小魚を演出するのさ」

僕の疑問には東海林君が答えてくれた。

「ブラックバスは弱った小魚くらいしか食えないのさ」

意外な事実だった。何でも食い荒らすどう猛なギャングというレツテルを貼られた魚の正体は、実は意外と狩りが下手くそらしい。

「まあ、泳ぐ力のない稚魚なんかは別だけどね。それでも何でもかんでも食い荒らすというのは違うと思うな」

父が補足した。

僕はまたミノーを投げた。複雑な思いでリールを巻く。

やっぱり巻くスピードやポーズの入れ方などがよくわからない。

竿先をツンツンさせながらリールを巻くと、どうしても速く巻き過ぎてしまう。

かといって、ツンツンしなければ、ミノーはただの棒のようで、魅力的な動きをしてくれない。

「ヒット！」

今度は東海林君が叫んだ。僕はうらやましそうに彼を見た。自分の技量のなさが情けなかった。

その時、僕の糸の先が何かにひったくられたかと思うと、急に手元に重みが伝わった。竿は折れそうなほどに曲がっている。

「き、きたっ！」

「おお、ダブルヒットか」

父親が驚いたように僕たちの方を向いた。

「健也、竿を立てろ！」

父親が叫ぶ。父親も僕の掛けた魚が相当の大物であることを理解したらしい。

チラッと横目で見ると、既に東海林君はブラックバスを手にして

いた。

僕の魚は湖底へとうねるように潜り、一向に姿を見せない。かと思つと弾丸のように走りだす。リールからジリジリと糸が引きずり出されていく。

「こりゃ、バスじゃないな」

父がつぶやいた。

糸を巻いては引き出され、また引き出されては巻く。そんなやり取りを何分続けただろうか。

ようやく魚が足元に寄ってきた。50センチほどはあろうかという大きな魚だ。

魚が一瞬、体を横たえた。その瞬間に見えたのは赤紫のきれいな帯だった。

「ニジマスだ。慎重に寄せろ」

体力を使い果たしたニジマスは最後、ユラーツと岸边に寄った。

父がエラに指を入れ、尾をつかんで岸へと引きずりあげる。

そこに横たわっていたのは、以前にバーベキューで行ったマス釣り場のニジマスとはまったく違っていた。胴体は厚みがあり、顔付きもどう猛な感じがする。それに歯も鋭い。これではブラックバスのように下アゴをつかんで抜き上げることとはできないであろう。

「ジャスト50センチ」

メジャーを当てた父が言った。

「外道（目的以外の魚）だけどすごいな。迫力満点だぜ」

東海林君もニジマスに見とれている。

「ニジマスもワカサギを食べるの？」

「もちろん。このくらいの大型になると追い回して食べるよ。この湖ではブラックバスより、むしろニジマスの方がワカサギを食べているだろうね」

父がパンパンに膨れたニジマスのお腹をさすりながら言った。

「でもニジマスって、もともと日本にいる魚でしょ？」

「違う、違う。ブラックバスと同じ、アメリカから来た魚さ」

父は笑って答えた。

「ニジマスはよくマス釣り場なんかで馴染みのある魚で、養殖も盛んだから日本の魚だと思われがちだけど、移植されたのはブラックバスより遅いんだ。太平洋戦争で日本が戦争に負けて、アメリカの兵隊さんが日本に来て釣りを楽しむために持ち込まれた魚なんだよ。よくナントカ国際マス釣り場ってあるだろう。あれは国が経営してることじゃなくて、昔、外国人が釣りをしていたから『国際』なのさ」

「へえー、知らなかった。ブラックバスの方が先輩なんだね。そう言えば、村の笹熊川にもニジマスがいるよ」

「それは漁協が放流しているのさ。この湖もそうさ。ニジマスは日本では一部の川や湖を除いて自然繁殖がほとんどできないんだ。ただ養殖は簡単だからね」

横たわったニジマスはまだ時折体をくねらせてもがいている。この魚も人の手で生まれ、育てられたのだろうか。

僕はこの時、ふと思った。外来種のブラックバスを駆除する一方で、同じ外来種のニジマスは各地で盛んに放流されている。これは人間が生命を手のひらで、オモチャのようにもてあそばせているのではないかと。少なくとも、子供の僕には納得できない話だった。

「ニジマスは流線型だな」

東海林君がつばやいた。

「そうだな。泳ぐスピードはブラックバスよりはるかに速い。それにニジマスは湖を回遊しているんだ。ふだん泳いでいる層もワカサギと一致する。漁協関係者の中にはブラックバスのせいでワカサギが減ったと言う人もいるけど、この湖のワカサギを食べているのはブラックバスより、むしろこのニジマスかもしれないな」

「他にも小魚を食べる魚っているの？」

僕は身近なニジマスという魚が、他の魚を襲って食べるという事実を知って、少なからず衝撃を受けた。あのイクラやミミズで釣ったニジマスが、そんな凶暴な魚には思えなかったからである。だか

らもつと身近なところにも他の魚を襲う魚がいてもおかしくはないだろう。

「そりゃいるさ。日本にだってイワナやヤマメ、ナマズにバス、ウナギ……。数えればきりが無いよ。それにふだん魚を食べないと思われているコイやウグイだって小魚を襲うことがある」

「コイやウグイが？」

僕には信じられなかった。あのおとなしそうなコイやウグイが他の魚を襲って食べるなんて。

「そうさ。食物連鎖って言葉を知っているだろう？」

「うん。食って、食われてってことでしょ？」

「そうさ。ブラックバスの卵だって、けっこう他の魚に食べられているらしいよ」

ウグイがイクラで釣れるならば、ウグイがブラックバスの卵を突っついてもおかしくはないだろう。

「それにブラックバスの稚魚は共食いもするしな。そんなに繁殖力が旺盛とは思えないんだけど、イメージ的に悪者にされている感じがするなあ」

東海林君がため息交じりに言った。

「よいしょ」

僕がニジマスのエラに指を入れ、持ち上げた。ずっしりとした重量感が手だけではなく、腰や足にも伝わる。もうすぐ息絶えようとしているニジマスの口がわずかに動いていた。

「これをおみやげにしたら、ポールさんたち喜ぶぞ」

父親が笑った。僕も得意そうな顔でニジマスを眺めた。赤紫のラインが美しかった。

でも不思議だった。なぜトウィッチもポーズもろくにできない僕のミノーに食らいついたのだろうか。

「何で、僕のミノーにこいつは食らいついたのだろうか？」

僕は素朴な疑問をそのままぶつけてみた。

「健也はリールを巻くスピードが速すぎたんだろ。あのスピード

ではバスは追いつけない。たまたま回遊してきたニジマスが食らいついたらんたろうな」

「そうか」

僕は自分のテクニクで釣ったのではないような気がして、少しがっかりした。

「まあ、運も実力のうちさ」

東海林君が僕の肩を叩いた。僕は振り返って笑顔を返した。ニジマスの重みが心地よかった。

ペンションに戻ると、ポールさんもキャサリンさんも僕の釣り上げたニジマスを喜んで受け取ってくれた。

「オー、ビッグなレインボーね。これ、スモークすると最高！」

ポールさんはニジマスにキスをしながら喜んでいる。

僕たちはペンションで朝食を済ませた後、村へ帰ることにした。

ペンションを去る時、ポールさんもキャサリンさんも僕たちを抱き締めてくれた。一晩宿を借りただけなのに、何だか何年も長い付き合いをしているようで、別れが少し寂しい気がした。何だか、ずっと東海林君とここにいたいような気もした。それでも母の顔がまぶたに浮かぶと、家にも帰りたい。複雑な心境だった。

## 第五話

帰りは父の提案で、竜山湖の周囲をドライブしていくことになった。

しばらくは原生林の中がよく整備された道路を走る。

すると、急に視界が開け、民家が現れた。その集落の中央に一本の川が流れている。父はその川に架かる橋のたもとで車を停めた。

「これが竜川。竜山湖にそそぐ川だよ。ワカサギはこの川に遡って産卵するんだ」

東海林君も僕も車から降り、川面を眺める。透明に近い水がさらさらと流れていた。

「何か、飲めそうな水だね」

「果たしてそうかな？」

父が笑ってそう言った時、ジャバジャバという音が急に聞こえた。それは竜川の護岸からポツカリ開いた排水口から流れ出る汚水だったのだ。

「見た目にはわからないだろうけど、この辺の集落にはまだ下水道が完備されていないんだ。だから生活排水はすべて竜川、そして竜山湖へ垂れ流しさ」

父が腕組みをしながら言った。そして集落の向こうにある空き地を指さす。

「あそこは今、造成中でね。これから家がたくさん建つんだ。もちろん下水道は完備されていない。ますます川は汚れるだろうね」

「これじゃあ、ワカサギも減るな」

東海林君が排水溝と川面を交互に眺めながらつぶやいた。

「そういうことだ。今は綺麗に見えるこの川も湖も、確実に汚くなっているんだよ。ところで、次のところへ行こう」

「次のところって？」

「最高のロケーションさ」

東海林君も僕も父に促されて車に乗った。車はすぐさま走りだした。心なしか、やや荒っぽい運転のような気がする。

車は湖の周りを半周ほどすると、コンクリートで固められた護岸の駐車場で停まった。道路の向かい側には大きなみやげ物屋がある。いかにも観光地といった感じだ。

駐車場ではアイスクリームを食べている親子連れや、湖をバックに記念写真を撮っているカップルなどでごったがえしている。みやげ物屋からは派手な宣伝のアナウンスの音が響いており、やかましいことこの上ない。

父は湖面を覗き込んだ。さすがに、ここで釣りをしている人は一人もいない。

「ここは昔、葦の原だったんだ。それをコンクリートで固めてみやげ物屋の駐車場にしてしまったんだよ」

父親がやるせないように言った。

「確か、葦は小魚の隠れ家になったり、産卵場所になったりするんですよね」

東海林君が僕の父親に確かめるように言った。

「そのとおりだよ。その葦を人間は刈ってコンクリートで固めてしまった。これでは小魚も減るだろう」

「在来魚の減少は、何もブラックバスだけのせいじゃないってことですよね」

東海林君が僕の父親に同意を求める。

「私もそう思うよ。ブラックバスは確かに肉食性の魚だが、遊泳力の強い魚ではないから、魚の捕食率は低いと考えた方がいいだろう。むしろアメリカザリガニなどの甲殻類や、カエルなどの両生類などの方が簡単に捕食できるはずだ」

「それじゃあ、ブラックバスの害魚論は濡れ衣ってわけ？」

僕は父の方を向き、聞いたですように言った。その口調は少々きつかったかもしれない。

「さあ、それはわからん。ただ、小魚が減っている理由のすべてを



ブラックバスのせいにするのはどうかと思うね」

父は携帯灰皿を取り出すと、おもむろにタバコに火を点けた。めったに子供の近くではタバコを吸わない父が、この時ばかりは我慢できないように肺に煙を吸い込んだ。

「そんなの筋が通らないよ」

僕は風で波が立ち、魚のウロコのように輝く湖面を眺めながらつぶやいた。

「大人の世界なんて筋の通らないことばかりさ……」

父が吐き捨てるようにつぶやいた。めったに愚痴を言わない父がこんなことを口にするのは珍しい。

「人間は自分の犯した過ちのすべてを認めたくないんだよ。だからいつも弱者に責任を押し付ける。ブラックバス問題だってそうさ。確かにヤミ放流などの問題はあるが、持ち込んだのは人間だ。それをただ駆除すれば済むという簡単な問題ではないだろうな」

父は既に二本目のタバコに火を点けている。まるでストレスを吐き出すように、言葉と煙を吐き出した。おそらく父も会社で道理の通らない理不尽な体験をたくさんしているに違いない。僕や母の前では一切、愚痴をこぼさない父だが、ブラックバス問題を通じて大人の社会の嫌な一面をかいま見たような気がした。

「ブラックバスは勝手に人間の手で日本に誘拐されて、用済みになったら殺されるわけか。人間なら誘拐殺人だな。それにもともとブラックバスは日米親善のために移植された魚だぜ。人間の身勝手にも程があるっていうもんだ」

東海林君が吐き捨てるように言った。その目はやり場のない怒りをたたえている。

「この湖は漁協がブラックバスの存在を認めているみたいだけど、他の湖や池ではやっぱり殺されちゃうのかな？」

僕はため池の水を抜かれたことを思い出していた。

「なーに。野生の生物は思ったより自分で活路を見いだすものさ。ブラックバスだって、そうやすやすと人間の思いどおりに駆除され

るかな。そういった意味では、ふだん文明に頼ったり、ストレスにさらされたりしている人間の方がずっともろい生物なのかもしれない

父は笑いながらタバコをもみ消した。その笑いがどこか皮肉っぽい。

「それに、エゴで自然をかき乱すのも、人間という生物の特性というか、自然現象の一部なのかもしれない」

その父の言葉は子供心ながらも、どこか真理を語っているような気がした。

太陽はいずれ膨れ上がり、地球を飲み込むという話を、僕はいつか本で読んだことがある。その時、地球上のすべての生物は死滅する。何億年もの先の話だが、地球は確実に「死滅」へと向かっているのだ。だとしたら、今僕たちがしなければならぬこととは一体何だろう。

父は携帯灰皿のフタをパチンと閉めると、湖に背を向け、車に向かって歩きだした。

「そろそろ帰ろうか」

そう言う父親の背中がどこか寂しかった。今までに見たことのない背中だ。

東海林君も僕も車に乗り込んだ。車はすぐさま僕たちの玉置村へと向かって滑り出した。

「どうだ、楽しかったい？」

そう話しかける父の声は、いつもの明るい父親の声に戻っていた。ハンドルを握る手も軽そうだ。父は音楽を少し大きめの音でかけた。僕の知らない英語の歌だ。

何曲目だっただろうか。あのポールさんが歌った「レット・イト・ビー」が流れた。繰り返される「レット・イト・イト・ビー」というフレーズが、また頭の中を駆け巡る。そうだ。悩んでも仕方がない。今はブラックバスを静かに見守り、成り行きに任せるしかない。僕たちにできることはそのくらいのことだ。

ただ、勝手に放流するヤミ放流だけはやってはなるまい。それは最低限の釣り人のルールだと思った。竜山湖のようにブラックバス  
の存在を認めてくれていている湖もあるのだから。

車はグネグネ道を東海林君と僕を左右に振りながら、進んで行っ  
た。

僕の家の前では僕の母と、東海林君の母親が外に出て待っている  
のが遠くからでもわかった。

車が家に近づくと、僕の母はいつもの笑顔で迎えてくれた。一方、  
東海林君の母親は少し不安げな表情を隠せない。

「お帰りなさい」

「ただいまー！」

僕は元気一杯に答えた。

東海林君の母親は体を少し震わせたかと思うと、彼に駆け寄り、  
思いきり抱き締めた。

「正がない間、私、不安で不安でしようがなかったのよ」

東海林君の母親の目からは大粒の涙があふれ出している。

僕の母がそつと東海林さんの母親に肩に手を置いた。

「秀美ちゃん、かわいい子には旅をさせるって言うでしょ？ きつ  
と正君もいい経験をして帰ってきたと思うわよ」

父が車から降りてきた。

「秀美ちゃん、君の息子さんはたいしたもんだ。すごく大きなブラ  
ックバスを釣り上げたぞ。今、思い出を印刷してくるよ」

父は道具の片付けもそこに、家の中へと向かった。

「お母さん、俺、お父さんが釣った最高記録を抜いたぜ。昨日の夜、  
賛美歌を歌ってお父さんに報告したんだ」

東海林君の母親が涙をぬぐって、やっと笑った。その笑顔はいか  
にも優しそうな母親の笑顔だった。

「そう、よかったわね。きつとお父さんも天国で喜んでいるわ」

「それとね、初めてブラックバスを食べたんだ。アメリカ人の親切

なおじさんと知り合いになってね。その人のペンションに泊めてもらったんだ。ブラックバスって案外とおいしいもんだぜ。お母さんにも食べさせたかったなあ」

「じゃあ、今度釣ってきたら逃がさないで、持ってきてちょうだい」「そうだね。じいちゃんやばあちゃんにも食べさせてみるか」

東海林君が得意そうに鼻の下をこする。

父が家の中から出てきた。手には一枚の写真が握られている。

「秀美ちゃん、これを見てごらんよ」

そう言っただけで父が差し出した写真は、東海林君と僕と父とで撮った、あの53センチのブラックバスの写真だった。みんな頬が丸くなるくらい笑っている。

「本当、すごいブラックバス。それにいい笑顔ね」

東海林君の母親が目を細めて笑った。息子の満足そうな笑顔を見て、母親としても満足なのだろう。

「これを旦那さんの遺影の前に飾ってあげなさい」

「はい。この度は本当に何から何まで、どうもありがとうございます」

東海林君の母親が深々と頭を下げた。その下げた頭から、また涙が地面に落ちる。

「いいのよ。この村では子供はみんなで育てるんだから。いいえ、この村だけじゃない。子供は社会で協力しあって育てるのよ。それが私たち、大人の務めよ。今の秀美ちゃんは気持ちを整理して、自分のこれからの道をどうするか決めること。それが先よ」

母が諭すように背中をさすりながら語りかけた。

東海林君の母親はうなだれたまま、「うんうん」とうなずくものの、両手で顔を覆ったまま、しばらく動けなかった。

「私、この村を出て行った人間なのに……」

東海林さんの母親がうずくまったまま、ポツリとつぶやいた。

「そんなの関係ないさ。秀美ちゃんは秀美ちゃんさ」

父親が釣竿を車から降ろしながら、明るく言った。

「そうよ。私たち、昔から仲良しだったじゃない。そりゃ、秀美ちゃんは東京の大学に進学して、あっちで結婚しちゃったけど、ここはあなたの故郷なのよ。故郷は帰ってくる者を拒んだりしないわ」東海林君の母親が急に立ち上がり、僕の母にしがみついた。その途端、大きな声で泣き出した。まるで笹熊山の頂上まで響くような声で泣いたのだ。

僕の母がそつと背中をさすってやる。その光景を東海林君はただじっと見つめていた。いつか彼が「一杯一杯だ」と言っていた気持ちだが、少しはわかるような気がした。

それからというもの、学校で東海林君とは、釣りの話題をよくするようになった。ただ、東海林君の話し相手は僕だけだ。他のみんなとは、どうしても距離が縮まらない。

そして、事件はある金曜日の五時間目に起きた。

その日の五時間目は家庭科だったのだが、学級委員長の小森さんの裁縫箱が消えたのだ。みんなで教室中の隅から隅まで探すが、小森さんの裁縫箱はどこからも出てこない。

このクラスにわざと人の物を隠すような、意地の悪いやつはいない。

小森さんは穏やかだし、頭脳明晰、それにちよっぴりかわいい女の子だ。

教室中がガヤガヤとした。

そのうち、ガキ大将の高田君が東海林君の前に仁王立ちになって、険しい顔をして言った。

「小森さんの裁縫箱を隠したの、お前だろ？」

「何で俺がそんなことしなきゃならねえんだよ」

東海林君と高田君が睨み合った。

「お前はブラックバスだ。よそ者だ。この村には人様の物を隠すような意地悪をするやつはいねえ。そんなことするやつは、よそ者に決まっている」

「何だと。俺も村人の一人だ。それに俺がやったという証拠でもあるのか？」

緊迫した空気が周囲に立ち込めた。それまで騒がしかった教室中がシーンと静まり返る。

もうすぐで張り詰めた空気が爆発しそうな時だった。教室の扉がガラガラと開いた。そこに立っていたのは小森さんの母親だった。

「妙子、お前、裁縫箱を忘れたらどう？」

小森さんの母親が裁縫箱を差し出す。小森さんはバツが悪そうにそれを受け取った。

「みんな、ごめんね。騒がしちゃって」

小森さんはみんなにペコリと頭を下げた。東海林君も高田君も少し気の抜けたような顔をしている。

小森さんは二人に歩み寄ると、深々と頭を下げた。

「東海林君は立派な村人の一人だよ。私たちの仲間だよ。高田君もいつまでも意地張っていないで、仲良くしなさいよ。でも、今日は私のドジで迷惑かけちゃってごめんね」

「お、おお……」

高田君は半歩後ろに下がって、そのまま背を向け、席に着いた。

一方、東海林君はおもしろくなさそうな顔をしながら、秋のイワシ雲を眺めている。

(僕たちがブラックバスなら、お前はウツカリカサゴだ)

僕は振り向きざまに、何やらブツブツと小声で独り言をつぶやいている高田君に向かって、心の中でつぶやいた。僕の頭の中には、かつて釣り雑誌で見たことのある、深海から釣り上げられ、目の飛び出した間抜けなウツカリカサゴの表情が浮かんでいた。本当は声に出して言いたかったが、口に出せば、またケンカになる。心の中でもつぶやけば、少しは僕の気も晴れるというものだ。この前、高田君に父の悪口を言われた仇を討った気がした。

ただ、気まずい空気が教室を支配していた。

下校の時間となり、東海林君と僕が並んで校門を出ようとした時、そこに高田君が待ち構えていた。

高田君は僕たちの前に立ち塞がる。

また、張り詰めた空気が周囲に立ち込めた。

「お、おう、あのよー、そのー、さっきは疑ったりして悪かったよ」  
高田君は視線をそらしながら、丸坊主の頭を指でかいてバツが悪そうに切り出した。

「そのことなら、もういいさ」

東海林君のその一言で、空気が少し緩んだ。

「明日よー、笹熊川の上流に釣りに行こうと思っただけど、お前らも一緒に行かねえか？」

東海林君と僕は顔を見合わせた。高田君が東海林君を釣りに誘うとはどういう風の吹き回しだろうか。

「何が釣れるんだ？」

東海林君は高田君の目をしっかりと見つめて尋ねた。

「イワナやヤマメだよ。よくニジマスも釣れるかな。けっこう釣れるんだぜ」

「よし、乗った！」

東海林君の瞳が輝いていた。

「じゃあ、八幡様の前に七時に自転車で集合な」

そう言うと高田君は駆け足で突っ走っていった。まるで逃げるように……。

僕は東海林君と溪流釣りの話をしながら帰った。

「よし、俺はルアーでイワナやヤマメを釣ってやるぞ」

東海林君が息巻く。僕の父もルアーで溪流魚を釣っているから、彼がルアーで狙いたいと思うのも当然だろう。

東海林君の足取りは軽かった。僕もつられて足取りが軽くなる。何よりも嬉しかったことは、あの高田君が素直に謝り、釣りに誘ってくれたことだった。もともと高田君と僕とはそんなに悪い仲ではない。ブラックバス問題を挟んで、こここのところ関係がギクシヤク

していただけだ。父の悪口のことばまじりなやつと思った。



## 第六話

その晩、父に明日、笹熊川でルアー釣りをしたいと伝えた。すると父は僕を部屋に招き入れ、何本かの竿を握らせてくれた。

「これなんかどうだ？ パームスのシルフアーSV56S。グラスロッドだが、最高の調子だぞ」

既にお酒が回り、気分の良さそうな父親は竿先を手で曲げて、自慢げに言う。

「グラスロッドって？」

「今の竿はだいたいカーボンという繊維で作られているのはお前も知っているだろう？」

「うん」

「ところが、こいつはグラスという繊維を使っている。グラスの方が粘りがあつて魚をバラしにくいのだ」

「ふーん」

お酒が入った時の父親の釣りの解説は、少々マニアックになる。

「見ろ、この理想的なベンディングカーブを」

僕には理解できない横文字を並べ立て、一人の世界に入ってしまったのだ。

「ところで明日は秀美ちゃんの息子も一緒に行くのか？」

「うん。それと農家の高田君」

「そうか。秀美ちゃんの息子にもパームスのロッドを使わせてやりたいな」

そう言つて父親が手にしたのは、やや長めの竿だ。太さはこちらの方が、やや細いだろうか。

「こっちはシルフアーのSGS60S。カーボンロッドだよ。彼はミノーの扱いがうまいから、この竿を気に入ると思うよ」

「でも高い竿なんですよ？ いいの、借りちゃって？」

「ははは、心配するな。でも折るなよ。もう廃盤になっている貴重

なロッドだからな」

お酒が入った時の父は気が大きくなる。それに父はどうやら、僕たちに自分の竿を使わせたいようだ。

「わかった。遠慮なく借りるよ」

「えーと、リールはと、健也はダイワのトーナメントS2000iTを使え。秀美ちゃんの息子にはアブのカーディナル33を貸してやる。古いリールでちょっと使い勝手は悪いが、彼ならば使いこなせるだろう。それにメンテナンスはちゃんとしてある」

カーディナル33は緑色の角張った独特なデザインのリールだ。それに比べてダイワのトーナメントS2000iTは最新型ではないが、白くて現代風のデザインをしている。対照的なリールだった。「新しいライン（糸）を今夜中に巻いておいてやるし、使うルアーも選んでおいてあげるから、子供は早く寝なさい」

父が持ち出した糸は、それは派手派手しい黄色い蛍光色をしている。果たしてこんな糸で、警戒心の強いイワナやヤマメが釣れるのだろうか。

「この色が不思議かい？」

僕の疑問を見透かしたように父が笑った。

「うん……」

僕は自信なさげにつぶやいた。

「この色は意外と水の中では見えないものなんだよ。それに水の上ではよく見え、ルアーの位置が確認できるから腕も上達するってわけさ」

「なるほど」

僕は父の説明に納得した。今は僕よりずっと腕のいい父の言葉を信じるしかない。

「じゃあ、糸を巻いておいてね。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

僕は父の部屋を出て、一階の電話へと向かった。もちろん東海林君に電話をかけたのだ。少し遅い時間だったが、まだ起きているだ

るつ。

電話口に出た東海林君に竿とリールを父親が貸してくれることを話したら、彼は興奮気味に言った。

「本当か？ 本当にパールムスのロッドとアブのリールを貸してくれるのか？」

電話の向こうから彼の睡が飛んできそうだった。

「ああ、ぜひ使ってくれっさ」

「よし、明日は釣りまくるぞ」

元気な声が飛び込んできた。電話線が震えているようだった。

その後、僕は自分の部屋に入り、ベッドに横になった。雨戸もカーテンも閉めなかった。

窓の外には転がりそうなほど丸い月が浮いていた。月の光は優しく僕の部屋の中を照らしている。温かく、心地よい光だった。僕は月の光に守られながら眠りについた。

翌朝、僕は目覚まし時計よりも早く起きた。もっと驚いたことは、父親が僕よりも早く起きていたことだ。

「これ、そろそろ健也に合うかな？」

父が外でウェーディングシューズを出していた。ウェーディングシューズとは、底にフェルトの生地を貼った靴のことで、それを履けば川の中でも滑らない。

「お父さん、おはよう」

「ああ、おはよう」

そのウェーディングシューズはフェルトが真新しく張り替えてあった。僕のためにここまでしてくれる父に感謝の気持ちで一杯だった。

「今日はこれを持っていけ」

父は小さなルアーボックスを僕に二つ手渡した。

一つは小魚の形をしたミノーがぎっしりと詰まり、もう一つには金属でできたスプーンというルアーが輝いている。

「ありがとう。お父さん」

僕はしっかりと父の目を見て言った。父はにこやかに笑ってうなずいた。

「朝ごはんの準備、できたわよ」

母親の声ですがすがしく響いた。それにしても今日はいい天気だ。ちぎれた雲が夏祭りの綿菓子のように飛んでは溶けていく。

僕は深呼吸を一回すると、食卓へと向かった。

八幡様の前では、既に東海林君も高田君も集合していた。二人は何やら語り合いながら洗っている。そんな二人を見て、僕はホツと胸をなでおろした。

東海林君はウエーダー（腰までの長靴）を履いている。一方、高田君はアユ釣り用のタイツを履いていた。

「君たち、そんな格好で自転車、こげるのかい？」

「なせばなる、だぜ」

高田君が豪快に笑った。

僕はといえば、短パンにウエーディングシューズと身軽だ。まだ九月といえば残暑が厳しい。この格好が夏の溪流釣りには向いていると自分では思っている。もつとも、蚊やヤマビルなど、吸血虫の類を気にしなければの話だが。

「それじゃ、行こうぜ」

高田君の掛け声で僕たちは、笹熊川の上流を目指して自転車をこぎだした。

勾配の急な林道を普通の自転車でガタガタと走るのだ。前を走る東海林君も高田君もブレて見える。

「ここらで休憩しようよ」

「なんだ、もうネを上げたのか？」

高田君が笑いながら振り返った。僕は自転車を降り、道端に腰掛けた。すぐ下を笹熊川が流れている。

僕は乱れた息を整えるように深呼吸をした。その時、目に入った

のは、山の木々だった。新緑のころは青々としていた葉が、少し色あせて見える。もう少し秋が深まれば綺麗な紅葉が見られるのだろう。

「この辺でも釣れるんじゃないか？」

東海林君が言った。

「そうだな。俺も上流が穴場だつて聞いただけで、どの辺とはくわしくは知らねえんだ」

高田君が水面を覗き込んだ。東海林君も僕も後に続く。

笹熊川の流れは太く、水の量も豊かだった。段々になった流れは瀬と淵を交互に作り出し、生命の気配を伝えてくれる。ところによっては、釜のような淵で水が巻き返し、かと思えば、魚さえも留まることができそうにないくらいの急流もある。下流の穏やかな溪相とは違って、自然の牙を剥き出しにした流れがそこにあつた。

「ずいぶんと水の量が多いな」

東海林君がつぶやいた。その声もゴウゴウと流れる川の音にかき消されてしまひそうだった。

「この川は豊かだからな。だから魚がいるのよ」

高田君が故郷を自慢するように言った。

笹熊川の水源である笹熊山はブナやナラの原生林で覆われている。ブナやナラの根は水を溜める力があり、それが安定した水量につながっていると父親から聞かされたことがある。都会周辺の山林では、杉などの植林により、鉄砲水が起ることも度々あるそうだ。杉は木材としては良い材料だが、根は水を溜める力がないのだとか。

「よし。じゃあ、ここから釣り始めよう」

高田君が元気良く、自転車に戻った。僕たちも後を追う。

僕は東海林君にシルファアのSGS60Sとカーディナル33を渡した。

「サンキュー。あこがれのロッドとリールを使うことができて嬉しいよ。お前のお父さんには本当に感謝だな」

さっそくりールをセットした東海林君が竿を振った。それは風を

切り、ヒュツという心地よい音を立てた。

「おいおい、ここでブラックバスを釣るつもりか？」

ルアーの道具を見た高田君が慌てたように叫んだ。

「まさか。これでイワナやヤマメを狙うのさ」

東海林さんが笑って答える。

「ルアーでイワナやヤマメを？」

僕がルアーボックスを開いて見せた。高田君は興味津々でそれのぞき込む。

「よく笹熊川でルアーを投げているやつを見かけるけど、本当にこんなので釣れるのかよ？」

「俺のお父さんは実際に釣っているよ」

「信じられねえな」

東海林君の手がミノーに伸びた。いつかブラックバスを釣ったらピッドというルアーだ。

「俺が証明してやるよ」

そう言うと、東海林君は素早く糸をルアーに結んだ。そして、川原へと降りていく。

高田君も僕も釣り支度に取り掛かった。高田君は餌釣りだ。どうやら餌はふんぱつしてイクラを用意したらしい。ふだん餌釣りをする人たちは、よく石の裏をひっくりかえして、カゲロウの幼虫であるカワムシを採ったりしている。

「なんだ、桑原もルアーか？」

高田君があきれたように言った。

「うん。ちょっと試してみようと思ってね」

僕は少し照れ臭そうに言った。そして糸の先にスプーンを結ぶ。スプーンはその名のとおりに、さじの形のようにくぼんでいる。それが水中でヒラヒラと舞い、魚を誘惑するのだ。これで僕は、マス釣り場で一度だけ釣ったことがある。「釣った」と言うより、偶然「釣れた」と言った方が正しいかもしれない。それでも、このスプーンを信じたかった。

高田君と僕が川原に降りた時、東海林君は真剣な目付きでミノーを投げ、巻いていた。竿先をたえずツンツンと動かしている。ブラツクバスを釣った時にも見せた、トウイツチというテクニクだ。このトウイツチによりミノーは生命が与えられる。

しばらく高田君も僕も、東海林君の釣りを眺めていた。

「ヤマメを狙うなら瀬か流れの中心、イワナなら流れの脇か淵だぞ」  
高田君が背後から東海林君に声をかけた。東海林君は無言でうなずいた。

東海林君がミノーを投げる。ミノーは落ち込みの脇に着水した。その落ち込みの脇は流れが巻き返し、ちよつとした淵を作っている。東海林君が竿を立てて、細かく振った。リールはほとんど巻いていないようだった。

「ヒット！」

東海林君の竿が大きくしなった。竿はグイグイと何度も絞り込まれ、糸の先に生命がついていることを教えてくれる。

「なんだか、ヘビがとぐるを巻くような引きだ」

東海林君がリールを巻ながらつぶやいた。

「そりゃ、イワナの引きだ。ヤマメはもっとビュンっていくぜ」

「おつとと！」

東海林君の顔がこわばった。

「どうした？」

僕が駆け寄った。ふだんクールな彼が慌てる姿を見ることなど、めつたにないからだ。

「流れの中に逃げ込みやがった。こいつはスリリングでおもしろいぜ」

東海林君の口元が緩んだ。どうやら魚との駆け引きを楽しんでいるらしい。その横顔は根っからの釣り好きの顔だ。

しばらくすると口にガツプリとミノーをくわえた魚が、足元に寄ってきた。かなりの大きさだ30センチはあるだろうか。

「おお、すげえ、でけえ！」

高田君が驚きのあまり、大声で叫んだ。

網など持つていなかったため、東海林君はそのまま魚を岸边にずり上げた。川原の石の上で跳ねる魚は、30センチはあろうかという、大きなイワナだった。背中の虫食い模様といい、体の側面の白い斑点といい、綺麗な魚体だ。ヒレもピンと伸びて、まるで自分の存在をアピールしているようにも見える。

「いきなり尺物かよ。しかもルアーで」

高田君が感心したように言った。

尺物とは30センチを超えるサイズの魚を指す。一尺が30センチなのだ。

振り返ってみると、高田君の口はポカーンと開いたままだ。

「ふふふ、お前のアドバイスが効いたのさ。対岸の落ち込みの脇でルアーを潜らせて振ったら、狙いどおりにイワナが食いついたんだ。ブラックバスもいいけど、溪流は流れがあつておもしろいな。流れの中にあつ込まれると一瞬、ヒヤツとするぜ」

東海林君が照れたように笑った。

「対岸の落ち込みじゃ、俺の竿は届かないな……」

高田君は自分の竿と流れを交互に見つめながらつぶやいた。

「ルアーにはルアーの、餌釣りには餌釣りの良さがあるんじゃないかな？」

僕がそうと、東海林君も高田君も僕の方を向いた。

「そうだな」

そう先につぶやいたのは高田さんだった。

「このイワナ、お前にやるよ。家族へのおみやげにしるよ。俺は釣りを楽しむだけで十分だからさ」

東海林君が高田君に言った。彼にはポールさんにブラックバスをプレゼントした記憶が鮮明に残っていたのだろう。

「俺を見くびるなよ。数ではルアーなんかより、餌釣りの方が有利だぞ」

高田君が鼻息を荒くした。



「まあまあ、こんなところで言い争っていても仕方ないだろう？」

東海林君だつて悪気があつたわけじゃないんだから」

「わかつてるよ。しかし俺も正直、ルアーを見直したぜ。今までこんなもので魚が釣れるわけがないって半分バカにしていたんだ。でも、目の前でこんな大物をあつさりと釣られたんじゃ、認めないわけにはいかないもんな」

高田君は心底感心したように言った。

東海林君が少し照れたように笑つたかと思うと、急に真顔になつた。

「俺も正直なことを言つと、この村に来るの、本当は嫌だつたんだ。都会での生活に慣れていたからな。でも今はすつごく好きだぜ」

「そう思えば、お前はもう村人だ。俺たちの仲間よ」

高田君が笑いなから手を差し伸べた。東海林君も手を差し伸べる。二人はしっかりと、力強く握手した。東海林君が本当の村人になつた瞬間だつた。おそらく今度の月曜日に学校に来た彼は、今までとは違つただろう。

ビチビチ。

足元でイワナが跳ねた。

「いけね」

東海林君が慌てて針を外し、イワナを流れの中へ返そうとする。

「ちょ、ちよつと待てよ。逃がしちゃうのか、それ？」

高田君が慌てたように叫んだ。

「俺は釣りを楽しむだけだからね。それに魚籠も持つてきていないし」

「だったらもらうよ。おかず、おかず」

高田君が大きなイワナを手でムズとつかんで、竹の魚籠に押し込もうとする。

「ちゃんと俺が釣つたつて言うんだぞ」

「わかつてるつて。ルアーのすごさを父ちゃんにも教えてやるぜ」  
そんな二人の会話が微笑ましかつた。

「もうすぐ禁漁だな」

東海林君が寂しそうにつぶやいた。

笹熊川は十月になるとイワナやヤマメを釣ることができなくなる。魚たちの産卵の季節でもあり、それを保護するためだ。

「なーに、冬には冬の遊びが一杯ある。俺たちがいろいろ教えてやるから、心配するな。さあ、どんどん釣ろうぜ」

山から吹きおろす風が木々の葉をサワサワと揺らした。豊かな水が流れる音と交ざって心地よい。

東海林君はテンポ良く、どんどんと上流に向かって釣り上っている。見れば高田君の竿の届かない範囲を狙っているではないか。彼なりに高田さんに気を遣っているのだろうか。

高田君はじつくりと仕掛けを流している。

僕も赤と金のスプーンに願いを込めて、流れの中へと放った。

じつくりと落ち込みの脇を引いてくる。すると金色の輝きの後ろに、黒い影がヌーツと近づいてきたのが見えた。

次の瞬間、のされるように竿先が曲がった。ずっしりとした重量感が手元に伝わる。

「こつちもきた！」

僕は必死にリールを巻いた。その魚は何度か流れに突っ込んだものの、意外とあっさり足元に寄ってきた。

「何だこりゃ、ウグイじゃないか」

その声が高田君が駆けつけた。

「うわっ、でっけえウグイがルアーをくわえてらあ」

赤と金のスプーンの本針をがっしりとくわえて、ウグイは僕の足元に横たわっていた。

「こいつも尺近くはあるんじゃないか？」

ウグイの銀色の魚体を高田さんが撫でる。秋から冬にかけてのウグイは「寒バヤ」などと呼ばれ、塩焼きや田楽などでおいしく食べられる。特にイワナやヤマメ、アユなどが禁漁を迎えた後は、タンパク源として昔から重宝されているらしい。

僕はウグイの口から針を外した。

「どうする？ これも持つてく？」

「うーん、大物だけどウグイはいらないや。でも何でウグイがルアーで釣れるんだ？」

高田君が首を捻った。僕は父とブラックバスを釣りに行った時、

「コイやウグイも他の魚を食べる」と聞かされたことを思い出した。

「ウグイも他の魚を襲うことがあるらしいよ」

「えーっ、まさか、ウソだろ？」

高田君は目を丸くして叫んだ。彼が信じられないのも無理はない。僕だって未だに半信半疑だ。それでもウグイはルアーに果敢にアタックしてきたのだ。これは疑いようのない事実だった。

僕は大きなウグイを元の流れへと返した。

「おーい、高田ーっ！ 今度はヤマメだ！」

上流で東海林君の叫ぶ声が聞こえた。

高田君と僕は東海林君の元へ駆けつけた。東海林君の足元には、25センチ程の美しいヤマメが横たわっていた。体の側面には大きなパーマークという、ヤマメ独特の楕円形の美しい模様がある。尾びれは少し赤く染まっていた。

「綺麗なヤマメだなあ」

僕が見とれていると、東海林君がプライヤーで三本針を外した。

それを高田さんに渡す。

「悪いなあ。ヤマメはうまいんだよな。川魚じゃ、アユといい勝負だぜ」

高田君は嬉しそうにヤマメを魚籠に入れた。そう言う高田君の魚籠には、先程の大きなイワナの他に20センチ程のイワナが二匹入っている。いつの間にか釣っていたのだ。やはり数釣りでは餌釣りに分があるのだろうか。

「さあ、どんどん釣ろうぜ」

高田君の顔から笑いが漏れる。僕は少々焦っていた。ボウズ（一匹も釣れないこと）は逃れたものの、せっかく笹熊川の上流まで来

て、ウグイ一匹とは情けない。

僕は東海林君を追い抜かして、その先の落ち込みの脇にスプーンを投げた。赤と金の金属は複雑な流れに揉みくちやにされながら、沈んでいく。神経を釣り糸の先のルアーに集中させ、軽く竿を振ってみた。おそらくスプーンは巻き返しの底で、魅力的なダンスを踊っているに違いない。

すると、そのスプーンを押さえ込むようなアタリが、明確に僕の手元に伝わった。僕はすかさず合わせを入れる。すると、グネグネとした感触が伝わった。先程、高田君が言っていたイワナの感触だろうか。その魚はもがくように身を振りながら、底へ突っ込み、複雑な流れの中へ逃げようとす。しかし、柔軟で粘り気のある竿は、それに追いつくように耐え、魚をあしらってくれる。僕はブラックバスや50センチのニジマスを釣った経験があるほどだ。このくらいのことでは、もう慌てなくなっていた。

落ち着きながらリールを巻く。すると足元に寄ってきたのは、30センチに満たないくらいのイワナだった。虫食い模様の背中と、ヒレの端が白いのが上から見た時のイワナの特徴だと父が言っていたっけ。

僕はイワナを岸边にずり上げた。

「やった。イワナを釣ったぞ」

それは初めてルアーで釣った、自然溪流の魚だった。

「これでまた、父ちゃんの骨酒の材料が増えたわけだ」

嬉しそうにイワナを受け取った高田君がつぶやいた。どうやら高田君は親に随分と気を遣っているらしい。今回の釣りも家族サービスの一環のようだ。まさしくキャッチ・アンド・イート、漁業本来の釣りである。

ちなみにイワナの骨酒とは、イワナを素焼きにし、そこへ熱く爛をした酒を注いで飲むもので、小学生の僕たちには、ちよいとばかり早い飲み物だ。聞いた話では、イワナからダシが出て、非常においしいものらしい。

「結構、魚影が濃いな」

東海林君がつぶやいた。

「当たり前よ。この川は漁協が管理しているんだ。放流量も半端じゃないらしいぜ」

高田君が自慢げに言っけて退けた。

「てことは、そのイワナも養殖物？」

高田君の親は農業のかたわら、アユ釣りもよくやっているので、漁協とも仲がよい。僕は素直に聞き返した。

「まあ、そういうことになるかな」

「なんだ、天然物じゃないのか」

僕は少しがっかりした。あの竜山湖で釣ったニジマスとイメージが重なった。

「そうは言ってもよ。最近は釣りブームだろ。みんな釣りをしていたら、魚がいなくなっちゃうんだよ。都会から来る連中なんて、ちっこいのまでかっさらっていくんだぜ」

下流部でもよく、都会のナンバーの車を見かける。釣り人の中には稚魚までも、根こそぎさらっていく連中もいるのだろう。そうすれば、確かに川は死に絶える。魚の生命を途切れさせないためにも、釣り人の要求に応えるためにも、養殖した魚を放流することは必要なのだろうか。

「でも、こんな上流部まで放流しているんだな」

僕は太く、自然の色を濃く残した流れを眺めながらつぶやいた。

「この川の漁協は熱心だからな。釣り客が来れば、遊魚券でもうかるし、村の温泉宿に宿泊客が泊まるだろう？」

高田君は村の経済事情にも精通しているようだった。

「なるほど。ここでもイワナやヤマメ、そしてアユは人間が生きる道具ってわけだな」

東海林君が皮肉っぽく笑った。

「まあ、そう言っつなよ。お陰で俺たちも釣りを楽しめるんじゃないか」

ブラックバスだけではなかった。こんな小さな村でも、生命は人間の利害関係に利用されもてあそばれているのかと思うと、少し複雑な気分になった。

「俺、先に行くよ」

高田君は大石を飛び越えて、その向こうへと消えた。その時だった。

「うわっ！」

高田君の叫び声が聞こえた。

「どうした？」

東海林君も僕も大石を飛び越える。そこで見たもの。それは野生の猿の大群だった。

猿の群れは、僕たちをにらみつけながら、キーツキーツと金切り声を上げ、威嚇している。歯茎を剥き出しにして、敵意をあらわにしている奴もいる。数では圧倒的に猿の方が多い。形勢は僕たちの方が不利なのは明らかだった。

「どうしよう」

うろたえる僕に高田君が手で制した。

「目を逸らすな。にらみ返すんだ。目を逸らすと襲ってくるぞ」

その言葉に僕の心臓は爆発しそうだった。

東海林君をチラッと横目で見ると、直立不動のまま猿たちをにらんでいる。

キーツ。

ボス猿だろうか。体格のよい猿が一際大きな声を上げた。猿たちは確実に僕たちとの間合いを詰めてくる。

剥き出した犬歯。鋭い爪。ともに頑丈そうだ。

（もう、ダメだ！）

そう思った時だった。

クワン！

他の猿を一蹴するほどの大きな鳴き声が、どこからともなく響き

渡った。

僕たちの後ろで樹の枝がガサツと揺れた。

何と、僕たちの前に躍り出たのは一匹の大きな猿だった。モヒカン刈りのような独特なたてがみが印象的な猿だ。群れのボス猿と、そのモヒカン猿は見つめ合い、にらみ合った。緊迫した時間と空気が流れる。

モヒカン猿の背中には、何者をも寄せ付けない気迫が満ち溢れていた。

どのくらいにらみ合いが続いただろう。ついにボス猿が踵を返した。それに群れが続く。どうやら僕たちはモヒカン猿に助けられたようだ。

「はあーっ、助かったあ……」

僕の足から力が抜けた。我ながらだらしがなかったと思うが、その場にへたりこんでしまったのである。

高田君と東海林君は立ったまま、そのモヒカン猿を見つめていた。モヒカン猿がゆっくりとこちらを振り返った。その瞳はどこか優しく、僕たちに慈しみの眼差しを向けてくれていたかのようだ。

モヒカン猿は東海林君を見上げた。すると、納得したような表情をして、また樹間へと消えた。

「すげえ、猿だったな。一匹で群れを追い払っちゃうなんてよ。かつては風格のあるボス猿だったんだろ。何かの理由で群れを離れて、今ははぐれ猿ってところか」

高田君が感心したように言った。

東海林君はモヒカン猿の消えた方をいつまでも見ている。その口から意外な言葉が漏れた。

「お父さん……」

「えっ？」

空耳だったかもしれない。それでも僕の耳には確かに、そう聞こえたのだ。

「あの猿の目、死んだお父さんの目にそっくりだったんだ」

東海林君はなおも森の奥深くを見つめ、そうつぶやいた。



## 第七話

次の月曜日、東海林君はうなだれて学校へ来た。溪流釣りをしやすっかり元気になり、打ち解けた空気になるかと思っていたが、彼の口から出るのはため息ばかりだ。

「どうしたんだよ？」

そう尋ねても、東海林君の口からは「はあ」という、気の抜けた返事しか返ってこない。

高田君も心配していた。

「あいつ、もう俺たちの仲間なのにな。一体、どうしたんだ？」

「さあ」

僕も首をひねるばかりだった。ざわついた教室の中で東海林君の周りだけ、時間が止まったようだった。

その日の放課後、東海林君は気だるそうにシヨルダーバッグを下げ、ひとり下校しようとしていた。それを見た高田君が、僕の脇腹を突つつく。

「おい、お前、様子を見てこいよ」

「おう」

僕は東海林君の後を追った。

東海林君はスキの茂るあぜ道を、ボンヤリとひとり歩いていった。どこか魂の抜け殻のような後ろ姿だ。

「よう、どうしたんだよ？」

僕がその声を掛けると、東海林君の背中がビクツと跳ねた。そう、まるで竜山湖でブラックバスに追いかけていたワカサギのように。

「あ、ああ……、お前か」

「何か変だぞ、今日の君は」

東海林君は足元の小石を蹴り始めた。蹴っては追い、追っては蹴る。

だが、意を決したように東海林君は口を開いた。

「一昨日の猿、いるだろ。ほら、俺たちを助けてくれたモヒカン頭の猿」

「ああ、確か君が『お父さんの目に似ている』って言っていた……」

「そう、その猿のことなんだ……」

東海林君はススキを一本、引き抜いた。ススキは結構、丈夫な植木だ。引き抜けそうで、なかなか引き抜けない。それを彼はあっさり引き抜いてしまった。

「あの猿が一昨日、夢枕に立ってなあ」

「あはは、猿で悩んでいるのか？」

ススキを手でクルクルと回す東海林君の背中に、僕は明るく笑い掛けた。

「笑うなよ。俺は真剣なんだ」

東海林君は足を止め、僕を睨み返した。

「ごめん、ごめんよ」

「いいんだ。誰も信じてはくれないだろうし」

「僕は信じるよ。君と僕の仲じゃないか」

そう言つと、東海林君の肩から力がフツと抜けた。

「あの猿が夢に出てきてな。お父さんの生まれ変わりだつて言ったんだ」

「死んだお父さんの生まれ変わり？」

「そう……」

東海林君があかね色に染まりかけた空を眺めながらつぶやいた。

秋の日はつるべ落としとは、よく言ったものだ。最近、陽が落ちるのがめつきり早くなった。

「それで、お父さんの猿は何か言っていたのかい？」

「ああ、『この猿はいい。自由でいい。群れにも入らず、ひとり気ままに生活していく』ってな」

「ふーん。でも、あの猿、年寄りくさかったぜ。君のお父さんが亡くなったのは今年だろう。それじゃあ、説明がつかないんじゃない

か？」

「それも言っていた。『この猿に取り憑いた』ってな」

東海林君の目は宙を泳いでいた。どこに焦点を合わせるでもなく、広大な空を眺めている。

「そうだ。今度の土曜日にまた、笹熊川に釣りに行かないか？　そうすりゃ、君のお父さんにまた会えるかもしれないぜ」

東海林君が僕の目を見た。そして力強く頷いた。

「ところで、その話をもう、お母さんにしたのかい？」

「とてもできる状況じゃないよ。話したら三日は寝込んでしまうだろうな」

東海林君がクスツと笑った。

その翌日の朝だった。東海林君は僕に胸の内を明かせて、少しすつきりしたのだろうか。明るく振る舞っていた。教室のみんなとも、雑談をしている。

「都会はよー、便利かもしれないけど、コンクリートだらけで味気無いぜ」

そんな話を笑ってする彼を、僕は目を細めて眺めていた。

「みんな、おはよう！」

元気よく教室に入ってきたのは、小野さんだった。小野さんは活発な六年生の女の子で、その元気さは男子に引けを取らない。

小野さんの片手にはビニール袋が握られており、中で何やらうごめいている。小野さんはビニール袋を持ったまま、教室の隅の水槽へ向かった。

教室の隅には横幅が60センチ程の水槽がある。中にはメダカが十匹ほど入っており、今週は僕が水槽を掃除する当番だった。

「桑原、川でウグイを釣ってきたから、メダカの水槽の中に入れるね」

「何だ、また世話するのが増えちゃったじゃないか」

「ボヤかない、ボヤかない。来週の当番は私だからさ」

小野さんは僕の背中をポンと叩くと、席に着いた。振り返ると、20センチ程の銀色の魚が、水槽の中で優雅に泳いでいた。

この時、これが怪事件の始まりとは、教室中の誰も予想だにしていなかった。

それは昼休みの高田君の一声から始まった。

「何か、メダカの数、減ってねえ？」

教室中がざわつく。みんな水槽の前に集まった。

「一、二、三、四、五、六、おかしいな。全部で十匹いたはずなんだけどな」

水槽の当番として、一応、僕にも責任がある。僕が首をひねっていると、後ろの方から野次が飛んだ。

「桑原、いくら腹が減ったからって、メダカまで食うことはないだろう？」

一同が大爆笑した。

「それなら、校庭の池にいるコイの方を食うね。メダカじゃ腹の足しにならないよ」

僕も負けずに言い返した。しかし、メダカはどこへ行ったのだろうか。ウグイは悠々と泳ぎ回り、残りのメダカは居場所を追われたように、慌しく泳ぎ回っている。

「やっぱ、お化けじゃねえの？」

高田君が手をぶら下げ、おどけた顔で言った。

「真っ昼間から出るかよ」

誰かの声が出た。

「いや、わからんぞ。メダカ好きなお化けかもしれん。夜中になると、きつとウグイも……」

「私の釣ったウグイを食べたら承知しないからね」

小野さんが顔を膨らませた。高田君はそれでも続けた。

「よく話に聞くだらう？ 夜中になると理科室のガイコツが動き出したり、音楽室のピアノがひとりでに鳴りだしたり」

「キヤーツ！」

数名の女子が耳を塞いだ。  
キンコーンカーンコーン。

始業のチャイムと同時に、クモの子を散らすように水槽の前から離れ、自分の席に着く。

ガラガラと扉が開き、斎藤先生が入ってきた。

「先生、大ニュースです。メダカが減っちゃったんです。消えちゃったんですよ」

早速、高田君が席を立ち、先生に事のでんまつを報告した。

「ほう……」

先生も水槽に近寄って確認する。

「確かに減っているな。まあ、そういうこともあるだろう」

先生は特にあわてた様子はない。ただ、あごに手を当て、ひとりで頷いているだけだ。

「やつぱり、お化けですか？」

調子に乗った高田君が、更に続けた。

「あるいはそうかもしれないぞ。悪さをする子はメダカみたいに食べられちゃうから、みんな気を付けるようにな」

先生は笑いながら言った。

僕は東海林君の腕を突つづいた。彼ならば、メダカが消えた理由を知っているだろうと思っただのだ。

東海林君はニヤリと笑った。

「この前、竜山湖でお前のお父さん、何て言っていたっけ？」

「えーと……」

あの日はいろいろな話をしたから、どの話を思い出せばいいのかすぐに浮かばない。

「この前の土曜日、お前がスプーンで一番最初に釣った魚は何だよ？」

東海林君が焦れたように言った。

「もしかして、ウグイ？」

僕は思い出した。父親が「コイやウグイも他の魚を襲って食べる」と言っていたことを。

僕は振り返って水槽を眺めた。ウグイは何食わぬ顔で、水槽の中で銀のウロコを輝かせていた。

そして、放課後を迎える頃には、メダカは一匹もいなくなっていた。水槽の周囲には人だかりができた。

ある者はお化けの噂に怯え、ある者は首をひねった。

「ウグイ、じゃないかな？」

僕が恐る恐る言ってみた。すると、すかさず僕の襟首をつかんだ者がいた。小野さんだ。

「何だつて？ 私が持ってきたウグイにケチつける気かい？ ウグイとブラックバスを一緒にしてもらっちゃ困るね」

男勝りの小野さんが凄む。女子の中でも腕っ節の強い小野さんに睨まれたら大変だ。高田君の時以上にやっかいなことになる。

それでも僕は自分の考えが間違っているとは思えなかった。

「まあ、待てよ」

そう言つて、助け舟を出してくれたのは高田君だった。

「俺はこの前の土曜日、見たんだ。こいつがルアーでウグイを釣るところをよ。案外、ウグイって獰猛な魚なのかもしれねえぜ」

「そんなことないわよ！」

小野さんがむきになる。

「よし、そこまで言うのなら、ウグイの解剖をしよう」

僕は思い立ったように、そう言った。

女子たちは「きゃーっ」とか「気持ち悪い」とか騒いでいる。

小野さんがすごい形相で僕をにらんだ。

「もし、メダカが出てこなかったら、どう落とし前つけるつもり？」

「その時は塩焼きか田楽にでもすればいいだけの話だろう？」

こうなったら僕も後へは引けない。

「あんた、ブラックバス釣るのに魚、食べるんだ？」

小野さんが皮肉っぽく笑った。

「いいわ。その代わり、もしメダカが出てこなかったら、あなた、このウグイをナマで食べなさいよ。頭から内臓から、尻尾まで全部！」

小野さんも熱くなっている。小野さんはメダカをすくう網を手にする、水槽の中のウグイを追いかけ回し始めた。ウグイは「ハヤ」と呼ばれるくらいにすばしっこい。小野さんはやけくそになって、ウグイを追い回している。

「やめろよ」

東海林君がポツリとつぶやいた。

「そんなことしなくてもわかるぜ。ウグイのケツを見てみな」

みんなウグイの尻ビレの辺りに注目する。するとどうだろう。フンが出かかっているではないか。

「きゃっ、目玉！」

女子のひとりが叫んだ。そう、そのフンは紛れもなく、消化されかけたメダカだったのだ。薄っすらと骨の部分も確認できる。

「そ、そんな、ウグイがメダカを食べるなんて。ブラックバスじゃあるまいし……」

さすがに小野さんも驚きを隠せない様子だ。

「私が、私がウグイなんか入れたばかりに、メダカが……」

そこから先は言葉にならなかった。小野さんの肩は震え、わなないていた。

そんな小野さんの姿を見て、少し熱くなり過ぎた自分を、僕も反省した。

「知らなかったんだもん。しょうがないよ。誰もウグイがメダカを食べるなんて、普通は思わないもんね」

僕はうずくまる小野さんの目線の位置まで腰を落とし、優しく話しかけた。

小野さんの唇がわずかに「ごめんなさい……」と動いた。

次の土曜日、東海林君と僕は連れだって、また笹熊川の上流を目

指していた。それにしても、林道での自転車こぎは疲れる。今日目指すのは笹熊川が鬼女沢と合流する付近だ。

九月も下旬になり、樹々の葉もだいぶ色づいてきた。今年の紅葉は綺麗だろう。そんなことを思いながらペダルをこぐ。

林道はある一点を過ぎると、長い下り坂になった。帰りには、これを上らなければならないと思うと、正直なところ、しんどかった。笹熊川と鬼女沢の合流点の手前で、林道は終点を迎える。そこには地元のものと思われるワゴン車が一台、置かれていた。

「ちっ、先客がいたか」

東海林君が舌打ちをした。しかし、仕方ない。釣り場はみんなのものだ。問題なのは我々のようなルアー釣りを理解してくれるかどうかだ。

「しょうがないよ。行こう」

僕たちは早速、釣り支度を始めた。

先日、高田君と釣った場所よりも、更に上流であるこの場所は、当然ながら、流れも細くなっている。子供でも場所さえ選べば、川を渡ることは可能だ。

東海林君と僕はテンポよく釣り上がっていった。ルアー釣りは餌釣りのように、丹念に仕掛けを流したりしない。積極的に攻めて、早めに見切りを着けては、次のポイントへ移動する。

そんな釣りをしているうちに、東海林君も僕も何匹かのイワナを釣っては、川へ返していた。

釣り上がっていくうちに、大きな淵にでた。そして、そこでは長い溪流竿を垂らす釣り人の姿が見える。おそらく、あのワゴン車の持ち主だろう。

東海林君と僕は顔を見合わせた。このような場合、挨拶を交わし、どのように釣るか相談するのがマナーだ。挨拶もせず、勝手に追い抜かしたりするのは厳禁とされている。

「こんにちは」

東海林君と僕は、声を合わせて挨拶をした。よほど釣りに集中し



ていたのだろう。その釣り人の背中がビクツと跳ねた。

「ああ、びっくりしたあ」

「すみません。驚かせちゃって」

釣り人は竿をヒュツと上げると、こちらを向いた。僕の両親と同じ年くらいの男性だ。

「あつ」

その釣り人の顔を見て、東海林君が思わず叫んだ。

「おじさん、村役場の……」

「そうだよ。東海林君だったね。よく覚えていてくれたね」

僕が東海林君の脇腹を肘で突つついた。

「この人、初めて村にきた時、お母さんと村役場で会ったんだよ」

「玉置村役場福祉課の皆瀬です。よろしく」

皆瀬さんが帽子を脱いだ。その下には爽やかな笑顔があった。

「君たちはルアーかい？」

「はい」

東海林君がはつらつと答えた。僕がルアーボックスを開いて見せる。

「ほう、どれどれ、これがルアーか。おじさんもやってみたいとは思っていたんだけど、なかなかチャンスがなくてね」

「やってみる？」

東海林君が皆瀬さんにルアー竿を差し出した。皆瀬さんは溪流竿を畳むと、「いいのかい？」と言いながらも、ルアー竿に手を伸ばした。僕はキョトンと事の成り行きを見守った。大体の餌釣り師たちは、ルアー釣りを毛嫌いするものだ。

「リールの使い方は大丈夫？」

「コイのぶっ込み釣りで使っているからね」

ヒューンと竿がしなった。糸は野球でいうところのフライで飛んでいく。溪流では余計な糸は出してはならない。それだけ巻き取るコースに無駄ができてしまい、魚のいる場所を外してしまうからだ。「コイの要領じゃなくて、もっと手首を使ってビュツと振ってこら

んよ」

東海林君の助言はいつでも的確だ。皆瀬さんが再チャレンジをする。今度は竿がビュツと風を切った。

ミノーが淵の対岸の巻き返しへと着水する。すぐに皆瀬さんはリールを巻き始めた。きらびやかなミノーの銀色が僕の中からもよく見える。その後ろに黒い影がヌツと現れた。次の瞬間、皆瀬さんの握る竿先が引つたくられた。

「き、きたっ！」

黒い影は流れの中へと突っ込み、その流れを味方につけようとする。そして、針を外そうと必死にもがいた。だが、そこは皆瀬さんも経験者だけあって、魚の扱いには慣れている。溪流竿よりはるかに短いルアー竿を、腕の延長のようにあしらって、あっと言つ間に魚を足元に寄せてしまった。

30センチはあろうかというイワナだ。

「大きなイワナですね」

エラをリズムカルに動かすイワナを見て、僕がそう言った。

「もともと、この辺りになると、ヤマメは姿を消して、イワナだけになるんだよ。今は漁協が放流しているからヤマメもいるけどね」

皆瀬さんはこの笹熊川の状況について、よく知っているらしい。よほど通い詰めているのだろうか。

「いやー、ビギナーズ・ラックだと思うけど、君たちのお陰で素晴らしいルアー初体験ができたよ。ありがとう」

皆瀬さんがニッコリと人懐っこい笑顔で笑った。最近ではよく、新聞やテレビでお役人が叩かれていると聞くが、この人に限っては叩かれるようなことはしていないだろうと思った。

「さてと、この先、君たちはどうする？」

皆瀬さんが尋ねた。東海林君と僕は顔を見合わせた。餌釣りとルアー釣りではテンポが合わない。この場合、先行者である皆瀬さんに優先権がある。

「僕たちはまた釣り下がりますから、どうぞ先へ行ってください」

そう言ったのは東海林さんだった。しかし、皆瀬さんは人懐っこい笑顔を崩さずに言った。

「もし嫌じゃなければ、せっかくだから、一緒に釣ろうよ」

東海林君と僕も自然と笑顔がこぼれた。

川はもうすぐ、鬼女沢との合流点を迎える。そこには大きな淵がある。と聞いていた。そこを三人で攻めるのも悪くないと思った。

心地のよいそよ風が、川上から吹きおろし、僕のうなじをなでた。

鬼女沢との合流点は大きな淵となっており、そこは二本の流れが複雑に絡み合っている。皆瀬さんの溪流竿ではとても攻めきれない範囲だ。東海林君と僕は、皆瀬さんの竿の届かない範囲を狙うことにした。

こうして、餌釣りの人とルアー釣りの人が、ひとつの川で仲良く共存できるのは素晴らしいことだと思う。そうだ、釣り人はもともと、みんな友達なのだ。その釣り方が違うだけでケンカするなんて、バカバカしいことではないか。

その淵は魚の、生命の気配に満ちていた。複雑な流れが作り出す水の筋は、所によっては激流のようになり、所によっては底の石により、水が盛り上がっている。また、ある所では水は巻き返し、緩やかな流れとなって、落ち着きながらも、すべてを飲み込もうとしている。

僕たちは思い思いの場所に、仕掛けを、ルアーを投げていく。三人が解け合った淵だった。

しかし、不思議だった。その淵はいくらルアーを投げても魚の反応がない。正確に言うと、魚が追ってくるのは見えるのだが、食いつかないのである。東海林君も苦戦しているようだ。皆瀬さんも丹念に仕掛けを流しているが、アタリはないようである。

「どうやら、この魚はスレツカラシ（釣れない魚）のようだね」  
皆瀬さんが苦笑した。さすがの餌釣り師も音を上げたようだ。

「どうやら、そうみたいですね」

ヒヨイと東海林君がルアーを回収した。

考えてみれば、ここまでも絵に書いたような、教科書どおりのポイントからは、あまり魚の反応は良くなかった。どちらかというと「竿抜け」と呼ばれる、人が見落としがちな小さなポイントを拾い歩いて釣ってきたのだ。それだけ笹熊川の魚は攻められ、スレているということになる。

「さてと、ここからどうしようか？ このまま笹熊川の本流を釣るというのもいいし、支流の鬼女沢に行くのもいい」

東海林君と僕はまた顔を見合わせた。迷っている僕たちを見て皆瀬さんは言った。

「笹熊川の本流は漁協が放流しているから魚も多いけど、その分、釣り人も多くて魚もスレている。一方、鬼女沢は放流されていないけど、種沢なんだよ」

「タネザワ？」

僕は初めて聞くその言葉の意味がわからなかった。

「つまり、天然の魚が昔ながらの生命の営みを続けている沢なんだ。結構、鬼女沢からこの笹熊川に下ってくる魚も多いと聞いている。漁協の放流だけじゃあ、やっぱり限界があるからね。その代わり、鬼女沢で釣るならば、リリース（放流）を前提として考えてほしいな。貴重な種沢を荒らしたくないんでね」

「うーん、どうしようかな？」

東海林君と僕とで考えあぐねていると、急にガサガサという音がした。音のする方を見ると、鬼女沢の入り口にあのモヒカン頭をした猿がいた。

クワン！

猿が吠えた。そして、僕たちに背を向けると、ゆっくり歩きだしたのである。

「鬼女沢へ行こう。あの猿を追うんだ」

東海林君がつばやいた。その目は熱く燃えているようだった。

## 第八話

鬼女沢沿いには小径がある。その小径をたどっていけばよいのだが、不思議なことにモヒカン猿は野山を行かず、小径を歩いた。まるで僕たちを先導するように。

「どうやら、あの猿はみえずのたき不見滝まで我々を案内するつもりらしい」

額に汗をかきながら、皆瀬さんがつぶやいた。小径の傾斜は結構きつい。

「不見滝？」

「鬼女沢の魚止め滝だよ。森に覆われて、音しか聞こえず、なかなか見えないから不見滝という名前が付いたらしい。落差30メートルはある、大きな滝だね。その下には大きな淵になっている」

魚止め滝とは、魚が遡れない滝のことで、そこから上流に魚はいない。もともと、人間が持ち込まない限りの話だが。鬼女沢には漁協も放流事業を行っていないので、おそらく不見滝から先に魚はいないだろう。

「それに……」

「それに？」

「滝の側に又吉さんというじいさんが住んでいてね。そのじいさんがくせ者なんだ」

「どんなおじいさんなの？」

「俗に言う世捨て人さ」

「世捨て人？」

「そう。滝の側で魚を獲ったり、山菜を採ったりして自給自足の生活をしているんだ。そんな人でも村人だからね。毎回、村の広報や選挙の投票用紙を届けるのが大変なんだよ」

「ふーん」

「それに性格も頑固ときてるから、手に負えないよ」

皆瀬さんは汗をふきながら笑った。東海林君はただ夢中になって、

モヒカン猿の背中を追いかけている。

すると、急に視界が開けた。目の前に広がる大きな滝と、すべてを飲み込むかのような大きな滝壺がそこにあつた。

東海林君の目はモヒカン猿を追った。しかし、猿は藪の中へ身を潜めると、すぐに見えなくなつてしまつた。

その滝壺の脇に小さな掘つ建て小屋がある。どうやらそれが又吉じいさんの家らしい。

皆瀬さんは又吉じいさんの家らしき掘つ建て小屋に向かつて歩きだした。

「ごめんください。皆瀬です。又吉さん、いますかー？」

皆瀬さんが大声で叫ぶと、「おう」と威勢のいい声が返つてきた。そして、奥からいかにも仏頂面をしたおじいさんが出てきたのである。

「何じゃ、また木つ端役人か。今日は何の用じゃ」

「いや、特に用はないんですけどね。この子たちと釣りに来まして」  
東海林君も僕も、無愛想なおじいさんに軽く会釈した。

「最近のガキどもは、西洋かぶれの道具で釣りなんぞしよる。世も末じゃわい」

どうやら又吉じいさんは、ルアーがお気に召さないらしい。

「ところで木つ端役人、こいつらに釜の主の話をしとらんだらうな？」

「いえ、まだ」

「かかか、まあ、したところで、ガキに釣れるような代物じゃあないて」

又吉じいさんが僕たちを見下しながら、豪快に笑つた。東海林君は少しムツとした表情をしている。

「釜の主つて何ですか？」

東海林君が敵意のこもつた声色で尋ねた。

「もしかすると、お前さんがその西洋の道具で釣ろうつてえのか？無理だ、無理だ。やめとけ。わしが五年越しで狙つても釣れねえ

大イワナじゃ」

「大イワナ！」

「そうよ。身の丈、三尺近くはあるうかっていう、稀に見る大イワナじゃ。わしは見た。あれは水鳥のヒナが滝壺で羽を休めた時じゃった。しばらく滝壺に身を浮かばせていたヒナの下に忍び寄る黒い影。次の瞬間、ヒナはイワナの胃袋の中よ」

「す、すげえ！」

水鳥のヒナを丸呑みにするイワナの姿を想像するだけで、僕の心臓が高鳴った。それは恐れに近いものがあつたかもしれない。イワナは警戒心が強い一方で、非常に貪欲な魚だ。よくへびなどを食べる話は耳にする。

「ひひひ、恐れ入ったか。さあ、ガキの出る幕じゃねえ。帰った、帰った」

又吉じいさんは両手で僕たちを払うようにする。

「おもしれえ……」

東海林君がつぶやいた。

「釣らせてもらおうじゃねえか。その釜の主とやらを」

東海林君の目は熱く燃えていた。この目は竜山湖で大きなブラックバスを掛け、ファイトしていた時の、あの目だ。おそらく、彼の中で何かのスイッチが入ったのだろう。それは大イワナへの挑戦状でもあり、又吉じいさんへの挑戦状でもあつた。

「かかかっ。笑わせてくれるわ。わしが五年がかりで狙っても釣れんのだぞ。西洋かぶれのガキどもに釣れるわけがなかるうが」

それから僕たちは滝壺へ向けてルアーを投げ続けた。東海林君と僕は距離を置き、違う角度から攻める。皆瀬さんと又吉じいさんは、そんな僕たちを黙って見ていた。

「ヒット！」

東海林さんの声が響いた。竿が大きくしなっている。かなりの大物だ。距離は開いていても、リールからジリジリと糸が引き出され

ていくのがわかるくらいだ。東海林君は竿をためながら、懸命に魚の引きに耐えている。

皆瀬さんが腰を上げた。東海林君に駆け寄る。もちろん僕も駆け寄る。

「違うな。あいつじゃねえ」

又吉じいさんがボソツとつぶやいた。

何度か巻いては引き出され、引き出されては巻いてを繰り返すと魚は寄ってきた。40センチをはるかに超える大きなイワナだ。皆瀬さんは溪流ダモ（網）を手に取ると、素早くイワナをすくい上げた。

「いやー、主には及ばないまでも、立派な大イワナだ」

皆瀬さんが東海林君を誉め讃える。しかし、東海林君の顔は晴れやかではない。

「くくく、そのくらいのイワナならゴロゴロいるぜ。珍しくはねえ」

又吉じいさんは意地悪そうに笑った。東海林君がにらみ返す。

「どうせ釣れねえけどな」

そう前置きして、又吉じいさんが言った。

「釜の主は朝マズメと夕マズメにしか姿を現さないのよ」

マズメとは魚の最も食いが立つ時間帯のことで、早朝と夕方を指す。

それでもあきらめ切れないのか、東海林君は黙々とミノーを投げ続けた。

僕も重めのスプーンを使って、滝壺を這うようにリールを巻く。

ふと、滝の上に目をやった。するとそこには、あのモヒカン猿がいたのである。まるで、僕たちの釣りを見守るかのようにして、ジツと見つめていたのだ。

（やはり、あの猿は東海林君の……）

そんな思いがしてならない。モヒカン猿の視線は僕よりも、東海林君に注がれているような気がしたからだ。



結局、その日は釜の主は姿を現さなかった。夕マズメまで狙うには、ここはあまりに遠すぎる。林道の終点に自転車を置いてきた僕たちは、暗くなる前に切り上げなければならぬ。

「また、絶対に来ますよ」

東海林君が又吉じいさんをにらんで言った。

「ああ、もう来なくていいぞ」

又吉じいさんは手で追い払うような仕草をして笑った。東海林君が下唇を噛んだ。

下山した僕たちは、また川を下り始めた。東海林君は何もしゃべらない。既に陽は傾きかけていた。山の夕暮れは早い。自然と急ぎ足になる。

そんな時、ふいに僕たちの前に、あのモヒカン猿が現れた。

モヒカン猿はジツと東海林君を見つめる。威嚇するわけでもなく、ただジツと見つめているのである。

この時、僕は思った。この二人の間には、二人にしかわからない、空気の糸のようなもので結ばれているのだろうと。

見つめ合っていたのは、一、二分くらいだったと思う。だが、その時間の濃さはまるで、農場のしぼりたての牛乳のようだった。それだけ凝縮された濃密な時間だったと僕には感じられた。

東海林君と見つめ合った後、モヒカン猿はまた茂みの中へと姿を隠した。

「おい、あの猿、じゃなかった、君のお父さんは何て言っていたんだい？」

僕は思い切って、東海林君にそう尋ねてみた。

「ふふつ、『お前と協力して、あの釜の主を釣ってみせる』だってさ」

東海林君の口元がフツと笑った。そして、目は異様に光っている。釣り人だけが放つ、独特の光だ。

「君は猿と話ができるのかい？」

皆瀬さんが口をポカーンと開けて尋ねた。まるで、目の前で手品

でも見せられたかのようにだ。

「あの猿ね、こいつのお父さんなんですよ」

「はあ？」

僕の言葉に皆瀬さんはすっかり、混乱しているようだ。

東海林君は皆瀬さんの方を向くと、ニヤツと笑って言った。

「おじさん、俺のお母さんのこと、気になってるでしょ？」

皆瀬さんの顔が急に赤くなった。それは夕陽に照らされて赤く見えただけではない。

「な、何を言い出すんだ。急に」

「だって、お父さんが言っていたもん。お父さん、おじさんのこと『いいやつだ』って言っていたぜ」

皆瀬さんが指で頬をかいた。目線は宙を泳いでいる。

「まったく、まいっっちゃうなあ。君たちには……」

その日は、皆瀬さんのワゴン車に自転車を積み、家まで送ってもらった。東海林君の家が母子家庭ということもあり、母親を心配させないためにも東海林君の家へまず向かった。

東海林君を介して、あのモヒカン猿から聞いた話を聞けば、皆瀬さんにはそれなりの下心があるように思えたのだが。

「まあ、すみません。わざわざ送っていただいて。それに、皆瀬さんにはお世話になりっぱなしで……」

東海林君の母親が丁寧な頭を下げた。東海林君も僕も、皆瀬さんに頭を下げる。

僕が見るに、東海林君の母親はこのところ、見違えるほど元気になった。息子が村に慣れ、安心したのだろうか。それに、改めて綺麗な人だと思った。こんな人が母親だったら、東海林君も鼻が高いに違いない。しかし、東海林君は一見すると取っ付きにくい、常に母親を気遣い、大切にしている優しい人だ。僕はそんな東海林君が大好きだ。彼との友情は、僕にとってかけがえのない財産のようなものなのだ。

「いや、たまたま釣りで一緒になりましたね。でも子供たち同士であまり山奥まで行くのは危ないから、今度からおじさんが付いていてあげるよ」

なるほど、子供をダシに使えば、東海林君の母親にも近づけるという寸法か。僕はそんなことを邪推した。

「まあまあ、こんなところでもなんですから、お茶でも」

皆瀬さんも僕も東海林君の家に上がることにした。僕は電話を借りて、家に電話を入れた。

考えてみれば、僕が東海林君の家に上がるのはこれが初めてかもしれない。

「お父さんの遺影ってどこだい？」

すると東海林君の母親が「こつちよ」と案内してくれた。そこにはブラックバスを抱えて笑う、東海林君の父親の写真が飾られていた。言われてみれば、その目はどこかあのモヒカン猿に似ているかもしれない。

遺影の脇には十字架と聖書が置かれている。それが横にある、古びた木目の仏壇と違和感なく融合しているところがすごい。亡くなった人を奉るといふのは、仏教にしても、キリスト教にしても、荘厳な印象をもたらすものだ。

僕はその写真に向かって自然に手を合わせた。背後でも静かに黙祷を捧げる皆瀬さんの気配がする。厳粛な時間だった。

東海林君の父親に黙祷を捧げると、おばあさんがお茶とナスの漬物を出してくれた。

皆瀬さんは早速、ナスの漬物に箸をつけている。

「いやー、おいしいですね。こんな物を毎日食べられて幸せだなあ」

「ほほほ、あんた、まだ独り身かえ？」

おばあさんが笑いながら尋ねた。

「ええ、私は隣の持立市の出身でしてね。この村の安アパートで一人暮らしをしているんです。だから、こういうもの、めったに食べられないんですよ」

「正も懐いとるようだし、うちの秀美をもらってくれんかのう？」  
皆瀬さんが飲みかけたお茶をブーツと吹き出した。そしてゴホッ、ゴホッとむせる。

「お母さんったら！」

東海林君の母親が血相を変えて、おばあさんをにらんだ。皆瀬さんはお茶が変なところに入ったらしく、まだむせている。

「いいんです、いいんです。秀美さんも旦那さんを亡くされた後で、ゆっくりと先のことなんか考える暇なんかなかったでしょうから」  
皆瀬さんが手を振りながら答えた。

(何だ。もうアタックしていたのかよ……)

僕は心の中でつぶやいた。

「それはそうと、村役場の非常勤職員の話はどうですか？」

皆瀬さんが赤い顔をしながら、東海林さんの母親に尋ねた。

「ええ、その話でしたら、お引き受けしようかと思ひまして」

その途端、皆瀬さんの顔がほころんだ。

「本当ですか。そりゃ、良かった。来週明けにでも早速、課長に報告しておきます。いやー、本当に助かりますよ」

皆瀬さんが照れを隠しながら笑った。そんな皆瀬さんを東海林君は薄笑いを浮かべながら見ている。

母親が元気に働く姿が見たいのだろうとも思う。だが、それ以上に皆瀬さんと母親の関係が気になっているはずだ。僕が東海林君と同じ立場だったら、心境は複雑だろう。何せ父親の死後、間もなく、母親が男性と付き合おうというのだから。それを気にさせないのは、あのモヒカン猿の存在なのだろう。

「それじゃあ、私はこれで……」

皆瀬さんが席を立った。みんなで皆瀬さんを見送る。皆瀬さんがワゴン車に乗り込む間際に東海林君が言った。

「これからもよろしくお願いします。それと、お父さんに認められるといいね」

「えっ？」

皆瀬さんが拍子抜けしたような顔をした。東海林さんの母親もハツとしたような表情をして「正！」と叫んだ。だが、東海林さんはニターツと笑っている。皆瀬さんはそんな東海林君に、爽やかな笑顔を返した。

「来週の土曜日、また不見滝の釜の主に挑戦しよう。それまでに作戦を考えておいてくれ」

「まかせておいて」

東海林君が親指を立てて、片目をつぶった。その仕草もまた、爽やかだった。

そして、遠ざかるテールランプを見送った。

「僕もそろそろ帰るよ。今度、釜の主を釣る作戦会議を開こう」

「OK。あの頑固ジジイの鼻を明かしてやろうぜ」

東海林君の表情は生き活きしていた。

月曜日の放課後、東海林君と僕は二人で作戦会議を開いていた。もちろん、釜の主を釣る作戦会議である。

「トラウト用のルアーってスプーン、ミノー、スピナーくらいだもんな。あんまりバリエーションがないな」

東海林君がぼやくように言った。

「確かにサイズや重さの違いくらいだね。それに比べてブラックバスのルアーはバリエーションが豊富だよな」

僕は東海林君に同調する。

「何しろ、水鳥のヒナを飲み込むくらいの化け物が相手だからな。それに、あの頑固ジジイに攻め立てられてスレツカラシになっているだろうしなあ」

「三尺って言ったなら、90センチくらいだよ。一尺が30センチだもん。湖だつてそんな化け物サイズのイワナは珍しいと思うんだよね」

「水鳥かあ。水鳥ねえ」

東海林君は腕組みをして目をつぶった。深く考え込むような顔を

している。

僕だつて同じだ。あまり良い頭ではないが、それでもフル回転させて、何とか、まだ見ぬ釜の主を釣り上げる方法を考えているのだ。ともあれ、今までの我々の常識ではかなう相手ではなさそうだ。普通の溪流釣りの概念を打ち破る必要がある。

「仕方ない、お互いもう少しアイデアを考えて練り直そう。禁漁まであまり日がないからな」

そうだ。机の上で考えていても仕方がない。アイデアとはひよんなところから飛び出したりするものかもしれない。

その日、東海林君は先に帰った。自分のタックルボックスを眺めてイメージを練り直すのだから。

僕は校庭でぼんやりと、みんなが遊ぶ姿を座って眺めていた。

「何、深刻そうな顔しているの？」

僕に話しかけてきたのは小野さんだった。

「あ、ああ、別に」

「さつき、東海林君とヒソヒソ話をしていたでしょ。釜の主とか水鳥とか」

「何でもないよ」

釜の主の話は東海林君と僕との秘密だ。そうおいそれと他人に話せる内容ではなかった。だから、小野さんへの返事は少しっぴんぐどんだつたかもしれない。

「この前のメダカのこと、まだ怒ってる？」

急に小野さんが声の調子を変えて聞いてきた。いつものはつらつとした声ではなく、どことなく女の子らしい声だ。振り返ると、小野さんの顔は泣きそうな程、不安な表情をしている。こんな小野さんを見るのは初めてだ。

「いや、怒ってなんかいないよ。あの時は僕もムキになり過ぎた。

ごめんよ」

僕はごく普通に笑って、そう言った。すると、小野さんの表情が急に晴れやかになり、「はあ」というため息が漏れるのが聞こえた。

「実はね、私も釣りをしたいなって思ってた、高田に相談したら、『女に魚が釣れるか』ってバカにされたのよ。それで悔しくてさ。でも、実際に釣ってみたら面白いじゃない。あのウグイ、初めて釣った魚なんだ」

「そうだったんだ。高田のやつに一泡吹かせたかったんだね」  
「まあね」

小野さんが僕の隣に座った。教室の机よりも、もっと距離の短い、ごく間近の距離。まるで服というか、肌と肌が密着しそうな距離だ。この時、不思議と僕の心臓はドッキン、ドッキンと高鳴っていた。手の指やつま先の末端まで脈打っている感じがする。それに、耳から頬、頭の中までが異様に熱い。

「ねえ、桑原は最近、ルアーをやっているんでしょ？」

「うん。東海林君と溪流によく行くよ」

「今度、私の釣りにも付き合ってよ。一人で釣るのもなんだしさ」  
「えっ？」

僕の心臓がまたバクンと大きく脈打った。

「私は餌釣りだけどね。一緒に釣りをしてくれる人がいたらいいな、って」

「そりゃ、いいけどさ」

「じゃあ、明日の放課後、笹熊川の落合橋で集合ってことで。よろしくね、先生」

小野さんは僕の手をポンと叩くと、立ち上がり、元気に小走りで駆けていった。僕はその姿を呆気に取られながら見送った。

その晩、僕は居間で家族と語らっていた。

「まあ、釣りデートなんて、あんたらしいじゃない」  
母は上機嫌で笑った。

「デートなんてものじゃないよ。ただの釣りだよ、釣り」  
僕は急に気恥ずかしくなり、弁解をした。

「でも、それがきっかけになるってこともあるぞ」

父までが冷やかす。

「小野さんって、あの活発な子でしょ？ いいじゃないハキハキしていて。ちょっと、のんびり屋さんのあんたにはちよつどお似合いかもよ」

「もう、お母さん、やめてよ。そんなんじゃないってば話題変えようよ、話題」

僕は両手を振り、二人の暴走を止めようとした。

「そういえば、お父さんも私と付き合う前、釣りに誘ったわよね。ニジマス釣り」

母は思い出モードに入っている。

「そうだったなあ。イクラの餌はよかったけど、お母さん、ブドウ虫が触れなくてね。お父さんが餌を付けてあげたんだ。健也、お前も明日はちゃんと餌を付けてあげるんだぞ。ところで何を釣るんだ？」

「うーん。決まっていないけど、ウグイかオイカワかな」

そういえば、小野さんと何を釣るかまで相談をしていなかった。

初心者が釣るとなれば、ウグイかオイカワが妥当なところだろう。

「じゃあ、餌はサシだな」

父親がニヤツと笑った。サシとは要するにウジムシだ。釣り具店に行くと、小袋におが屑を入れて売っている。この村では釣り具を売っている杉本商店で買うことができる餌だ。

「それこそ、サシの正体を言ったら嫌われちゃうよ」

「て言うことは、やっぱり小野さんのことが好きなんだ？」

母が茶々を入れた。父が笑う。僕はむくれながらも、こんな会話ができる家族であって本当によかったと思う。

家族のだんらんが一段落して、僕は父の部屋へ行った。タックルボックスを見せてもらうためだ。いろいろなルアーを見て、あの釜の主を釣るルアーのヒントが欲しかった。

「勝手に見ていいよ」

父はそう言いながら、パソコンに向かっていた。どうやら、会社



から仕事を持ち帰ってきたらしい。父の目はパソコンに釘付けだった。難解な数字の羅列と、僕には解読不可能な文章がそこには並べられている。僕も大人になったら、こんな仕事をするのだろうか。それでも父は愚痴ひとつこぼさずに仕事をこなして、僕たち家族の生活を支えてくれている。父の背中を見ていると、大人の背負った重みがヒシヒシと伝わってくるようだ。

僕はトラウト用とブラックバス用のタックルボックスを開けた。確かにトラウト用のルアーはサイズの違いのみで、あまり代わり映えがしない。おそらく、釜の主はありきたりのルアーでは釣れないだろう。

僕はブラックバス用のルアーに目を移した。そこには様々な形のルアーが並んでいる。特に個性的なのが、トップウォータープラグと呼ばれる、水面で使うルアーだ。変てこな形をしていたり、プロペラが付いていたり、見ているだけで楽しくなる。

(そういえば、釜の主は水鳥のヒナを襲ったんだっけ)

それを考えると、トップウォータープラグの選択はあながち間違っているとは言えないだろう。しかし、どれを見ても鳥に似ているルアーなどない。

「ねえ、お父さん、仕事にごめん。鳥に似ているルアーってない？」

翌朝、僕は早々と学校に行き、東海林君が来るのを待った。僕のランドセルの中には秘密兵器が隠されているのだ。昨夜はタックルボックスとにらめっこをしながら苦労した。それでも、僕なりに考えあぐねた結論なのだ。

そうこうしているうちに、小野さんが教室に入ってきた。

「おはよう」

僕は明るく声を掛けた。小野さんは僕の側まで来ると、小さな声でささやいた。

「おはよう。じゃあ、落合橋ね」

「うん。必ず行くよ」

ちよつと小野さんの顔が赤らんで見えたのは気のせいだろうか。続いて高田君や、他のクラスメートが登校してくる。

(遅いなあ、東海林君)

すると、目の下にクマを作った東海林君が現れた。

「どうしたんだよ、その顔？」

「昨夜、あいつを釣る方法を考えたけど、思いつかなくて一睡もできなかった」

東海林君は倒れ込むようにして、椅子に座った。

「大丈夫か？ おい、僕が一応、考えてきたぞ！」

僕がそう言っていると、スーパールのイワシの目のようだった東海林君の瞳が、急に輝き出した。

僕はランドセルの中をまさぐった。そして、うやうやしく秘密兵器を取り出す。

「おおっ！」

東海林君が叫んだ。

「ザラ？か。なるほど考えたなあ。こいつなら水面でネチネチ操れる」

ザラ？とはトップウオータープラグの中でも、ペンシルベイトと呼ばれる種類で、タマゴを細長くしたような形をしたシンプルナルアーだ。そのシンプルナルアーが竿の操作により、左右にスライドするような動きを見せるらしい。それを水面下から見れば、鳥がもがいているように見えるだろうと思ったのだ。

「今日の夕方、ため池で早速、これを試そうぜ」

東海林君が血走った目が、さらに血走る。

「悪い。今日は予定があるんだ。明日にしてくれないか？」

「わかった。俺も今日は休むわ。あー、でもこれ見たら少し安心して。授業中に寝ちやうかも」

「いいんじゃない。たまには」

そう僕が言った時には、既にいびきが聞こえていた。

太陽が西の空に傾きかけた頃、僕は落合橋で小野さんを待っていた。

「ごめん。待った？」

逆光の中を駆けてきたのは、はつらつとした小野さんだった。その爽やかなまでの健全さの中に、どことなく漂う異性の香りが僕を刺激する。自然と心臓の鼓動は高鳴った。

(デートじゃない。ただの釣りじゃないか)

そう自分に言い聞かせるが、体は正直なものだ。顔から湯気が出そうだった。考えてみれば、女の子と二人きりになるなんて、これが初めてかもしれない。

「僕も今、来たところだよ」

そんなことはない。だいぶ前から待ち焦がれていたのだ。

「ねえ、釣ろう、釣ろう」

釣竿を担ぎ、はしゃぐ小野さんを横目に、僕は川原への踏み跡を先に行く。斜面は急だったため、手を差し伸べた。小野さんの手が僕の手をギュッと握った。ふだん元気で男勝りの小野さんだが、この時ばかりは、すぎるような力で僕の手を握ったのだ。そして、その手は温かった。

「よし、ウグイやオイカワを狙おう」

「釣っても、もう学校の水槽には入れないね」

小野さんが少し照れたような笑いを浮かべた。どうやら、まだメダカの一件を気にしているらしい。

「たくさん釣れたら、甘露煮だっていいんだぞ」

「あー、食いしん坊」

「あははは……」

小野さんは釣り支度にかかった。まだ初心者ということもあって、手際がよいとは言えない。僕は小野さんの仕掛け作りを手伝うことにした。

「桑原って、さりげなく優しいよね」

小野さんがポツリとつぶやいた。

「えっ？」

「私、知ってるんだ。東海林君が転校してきた時、桑原が先生にいろいろ頼まれていたこと。でも、桑原ならば言われなくても、声を掛けていただろうなって思ってたさ」

小野さんは僕のことをどんなふうに見ているんだろうかと思った。確かに先生に言われなくても、ため池で釣りをしている東海林君には声を掛けていたかもしれない。しかし、僕は自分で自分のことがわかるほど出来た人間ではない。

「僕って、優しいのかな？ これでも結構、短気だぜ」

僕は先日、メダカ的一件で言い争いをした、自分の姿を思い返していた。

「誰だって短気なところはあるわよ。私だって短気だし。でも桑原は優しいよ。それにいつも自分で考えて、正しいと思うことを実行しようとするもん。すごいよ」

小野さんの目には、僕はそんなふうに映っていたのかと正直なところ、驚きを隠せなかった。自分ではそんなに強い人間だなんて思っっていなかったからである。

「僕はそんなに強い人間じゃないよ」

「でも、思いはあるでしょ？」

「まあね」

「それだけで立派だよ」

僕は生まれて初めて「立派だよ」なんて言われた気がした。

「そんな、ほめられたもんじゃないよ」

僕は照れながら言った。

「うちの親がいつも言っているの。『人は自分が評価するものではない。他人が評価するものだ』って」

小野さんが顔を上げて、ニッコリと笑った。僕は気恥ずかしさと嬉しさが入り混じって、ぎこちない笑いを返したと思う。

仕掛け作りは完了した。僕は用意していたサシを餌箱から取り出

し、針に刺した。

「あっ、それサシでしょ？」

「知ってるの？」

「うん。本で読んだの。サシってウジムシなんだってね」

「気持ち悪い？」

「ううん。だって、この前のウグイもサシで釣ったんだもん」

やはり小野さんは男勝りである。ウジムシをもともしない。これは気が合いそうだ。そんな気がした。

小野さんが竿を振った。そこはやはり初心者だ。川の流れをうまく読めていないし、竿の扱いも不自然だ。時折、ウキが糸に引っ張られて、変な動きをする。

今日、僕は釣りをするのをやめた。僕も人に教えるほどの腕ではないが、こうなったら小野さんへの個人レッスんだ。

「違うよ。流れをよく見て」

「そうそう、流れに乗せて竿を送って」

小野さんの背後に回り、細かく指示を出す。そのうち、焦れっただけで手が伸びた。

小野さんと一緒に竿を握る。心臓の鼓動がまた高鳴った。竿の素材はカーボンという繊維でできている。カーボンは電気を非常に通しやすい。いつか先生が「人間の体の中にも電気が流れている」と言っていた。だとしたら、僕の心臓の鼓動も小野さんに伝わっているだろうか。

ウキがクツと水中に沈んだ。二人は息を合わせたかのように、竿を立てる。生命の振動が竿に伝わった。

川面から抜き上げられた銀色は、小野さんの手のひらに収まった。15センチ程の雄のオイカワだった。

「オイカワの雄だよ」

「へえー、よく雄と雌の区別がつくわね」

「オイカワの雄は尻ビレが大きいのだ。産卵の時期になると綺麗な色になるよ」

「これはメダカを食べない？」

小野さんが不安げな表情で、僕の顔を覗く。

「大丈夫。食べないよ」

「よかった。じゃあ、うちの水槽で飼おうかな」

小野さんが無邪気に笑った。僕はその笑顔に気をよくしてサシを付け直す。

陽はだいぶ傾きかけていた。夕映えの中に、長い竿がしなった。

## 第九話

翌朝は少しいつもより遅れて学校に行った。すると教室の黒板の前に人だかりができていないか。僕もやじ馬根性で人をかき分ける。するとそこには、相合い傘が描かれており、桑原健也と小野和恵と書かれていた。

「だ、誰だ。こないたすら書きしたやつは？」

僕は叫んだ。この時の僕の顔は赤かっただろう。視界に小野さんが入った。小野さんはいつもの元気さがなく、少しはにかむように笑っている。

(笑っている場合かよ?)

僕は黒板消しを手にとり、その相合い傘をやっつきになって消した。だが、筆圧が強かったのだろう。うっすらと黒板には跡が残って、完全に消し去ることは不可能だった。

「相合い傘より、釣竿の方がよかったかな？」

高田君の声が背後でした。振り向くと、高田君がニヤニヤ笑っている。いたずら書きをしたのは、どうやら高田さんのようだ。

「へへへ、昨日、見ちゃったもんね。お前たちが落合橋の下で一緒に釣りをしているところを。一本の竿を仲良く二人で握っちゃってさ。ラブラブって感じだったぜ」

すると教室のみんなはワーツと湧き上がる。ヒューヒューとはやし立てるやつもいる。

僕は小野さんの方を見た。彼女は顔を少し赤らめながらも、堂々とした態度でいる。

「小野さん、君は平気なのかい？」

僕は思わず、小野さんに尋ねた。別に小野さんのことが嫌いなわけではない。むしろ好意を抱いている。その好意は昨日の釣りで何倍にも膨れ上がった。しかし、黒板に相合い傘を書かれて、僕は顔から火が出そうだったのだ。

「別に。私たち、釣りをしたただけで悪いことしたわけじゃないですよ？」

「そりゃ、そうだけどさ」

僕は頭をかきながら言葉に詰まった。こういう時は女の方が平然としていられるものなのだろうか。それとも、小野さんのさばけた性格によるものなのだろうか。

「なるほど、昨日はそういうことか」

東海林君の声がした。気が付くと横で、東海林さんがニタニタ笑いながら頷いている。

「だからー……」

「いや、おめでとう」

「だからー……」

「言い訳は男らしくないぞ」

「はい……」

教室中が爆笑の渦に巻き込まれた。

「何か、楽しそうな雰囲気ですね。邪魔しちゃ悪いかな？」

斎藤先生がいつの間にか、人だかりの輪の中に入っている。

「そろそろ、朝の会を始めてもいいかな？」

その先生の一言でみんなは席に着いていく。

先生が何かしゃべる。しかし、それは僕の耳から耳へと抜けていった。僕は斜め前の小野さんを見つめ続けていた。ふと、黒板に目を移す。そこには完全に消えていない相合い傘が、うっすらと残っている。僕は少しそれが嬉しかった。

放課後、僕は東海林君の背中を追いかけた。

「おい、待ってくれよ。今日は秘密兵器の実験やるうよ」

僕の声に東海林君が振り返る。

「今日はデート、いいのか？」

「君までそんなこと言うのか？」

「ははは、冗談さ。じゃあ、後であのため池で実験しようぜ」



僕はあのザラ？がどんな泳ぎをするのか、早く見てみたかった。僕は急いで家へ帰ると、ランドセルを置き、ため池へ向かった。東海林君が以前、カムルチーを釣った、あのため池だ。

僕がため池に到着してからしばらくして、東海林君は釣竿を担いでやってきた。ブラックバス用のゴツイ竿だ。リールも太鼓型のベイトキャスティングリールを付けている。例のカルカタ200だ。「それで釣るのかい？」

「渓流用の竿じゃあ、あのルアーは投げられないし、うまく操作もできない」

竿の先には秘密兵器のザラ？がぶら下がっている。

「ずいぶんと太い糸だね」

リールに巻かれている糸はブラックバスを釣るにも太そうな糸だ。これでは海で大物を狙うような糸だ。果たして警戒心の強いイワナを、こんな太い糸で釣れるのだろうかと不安になってしまった。

「ふふふ、心配ご無用。それは釣り方によるからさ」

「釣り方による？」

「そう、水面に糸を付けないからさ。今日からはそのための訓練をみっちりするんだ」

東海林君の瞳が輝いた。僕は脳天に衝撃が落ちた。

糸を水面に付けない釣りなんて可能かとも思う。だが、東海林さんの瞳には、不可能を可能にするような力がこもっていたのである。「ちよつと、あんたたち何やってるの？」

その聞き覚えのある声に僕たちは振り返った。そこに立っていたのは小野さんだった。

「彼女のお出ませ」

東海林君がクスツと笑って言った。僕はどう返答していいのかわからなかった。東海林君の前では、素直に感情を表してもいいと思う。だが、やはり気恥ずかしい。

「あんたたち、まだため池でブラックバスを釣っているの？」

小野さんが興味深そうに寄ってきた。

「違うよ。釜の主を釣る秘密兵器を試すんだ」

僕がそう言った途端、東海林君が僕をにらんだ。僕は一瞬、ハツとした。釜の主のことは東海林君との秘密だったのである。

「ごめん。彼女にだったらいいだろ？」

「やっと本音が出たな」

「あつ……」

東海林君の頬が緩んだ。

「何々、釜の主だつて？」

興味津々で小野さんが僕に顔を近づけてきた。僕はその大接近に思わず身を引いてしまった。東海林君が目配せをした。こうして小野さんも釜の主の秘密を知ることになったのである。

「ねえねえ、私にも手伝えることがあつたら言つてよ」

小野さんはすっかり同行する気だ。

「じゃあ、後でうちにおいでよ。釣るのは東海林君だから、僕たちは取り込み方を考えよう」

「釣つても写真だけ撮つてリリースするからな。なるべく魚を傷つけない方法を考えてくれ」

東海林君が言った。

「私、編み物できるよ。柔らかい毛糸で、大きな網を作つたらどうかな？」

「それ、いいアイデアかも」

僕はすかさず、あいづちを打った。東海林君も頷いている。こうして僕らの共同戦線は確実に結束されていった。

「さてと、こいつを投げるぞ！」

東海林君が勢いよく竿を振った。秘密兵器のザラ？はため池の対岸目がけて飛んでいく。やはり東海林君はルアーを投げるのがうまい。太鼓型のリールであそこまでの飛距離を出すには、相当な腕が必要だ。

小野さんも僕も、ザラ？に注目している。東海林君がリールを巻だし、竿をちょこまかと動かし始めた。

するとどうだろう。ザラ？はまるで水面でもがくヒナ鳥のように、ちよこまかと動くではないか。

東海林君はネチネチとルアーを動かし続けた。すると突然、水面が割れた。

「何だ？」

竿は絞り込まれ、きしんでいる。リールからも糸は引き出されていた。

「何か掛かったぞ！」

僕が叫んだ。

「この引きはカムルチーだな」

東海林君が冷静につぶやいた。魚はもがくように、その身をくねらせている。

「カムルチーって何？」

小野さんが水面を見つめたまま、興味深そうに尋ねた。知らないのも無理はない。僕だって実物を見るまでは知らなかったのだ。

「ライギョのことなんだけど、知ってるかな？」

「ああ、釣りの本で見たことがある。ドジョウを大きくしたような変てこな魚でしょ？」

「そうそう」

そんな会話をしているうちにカムルチーは足元へ寄ってきた。ザラ？をガツプリと口にくわえている。

「こいつも小鳥を襲うって言うからな」

東海林君がつぶやいた。カムルチーは真つ黒な瞳を虚ろに輝かせながら、僕らを見つめていた。

その後、小野さんは僕の家遊びにきた。

小野さんははいねいに僕の母にあいさつをして家に上がった。僕がいきなり女の子を連れてきたのを見て、母が「あんたもなかなかやるわね」と僕の耳元でささやいた。すると、僕の顔に血が上ったのだらう。

「どうしたの？ 顔が真っ赤よ」

母がおもしろがるように笑った。僕はその背中にアカンベーをす  
る。

「すごい。これ、みんなルアー？」

父の部屋でタックルボックスを開けた時の小野さんの第一声だ。  
その数や形に圧倒されたらしい。小野さんは目を皿のようにして、  
タックルボックスをのぞき込んでいる。

「これなんか、宝石みたい」

そう言っ指さしたのは、貝殻でコーティングされたスプーンだ。  
本当に宝石のように輝いている。

(これは魚を釣る道具で、女の子を釣る道具じゃないんだけどなあ)  
そんなことを思いながら、僕もスプーンを眺めた。この時、いつ  
も溪流で使っているルアーが、何だか新鮮に思えた。

やがて小野さんの目はブラックバス用のルアーへと移る。

「あははは、かわいい。何だかオモチャみたい」

小野さんがおかしそうに笑った。それもそのはず、小野さんが手  
にしたのは、アライグマの形をした、遊び心いっぱい  
のルアーだ。

「そうだよ。それでブラックバスが釣れるんだから不思議だよ」  
「ブラックバスってアライグマも食べるの？」

とぼけて小野さんが言う。

「そんなわけないだろ。遊びで作ったルアーなんだよ。ブラックバ  
スの闘争本能をかき立てるように作られているんだ」

「なるほど。高田がケンカを吹っかけてくるのと同じだね」

「くくく」

今度は僕が笑ってしまった。

「ねえ、このカエル、妙にリアルじゃない？」

そう言っ小野さんがつまんだのは、フロッグと呼ばれるカエルの  
形をしたルアーだった。胴体は柔らかい塩化ビニールでできてい  
る。

生命のまだ宿っていないカエルは、小野さんにいいようにもてあ

そばれている。脚を伸ばされたり、縮められたりしながら。

「！」

伸び縮みするカエルの脚を見た時、僕の頭の中にあるイメージが浮かんだ。

「やったよ、小野さん。お手柄だよ」

「えっ？」

小野さんはなおもカエルをもてあそびながら、ほうけた顔をしている。

「そのカエルの脚、水鳥のヒナの脚に似ていないか？」

「あっ、そうか。これをあの、ひしゃげたタマゴみたいなルアーにくつつければ……」

「そう、本当の秘密兵器になるってわけさ」

小野さんと僕は頷きあった。

「なるほど、これが本当の秘密兵器か」

翌日、学校でフロッグの脚を取り付けたザラ？を見た東海林君がうなった。

「今日の夕方、皆瀬さんがうちに来るんだ。よかつたら二人とも来ないか？」

東海林君が小野さんと僕を誘ってくれた。皆瀬さんにとって、僕たちはお邪魔虫だろうが、大事な作戦会議だ。行かないわけにはいかない。

放課後、僕たちは連れだって東海林君の家へと向かった。

東海林君の家ではおじいさんとおばあさんが迎えてくれた。小野さんも僕も深々と頭を下げた。

「おお、よく来たのう。まあまあ、遠慮せず上がりなさい」  
にこやかに迎えてくれるおじいさんとおばあさん。日本の原風景が残っているような、どこか心が和む光景だった。

「お母さん、村役場の非常勤の仕事を正式に始めたんだ」  
東海林君が嬉しそうに言った。そして、お父さんの遺影の前の水

を取り替えると、手を合わせた。小野さんと僕も自然に手を合わせる。

「ふつ」

東海林君がため息をついた。それと同時に黙祷が終わる。

「ふふふ、俺はクリスマスチャンじゃないけど、この時間だけはクリスマスチャンになった気分になるんだよな」

東海林君がつぶやくように言った。仏壇の横に置かれた十字架と聖書は、確かに不釣り合いのようにも見える。だが、決してその存在を誰も否定したりはしない。日本古来の伝統や宗教と、海外から入ってきた伝統や宗教がうまく調和して、そこに存在していた。

考えてみれば、我々日本人は少なからず誰だつてそんなところがあるものだ。七五三でお宮参りをし、毎年クリスマスプレゼントを楽しみにする。そして、多くの人ののお墓はお寺にあるいう。日本にはいろいろな神様や仏様が入り混じっていると云う人もいる。

でも、東海林君はいつか「神様を信じない」と言っていた。お祈りする時もそうなのだろうか。しかし、それは聞いてはいけないような気がした。

東海林君と僕は釜の主のいる、鬼女沢の話の小野さんに聞かせた。彼女も鬼女沢の名前からいはずは知っている。しかし、そこが天然のイワナの宝庫だとは知らなかったようだ。

「イワナかあ。一度、釣つてみたいな。この村では身近な魚なのに、溪流釣りつて言うと、何か難しそうなイメージがするのよね」

小野さんが頬杖をつきながら、目を宙に泳がせた。おそらく、今の小野さんの瞳の中には、まだ見ぬ鬼女沢の風景が映っているに違いない。

「ルアーだったら簡単だよ。竿とリール、糸とルアーがあればできるんだから」

僕は何とか小野さんをこっちの世界に引っ張りたくて、いかにも簡単そうに言つてのけた。本当は流れを読みながら、リールを巻くスピードや竿の動かし方を変えるなど、難しいことは多いのだが、

そこは俊敏な小野さんのことだ。すぐにコツをつかむだろう。

「それと、丈夫な脚だな」

東海林君が付け加えるように言った。その点でも、小野さんは申し分ない。

「うーん、何だかできそうな気がしてきた」

「ははは、その意気、その意気！」

僕は親指を立てて、片目をつぶった。

「ただいまー」

東海林君の母親の明るい声が響いた。その声を聞いて、僕はホツとした。最初に会った時の、涙を見せていた時の声とはまったく違ったからである。だが、一番ホツとしているのは東海林君の家族と皆瀬さんかもしれない。山奥に潜む、あのモヒカン猿はどんな気持ちだろうかと、ふと、そんなことが頭の中をよぎった。

作戦会議の前に、東海林君の母親と一緒に現れた皆瀬さんが遺影に手を合わせ、黙祷を捧げた。その背中に東海林君が声をかける。

「お父さんは皆瀬さんの気持ちはわかってるみたいだけど、まだ正式に認めているわけじゃないみたいだったな」

「正、なんてこと言うの！」

急に東海林君の母親の顔付きが険しくなり、東海林さんをにらみつけた。

「だって、お父さんがそう言っていたんだもん」

「お父さんって、一体……？」

東海林君の母親は、明らかに取り乱している。

「あの猿のことかい？」

皆瀬さんが背中を向けたまま尋ねた。

「何せ、鬼女沢だからなあ。そういうことがあっても、おかしくはないかもしれないなあ……」

皆瀬さんがため息交じりにつぶやいた。

「えっ？」

僕たちは身を乗り出し、東海林君の母親の顔は真つ青だ。

「正君たちと猿に会ったんですよ。正君はどうやら、その猿にお父さんが取り憑いていると思っっているようです。でも、事実そうかもしれない。あの猿の動きは不自然だし、正君と心の中で何かしゃべっているようだった。ひよっとすると、本当かもしれないよ。何せ、鬼女沢ですからね」

皆瀬さんは向き直ると、伏し目がちにそう言っつて、また、ため息をついた。

東海林君の母親はただただ、驚きを隠せず、口に手を当てたまま固まっている。おじいさんもおばあさんも深刻そうな顔をしていた。一体、鬼女沢に何があると言っつのだらうか。

「しかし、何で若いあんたが鬼女沢の伝説を知っておるんだ？」

東海林君のおじいさんが不思議そうに、皆瀬さんに尋ねた。その伝説はどうやら、今ではすたれてしまったらしい。

「私は前に村史編纂課へんさんという部署にいましたから」  
「なるほどのう」

おじいさんが納得したようにうなずいた。

「あのー、鬼女沢の伝説つて、何なんですか？」

僕が恐る恐る尋ねた。すると、皆瀬さんは正座をしたまま、腕組みをして語り始めた。

「ずっと昔の話だけだね。まだ日本がまだいくつもの領地に分かれていた頃、ちょうど、鬼女沢の源流にあたる、鬼女山が国の境だったんだよ。この玉置村は貧しい村だね。年貢が収められなくて、他の国へ逃げ出そうとする者も少なくなかったらしい。だが当時、他の国へ逃げることは許されなかったんだ。関所破りと言っつてね、死刑になっつたんだよ」

「へえー、厳しかったんだね」

今では日本全国、どこへ行こうが罰せられることはない。東海林君も小野さんも、皆瀬さんの話に、夢中で耳を傾けている。

「玉置村から、隣の国へ逃げる者は平地を避けて、たいてい鬼女山



を抜ける。そこで領主は山にくの一、つまり女忍者を置いて、見張り役にしたんだ。そして、他の国へ逃げようとする者を発見した時は、容赦なく殺すよう命じたという。だが、女忍者も人の子だった。そんな任務に耐えられなかったのだろう。あの不見滝の釜に身を投げて、自殺したと言われている。これが鬼女山と鬼女沢の名前の由来さ」

みんなが息を飲んだ。おじいさんとおあばあさんは頷いている。東海林君のお母さんはうつむいて、固く拳を握り締めていた。皆瀬さんの話はまだ続く。

「その後、女忍者はイワナになったと言われているんだ。あの沢のイワナにね。イワナのくねるような強い引きは、女忍者が苦しみもだえているのだという人もいてね。いつしかあの沢のイワナを釣ることを、みんな恐れるようになったんだ。ひよっとすると、釜の主も女忍者の生まれ変わりかもしれないね。そうだとすると、強敵になるかもしれないな」

「お父さんが猿に取り憑くくらいだから、ひよっとすると……」  
東海林さんがそうつぶいた時だった。

「そんな、あの人が猿に生まれ変わるだなんて、そんな……」  
真つ青な顔をした東海林君の母親が、崩れるように前のめりに倒れた。それをおじいさんが支える。

「正、それは本当なのか？」  
おじいさんの目はいつになく厳しく、真剣だった。

「冗談でこんなことが言えるかい。あの猿はお父さんだった。ちゃんと俺に話しかけてきたんだぜ。それにあの山奥で、お父さんはまだ生きているんだ。生きているんだよ！」

東海林君の瞳には力がこもっていた。誰もその気迫に言い返すことなどできないでいる。小野さんは、何が起こったのかわからないようで、ほうけた顔をしている。

「ああつ、そんなことって、そんなことって……」  
東海林君の母親が取り乱しながら、頭をかいた。それをおじいさ

んが支える。

「しつかり、しつかりせい。あいつは死んだ。死んだんじゃ！」

ただ、皆瀬さんは東海林君の話を否定せず、頷いていた。

「いつか、落ち着きますよ。今日はゆっくり休みといい。明日も仕事ですからね」

皆瀬さんは東海林君の母親の肩に、そっと手を添えた。その手が温かそうだった。

「僕らは帰ろうか？」

小野さんも気まずい空気を察したのだろう。僕その言葉に小野さんが頷いた。これ以上は、子供の出る幕ではないような気がしたのだ。とりあえず、作戦会議はお預けだ。

帰りの道で、小野さんにあのモヒカン猿のことについて話をすると小野さんも「ふーん、不思議なことがあるものね」などと言って、否定はしなかった。ただ、二人とも東海林君の母親のことが心配であったのは言うまでもない。自然と小野さんも僕も無口になった。出るのはため息ばかりである。

既に陽はとつぷりと暮れていた。

翌朝、東海林君は疲れた顔で登校してきた。そこへ小野さんと僕が駆け寄った。

「昨日はあれから、お母さん大丈夫だった？」

小野さんも心配そうに尋ねる。

「ああ、俺もいろいろ聞かれたけど。何とか今日も、仕事に行きたよ。家にいるより、外に出た方がいいんじゃないかな」

東海林君がクマを作った目でニッコリ笑った。

「君もあまり無理するなよ」

「ありがと。後で今日の授業の内容を教えてもらえれば大丈夫だよ」

どうやら、東海林君は昼寝をするつもりらしい。既に目はうつろだ。

「じゃあ、今日の放課後は復習と作戦会議ね」

小野さんが笑った。机に伏せた東海林君からは、もう寝息が聞こえていた。

小野さんと僕は顔を見合わせて、クスツと笑った。

それからしばらくしてだった。高田君がバケツに入った魚を持ち込んだのは。

「ブラックバスじゃないか！」

五年生の男の子の声で、教室中が騒然となった。そう、高田君が持ち込んだ魚とは、ブラックバスだったのである。その声にさすがの東海林君も、ムクツと体を起こした。みんながバケツの回りに群がる。

高田君はバケツを覗き込んで、東海林君や僕の方を見ながら言った。

「昨日、ため池でミミズを餌に釣りをしていたら、こいつが釣れてよ。なんだか、こいつを見ていたらお前らのことを思い出しちまってな。殺すのもかわいそうだよ。飼ってみようと思っただけで来たんだ」

その口調はどこことなく、自慢げに、そして優しげだった。

「それは無理だな」

東海林君がつぶやいた。

「えっ？」

一同が東海林さんを見る。

「ブラックバスは『特定外来生物』に指定されていて、法律により個人で飼うことは禁止されているはずだ。水族館なんかは別だけだね」

東海林君が淡々と言った。みんなはポカーンと口を開けたまま、何も言えないでいる。

「じゃあ、このブラックバス、どうすればいいんだ？ ため池へ戻せば、また大人たちに殺されるぞ！」

高田君が焦れたように叫んだ。

「でも、水を抜いて殺されたはずのブラックバスがどうして、まだいたのかな？」

僕にはその疑問の方が大きかった。

「いつかお前のお父さんが言っていただろう。自然の生物は人間よりも強いって。きつと卵が底にあったんだだろうな」

「そうか……」

恐るべきは自然の生命力だった。確かに人間によって持ち込まれた生命かもしれないが、自然に放たれた瞬間から、人間の意志の介入を嫌い、現在までつながれてきた生命の営みが、今、目の前のバケツの中にあつた。確かに自然を意のままにしようと思うのは、人間のおごりなのかもしれない。

ガラガラ。

教室の扉が開いた。斎藤先生が近寄って、バケツの中を覗き込む。みんなは「ブラックバスだ」と囁し立て、ヤンヤヤンヤの大騒ぎとなっている。

「先生、俺が釣ってきたんだ。飼っちゃだめですか？」

高田さんが上目づかいで先生を見る。

「うーん。これはブラックバスに似ているが違うぞ。貴重な『カワスズキ』だ。とても貴重な魚だから、一週間だけ学校で飼って、その後は元のところに逃がしてあげましょう」

さすがは斎藤先生だ。懐が広い。もちろん『カワスズキ』などいう魚は存在しない。それでもブラックバスを『カワスズキ』と呼び、一週間だけ飼うことを許可してくれた先生の度量には感服した。

メダカが消えた水槽には、こうしてブラックバスとウグイが同居することになったのである。ブラックバスよりウグイの方がや大きい。これならば、ウグイがブラックバスに食べられる心配はあるまい。

「大丈夫だよ。僕たちが黙っていれば、大人たちは気づかないさ」  
僕はそつと高田君に耳打ちした。高田君がニコツと笑った。

放課後、高田君は野球もやらずに、急ぎ足で下校した。養鶏場で獲れるドバミミズをブラックバスの餌にするのだとか。

小野さんは毛糸で網を編むために、やはり早々と家に帰った。昨日、皆瀬さんが海釣り用の網を買ってきてくれたので、それに合う大きさに編んでもらうのだ。

東海林君と僕は、フロツグの脚を付けたザラ？のテストをため池で行う。果たして、ヒナ鳥に見えるだろうか。少し心配だ。

家に帰って、ランドセルを放ると、僕は急いでため池へ向かった。少し遅れて、東海林さんが来た。

「ふふふ、俺たちの秘密兵器を早速、試そうぜ」

「ああ」

見つめ合った僕たちの瞳には、まだ見ぬ釜の主こと、大イワナが既に浮かんでいる。

東海林君がていねいだが、素早くルアーを結ぶ。

「いくぞ！」

大きく竿を振りかぶったかと思うと、次の瞬間には、秘密兵器は対岸目がけてフルスイングで飛んでいった。ポチャリとルアーの着水音がした。波紋が消えるまで、しばらく待つ東海林さん。そして、ネチネチとヒナ鳥がもがくような演出をする。

脚の付いたザラ？は、わずかな距離でオーバーな動きを演じながら、徐々に手前へと近づいてくる。

足元から3メートルくらいのところだっただろうか。そこでもう一度、動きを確認しようと、ネチネチと動かし続けた時だった。

突如として水面が割れ、夕映えに銀色の魚体が跳ねた。ザラ？は弾き飛ばされ、足元近くまで飛んできた。

「す、すげえ」

東海林さんが息を飲んだ。

「今のは何？」

「ブラックバスだよ」

僕は先程の一瞬の光景を見たことがある。それは父親が持ってい

る、開高健という人が書いた「オーパ！」という本の中に載っていた写真とそっくりな光景だったのだ。

その写真はトクナレという魚がルアーを弾き飛ばす写真で、強烈な印象を僕に与えた。あの写真と同じ興奮が身近なため池で味わえるとは、思ってもみなかった。それにしても、まだため池にルアーを弾き飛ばすほどの大きなブラックバスがいたとは……。

「この秘密兵器には、とてつもない能力が隠されているかもしれない」

東海林君がうなるように言った。

僕の脳裏にはまだ、先程のブラックバスが跳ねた姿が焼き付いていた。興奮がまだ収まらないのだ。

「なあ、『オリジナル・ザラ』っていうルアーがあるから、このルアーの名前、『オレタチノ・ザラ?』にしないか?」

東海林君が笑って言った。

「それってダジャレ?」

「悪いか?」

「ううん。いい、いい、サイコー」

僕は東海林君の口からダジャレが飛び出すとは思わなかった。正直なところ、ちょっとびっくりしたのだ。もっとクールなやつだと思っただけに、より親しみが湧いて、嬉しかった。

「よっしゃー、『オレタチノ・ザラ?』で釜の主を釣り上げるぞーっ!」

東海林君が雄叫びを上げた。

「おーっ!」

僕がこぶしを振り上げる。

遠くで「クワツ!」という動物の鳴き声が聞こえた。おそらく猿の鳴き声だ。それは、あのモヒカン猿に違いあるまい。

「天気予報をお知らせします。発達中の熱帯低気圧は今後も北上を続け、夜半には台風十号となる見込みです……」

その夜、僕は嫌な気分で天気予報を聞いていた。

「台風よ、逸れるーっ！」

僕はテレビの画面に向かってほえた。

「仕方ないじゃない。自然が相手なんだから」

母もそう言うが、内心は穏やかじゃないはずだ。実は両親もまた、釜の主を僕たちが釣り上げることを楽しみにしているのだ。

プルルルルル……。

そんな時、電話が鳴った。

僕は東海林君だと思って、慌てて受話器を手にした。

「もしもし、桑原？」

「小野さん？」

声の主は意外にも小野さんだった。

「ヤバイよ。天気予報、聞いた？」

「うん。台風が来そうだね」

「台風が来たら、溪流は無理だよね？」

「そりゃ、無理だ。鉄砲水は危ないからね」

笹熊川も鬼女沢も上流部に行けば行くほど川幅は狭まり、切通しも多くなる。そのようなところでは急な増水による鉄砲水が危ない。「禁漁まで時間がないよ」

小野さんの声はあせっていた。じれる様子が受話器越しに伝わってくる。

「でも、命には代えられないよ」

「そりゃ、そうだけどさ。悔しいじゃん……」

受話器の向こうで、唇をかみ締める小野さんの姿が見えた。

もし、今回の釜の主釣りが中止になれば、それは僕だって悔しいいや、それ以上に、東海林君が悔しがらるだろう。今度の土日が今シーズン最後のチャンスなのだ。

「ところで、網はできた？」

「もちろん、バッチリよ」

「よっしやー！」

今はできるだけだけの準備を入念に進めるしかない。

「じゃあ、ついでにテルテル坊主も作っておいてくれよ」

「ふふっ、わかったわ」

プププ……。

受話器に電子音が流れた。

「いけね、キャッチだ。ごめん、切るよ。明日、学校でね。おやすみ」

「うん、おやすみ」

僕は電話をキャッチホンに切り替えた。

「よう、俺だ」

「東海林君かあ？」

「おい、『かあ』はないだろ、『かあ』は……。実は小野さんトラブラブな電話でもしてたりして……」

僕は一瞬、心臓がドキンとした。東海林君は何て勘の鋭いひとなのだろうか。

「冗談言うなよ」

「ははは、悪い、悪い。実は天気予報のことだな」

「僕も電話しようと思っていたところなんだ」

それにしても、東海林君の声はどこかあっけらかんとしている。

台風が心配ではないのだろうか。

「さっき、お父さんに会ったんだ」

「えっ、じゃあ、あの……？」

「里まで下りてきたんだ」

「そうか……。それで？」

僕はてっきり、あのモヒカン猿が東海林君に釜の主釣りの中止を諭しに来たのかと思った。だが、次の瞬間、東海林君からは意外な言葉が飛び出たのである。

「台風は逸れるぜ」

「えっ？」

「聞こえなかったのか？ 台風は逸れると言ったんだ」



「何だつて？ 本当か、それは？」

「ああ、お父さんが言っていた。動物には野生の勘が働くらしい。よく、ナマズが暴れると地震が起こるって言うだろう」

「そ、そうか……！」

「大船に乗ったつもりでいろだつてさ」

「わかった。早速、小野さんにも知らせてやらなきゃ。彼女、心配していたから……」

「やっぱり、電話していたな」

「あ……」

モヒカン猿の予言は当たった。熱帯低気圧は発達し、台風十号となったものの、進路を東寄りに大きく変え、日本列島に上陸することとはなかったのである。船のカサゴ釣りならばいざ知らず、溪流ならば問題はない。

## 第十話

ついに土曜日の朝がきた。僕は太陽よりもずっと早く目覚め、ウーディングシューズを履いた。これから沢を上り、釜の主と対戦するのかもしれない。武者震いを抑えられない。そんな僕の様子を見ていたのだろう。父と母が不意に顔を出した。

「みんなで協力して、最高の思い出を釣ってこいよ」

「釣れたら、写真、撮ってきてね」

「ああ、もちろん。絶対に釣ってみせるさ」

僕は父に笑いかけた。

ふと思った。たとえ、皆瀬さんという大人がついていても、鬼女沢のような山奥に子供たちだけで行かせることに不安はないのだろうか。おそらく釣りをやる以上、水という自然を相手にするわけだから、不安は常にあるに違いあるまい。それでも笑って送り出してくれる両親に、僕は感謝をしなければならなかった。そして何よりのおみやげは無事に帰ってくるのだ。そう自分に言い聞かせながら、靴の紐を締める。自分の気持ちと一緒に。

東海林君の家の前には、既に皆瀬さんのワゴン車が停まっていた。車の前では東海林君と皆瀬さんが、何やら笑いながら話している。かたわらから見れば、それはまるで親子のようだ。

「おはよう」

「おお、おはよう」

そんな会話を交わすも、二人とも瞳に釣り人だけが持っている不思議な輝きをたたえている。やる気は満々だ。

「おはよう」

少し遅れて小野さんがやってきた。とは言っても、まだ太陽は顔を出していない。小野さんのデイバッグの中には毛糸の網が入っているはずだ。

「よし。出発だ！」

皆瀬さんがはりきって車に乗り込もうとした。その時、東海林君の母親が家の中から駆けてきた。

「待って！」

みんな、東海林君の母親の方を向く。その顔は今にも泣き出しそうだった。

「正、お父さんに、あの人に会ったら、聞いてちょうだい。これからどうしたらいいかって……」

東海林君の母親は東海林君の腕にすがるようにして、泣いていた。どうやら、あのモヒカン猿の話信じたようである。

「うん、わかったよ」

東海林君が優しく母親の肩に手を置いた。その仕草は立派な男のそれだった。

「奥さん、大丈夫ですよ」

皆瀬さんも東海林君の母親をなだめる。おじさんとおばあさんも家の外へ出てきた。

「気を付けて行ってこいよ」

東海林君の母親はおじさんに支えられながら、まだ涙を流していた。

こうして僕たちを乗せたワゴン車は、笹熊川に沿って走る林道を目指して出発したのだった。

ワゴン車は林道の終点で停まった。そこから先は歩きである。

車を降りて、まだ暗い、朝の新鮮な空気を肺の中へ大量に吸い込む。それはグリーンガムより、何倍も清々しい空気だ。

どうやら霧が立ち込めているようだが、ライトを点けないと何が何だかわからない。ただザーザーと川の流れる音と、カサカサと樹々の葉がこすれ合う音が聞こえる。

僕の体は本来の野生を取り戻したかのように、五感を鋭くさせる。思えば、釣りをする時も同じだ。体中の神経を、いつも鋭く働かせ

ている。釣りをするということは、野生に返るといふことなのだろうか。

「さあ、急ごう。朝マズメを逃したら大変だ」

皆瀬さんがヘッドランプを点けようとした時だった。我々の前の茂みがガサガサと動いた。

「ひっ！」

小野さんが僕の腕にしがみついていた。僕は思わず、小野さんの肩を抱き締めてしまった。

黒い物体はヘッドランプの明かりを嫌うように、光の帯から逃げた。だが、小野さん以外にはその正体がすぐにわかった。あのモヒカン猿だ。

皆瀬さんがヘッドランプを消す。すると、モヒカン猿は僕たちの前に来て、のっそりと歩き始めたのだ。

僕たちはモヒカン猿の後を歩いた。まるで初めて鬼女沢に行った時のようだ。モヒカン猿がヘッドランプの明かりを嫌うので、闇の中を分け入って進む。時折、笹の葉が剥き出しの腕や足を容赦なく切りつけた。

東海林君や皆瀬さんはウェーダーを履いている分、足は保護されている。小野さんも少々ブカブカだが、アユ釣り用のタイツを履いている。

東海林君は釣竿が枝に引っ掛かり、苦勞をしていた。彼の釣竿はブラックバス用のもので、ワンピース（一本竿）のため、折り畳みができないのである。少々不便だが、釜の主を釣り上げるためには、苦勞は惜しめない。

僕たちは鬼女沢に沿って、モヒカン猿に先導されながら、歩き続けた。東の空がうつすらと赤みを帯び、山の稜線が浮き立っている。涼しい空気が気持ちいいが、身体の内側から熱く込み上げてくる熱気だけはいかんともしがたい。汗が目に入り、痛かった。何度もタオルで拭うが、次から次へと汗が吹き出してくる。もし、自分一人だったら、とてもこんなところまで来られないだろうと思う。

モヒカン猿が横へ跳んだ。この前の時と同じだ。

次の瞬間、僕たちの前に不見滝の大瀑布が姿を現したのである。

ドドーツという轟音とともに、すべてを飲み込んでしまひそうな大きな釜は、女忍者の化身である大イワナが潜むにふさわしい。

掘つ建て小屋の脇では、又吉じいさんが腕組みをして、僕たちの方をにらんでいた。

「おはようございます」

皆瀬さんが又吉じいさんに声をかけた。

「やっぱり来おつたな。木っ端役人に、西洋小僧どもが。何じゃ、今日はアマツコモ一緒けえ」

又吉じいさんが僕たちをにらむ。その眼差しは鋭かった。何年もかけて狙つてきた魚を、僕たちが釣ろうというのだ。目も鋭くなるはずだ。

僕は早速、『オレタチノ・ザラ?』を取り出した。

「くくく、そんなガキのオモチャで釜の主を釣ろうつてのかい? 笑わせるぜ」

又吉じいさんが皮肉たつぷりに笑った。

東海林君はそんな又吉じいさんに目もくれず、黙々と『オレタチノ・ザラ?』を糸に結んでいる。小野さんと僕は網の支度だ。

「ふふふ、子供をあなどつちやいけません。その笑顔もこわばることになるかもしれませんよ」

背中であつとドスのきいた皆瀬さんの声がした。

「ちよつと、その糸、太いんじゃないか?」

振り返つてそう言った皆瀬さんの声は、普通に戻っていた。

「相手は三尺もある大物だろう? だったら、20ポンドは使わないと」

支度を終えた東海林君が笑った。

「20ポンド? どうも横文字は苦手だな」

「大体5号の太さだよ。これからの釣り方を見ていれば、糸の太さなんか関係ないことがわかるよ」

自信満々の東海林君が真顔になった。カチツとリールのクラツチをきる音がした。

『オレタチノ・ザラ?』は滝壺に向かつて、ゆるやかな弧を描いて飛んでいった。そして、白泡の脇に着水する。『オレタチノ・ザラ?』は巻き返す流れと、波にもてあそばれている。

だが、心配はいらない。ピンと張った糸が、ちゃんとルアーを捉えているのだ。

東海林君はしばらく『オレタチノ・ザラ?』が水になじむのを待った。その間が異様に長く感じられる。

東海林君が竿先をツンツンと動かし始めた。そしてふけ出た糸の分だけリールを巻く。

『オレタチノ・ザラ?』は水面でもがく、ヒナ鳥のようにあえぎ続けている。実に見事な演出だ。これだけのルアー操作ができる東海林君は、相当のルアーの達人と言わなければならない。

自分では気づかないが、釣り人は自然と前のめりの姿勢となる。この時の東海林さんも例外ではなく、前のめりでリールを握っていた。

不見滝に朝日が差し込んだ。東の山を越えて昇ってきた、遅い朝日である。太陽の光が東海林君のリール、カルカツタ200の銀色のボディに反射し、一瞬だが目がくらみそうになる。

僕は目を滝壺の『オレタチノ・ザラ?』へと移した。

そして、それはゆっくりときた。大柄なくせに、まるで忍者のように『オレタチノ・ザラ?』の背後に忍びよってきたのだ。そう、黒い物体が。

にわかに水面が盛り上がったかのように見えた。すると、突如として水しぶきが舞い、『オレタチノ・ザラ?』が視界から消えた。

「ヒットーッ！」

東海林君の叫ぶ声が、滝の音をかき消して響いた。

竿はムチのようにしなり、リールからはジリジリと糸が引きずり出されていた。

東海林君の竿はブラックバス用の竿でも、相当硬くて丈夫なはずだ。それが根元から曲がっている。

東海林君も必死に両手で竿を支えるが、リールを巻き取る余裕がないらしい。

「よし！」

僕は東海林君の元へ駆け寄り、竿と一緒に支えた。僕の手にも、もたえるような魚の振動が伝わる。魚は滝壺の底へ向かって、身をくねらせながら泳いでいるのだ。

それにしても、すさまじい力だった。少しでも力を抜けば、竿と糸は一直線となってしまっただろう。そうになると、竿の弾力が活かさず、糸が切れてしまうのだ。

皆瀬さんは黙って僕たちを見守っていた。それは、子供の成長を見守る優しい大人の瞳だったのかもしれない。

小野さんは網を手に水面をただ見つめている。よく見れば、足が震えているのではないか。これでは魚を見た瞬間に、腰でも抜かしかねない。

ジリジリ。

リールからは糸が出て行く一方だ。東海林君と僕は踏ん張ってこられる。魚は必死だ。何せ、自分の命がかかっていると思っっているのだらう。

「このままじゃ、どうしようもないよ」

僕が焦って叫んだ。

「こういう時は、頭に血が上がったやつが負けなのさ。なに、相手もそのうち疲れる。糸はたっぷり巻いてあるんだ。心配はいらないぜ」

東海林君は額に汗をにじませながら、そう言った。

だが、果たして魚は疲れるのだろうか。僕には竿を通して伝わる躍動感が、悠々と泳いでいるようにも感じられる。

「？」

にわかに竿が軽くなった。

(まさか、バレたのかな?)

僕の胸に一瞬、絶望感がよぎった。

「ボヤツとするな。しつかり支えている！」

東海林君の怒声が飛んだ。見れば東海林君は、ものすごい勢いでリールを巻き取っている。

「やっぱり釜の主はただ者じゃないぜ。今度は一気に浮いてきやがった」

僕は水中へと伸びる糸を見た。それは水を切りながら、ものすごい早さでリールへと巻き取られている。

青とも緑とも言えない水面に黒い影が映った。それは水を持ち上げるようにして、その姿を現す。

朝日に輝く鮎色の体と白い斑点がジャンプした。

(ま、まさかイワナのジャンプなんて！)

僕はその大きさよりも、イワナがジャンプしたことに驚きを隠せなかった。僕は溪流釣りの経験がそうあるわけではないが、イワナは普通、下に突っ込みながら、身をくねらせるような引きを見せる。ジャンプするイワナなど、今で見たことがないし、話にも聞いたことがない。

大きな波紋とともに、大イワナは再び水面下へと潜っていった。

ジジジジジッ。

リールが悲鳴を上げた。

「そ、そんなバカな。あんなガキのオモチヤに釜の主が食らいつくなんて」

又吉じいさんのうるたえたような声が聞こえた。

「だから言ったでしょう。子供をあなどっちゃいけないって」

皆瀬さんが得意そうにつぶやいた。

どうやら『オレタチノ・ザラ?』に食らいついたのは、紛れも無



く釜の主のようだ。

「ああ、あんなに大きいの？」

見れば小野さんは腰が完全に引けている。

釜の主は三尺とまでいかなかったも、80センチはありそうだ。普通の大人でも腰が引けるサイズだろう。

「大丈夫。ヘトヘトにさせるから、その網ですくってくれ！」

東海林君が叫んだ。

「う、うん」

小野さんが網の柄を握り直す。

「ふふふ、主のやつ、だいぶ疲れてきているみたいだ。よし、ポンピングで寄せよう。桑原は小野さんのサポートに回ってくれ」

「わかった」

僕は東海林君から離れ、小野さんと一緒に網の柄を握る。その柄は小野さんの手のひらからにじんだ汗で、ベタベタしていた。

ちなみにポンピングとは、竿を立てて魚を寄せ、竿を立てた分だけリールを巻き取る動作を繰り返すことをいう。

東海林君が大きく竿をあおった。そして竿を寝かせながら、忙しくリールを巻き取る。そして、次の瞬間には、もう竿を立てている。確実に釜の主との距離は縮まりつつあった。

ユラー。

女忍者の悲しい恨みを抱いた大きなイワナは、全力の力を出し尽くし、その身を横たえていた。

口にはガツプリと『オレタチノ・ザラ？』をくわえている。頭はサケほど大きくはないが、それでも口は小鳥を悠に飲み込むほどはあるだろう。鼻先は曲がり、イカツイ顔をしている。とても女忍者とうたわれるような、女性的な顔つきではなかった。野生の獰猛さを剥き出しにした顔が、僕たちを恨めしそうな目つきでにらんでいた。

ふと、釜の主の背後に目をやる。

「イワナだ。もう一匹、大イワナが後ろについてくるぞ」

まるで釜の主を気遣うように、一回りほど小さい、60センチほどのイワナが後ろから泳いできていた。

「もしかして、恋人かしら？ それとも夫婦？」

小野さんが神妙な顔つきでつぶやいた。

居合わせた者一同が、その姿に心を痛めたのは言うまでもない。

だが、ここまできて、引き返すわけにはいかなかった。

「くっ！」

東海林君が一気に竿を持ち上げた。そしてリールを巻く。釜の主が僕たちに近づいた。すると後ろからついてきたイワナは反転して、緑色の深みへと消えていった。

ふだんは気にも留めていなかったが、イワナの歯が想像以上に鋭いことに気づいた。これではブラックバスのように、アゴをつかんで持ち上げることは不可能だろう。やはり網が必要だったのである。今や釜の主には、ほとんど抵抗する力は残っていない。多少、尾ビレをばたつかせるくらいだ。戦意を喪失した女忍者は、エラを苦しそうに動かしている。

「よし、ランディング（取り込み）だ」

東海林君が竿を高く持ち上げた。すると、釜の主の頭が宙に浮いた。大きな口がガバツと開く。

小野さんと僕とで、その頭から網ですくった。毛糸の網は、今まで全力で戦った女忍者をいたわるように、その身を包んだ。

「やったーっ！」

又吉じいさんを除く、全員がほぼ同時に叫んだ。

クワーツ！

奇っ怪な動物の声が滝上の方から響いた。みんなで滝上を見上げる。

そこには、あのモヒカン猿がこちらを見つめながら立っていた。

「やったよ、お父さん。俺たち、やったよ！」

モヒカン猿の眼差しは、確かに息子とその友を見守るそれに他な

らなかった。

「やりおった。こいつら、本当に釜の主を釣り上げおった」

又吉じいさんの声が震えていた。

網の中で横たわる大きなイワナに、皆瀬さんがメジャーを当てる。「83センチ。湖だつてこのサイズはめったにいないよ。それが溪流で釣れたんだ。トロフィーものだよ」

東海林君がプライヤーで、ていねいにイワナの口から針を外す。その瞬間、少しイワナがもがいたが、死力を出し尽くした体がそれ以上、抵抗することはなかった。

東海林君と小野さんと僕とで、釜の主を抱えた。

「又吉さん。すまないけど、シャッターを押してくれませんか？」

皆瀬さんが又吉じいさんにデジカメを差し出した。

「お、おう」

又吉じいさんはほうけた顔をしながら、カメラを受け取った。そして、皆瀬さんは僕たちの後ろに回る。

「みんな、今までの人生で最高の顔をせんと、撮ってやらんぞ」

どうやら又吉じいさんは、口は悪いが、気持ちのいい男のようである。

朝の溪流にフラッシュがまぶしかった。

記念撮影を終えると、僕たちは釜の主を水に返した。ゆっくりと水に浸け、魚が動き出すのを待つ。

「何だ。持って帰って魚拓や剥製にはせんのか？」

背中であ吉じいさんが尋ねた。

「俺は釣っただけで十分」

東海林君がそうつぶやいた時、釜の主がヒレを動かし始めた。ゆっくりと身をくねらせながら、東海林君の手の中で動き出す。

「思い出はみんなの心の中にありますよ。それに記念写真も撮ったし、それで彼らは十分なんですよ」

皆瀬さんが得意そうに言った。

「そうか。じゃあ、次はわしが釣ってやるわい」

又吉じいさんが笑った。

僕はその言葉を聞いて思った。今度の釣りは東海林君が一人で釣った釣りではない。みんなで協力したからこそ釜の主を釣ることができたのだ。

「又吉さんも釣りましたよ」

僕が笑いながら、そう言った。

「えっ？」

又吉じいさんは呆気に取られたような顔をいる。

「今度の釣りはね、ひとりじゃとても無理でしたよ。確かに東海林君の腕は一流さ。でもね、又吉さんから水鳥のヒナの話聞いたからこそ、あのルアーを思いついたんだ。そして、小野さんは必死に毛糸で網を編んでくれた。だからこそ、釜の主を傷ひとつなく元のところへ返すことができたんだ。皆瀬さんの車がなければ、朝マズメにここまでたどり着くことも不可能だった。みんなの経験や知恵とかを持ちよって、協力したからこそ釜の主を釣ることができたと思うんだ」

「さすが桑原、いいこと言うねえ」

小野さんが茶化すように、僕の脇腹を突ついた。

「けっ、わしは協力した覚えなんぞないぞ」

又吉じいさんが笑いながらも、憎まれ口をたたく。

「ふふふ、これでも感謝しているんですよ」

皆瀬さんが笑った。

釣り糸でショックリーダーと呼ばれる糸がある。糸と糸をつなぐ時、つなぎ目を補強し、魚が掛かった時のショックを和らげる役目をする糸だ。

僕は思った。皆瀬さんは又吉じいさんと僕たちのショックリーダーの役割を果たしてくれたのだと。

帰りの下り道は爽快だった。朝の爽やかな、グリーンの空気が肺の中に染み込み、赤や黄色に化粧をした樹々が美しく目の中に飛び込む。そして、枝の隙間から差し込む朝の光りは、どこことなく神々しい。

僕はそんな景色を見るのが好きだ。そして今、こうしていられることを、心から感謝している。

それは単に釜の主を釣り上げた満足感だけではない。この大自然の中に身を置き、それを感じていられることが幸せなのだ。

僕はふと、振り返った。後ろを歩く小野さんがニコツと笑った。僕も照れたように笑い返す。

もしも将来、小野さんと僕が結婚して、子供が産まれても、この自然がそのまま残っていてほしいと思う。まだまだ先の話だが。

ガサガサツ！

急に茂みから、何かの影が僕たちの前に飛び出した。

「お父さん！」

東海林君が叫んだ。

そう、それはあのモヒカン猿だった。モヒカン猿は僕たちの方を見つめ、行く手をはばんでいる。道を空けようとはしない。

モヒカン猿はにらんでいた。その視線は皆瀬さんに向いていた。

その眼力の気迫足るやすさまじいもので、小野さんや僕はもちろんのこと、東海林君でも半歩退いたほどである。

ウーッ！

モヒカン猿がうなった。彼は知っているのだ。皆瀬さんが東海林さんの母親に好意を寄せていることを。

モヒカン猿、いや、東海林君の父親と皆瀬さんの睨み合いは続いた。それは、ひとりの女性をかけた、男同士の気迫に満ちたにらみ合いだった。

僕はこの時、ふと思った。今、僕は小野さんのことが好きだ。小野さんも僕に好意を寄せてくれている。もしも、これから先、僕の

前に立ち塞がるライバルが現れたとしたら、僕もあのような目をするのだろうか。

朝の冷気の中でも、皆瀬さんの額からは汗が流れている。それは歩いて、体が温まった汗ではなかった。冷や汗だ。

モヒカン猿は微動だにせず、皆瀬さんをにらみ続けている。皆瀬さんはにらみながらも、どこかお願いするような目をしている。

「お父さん、皆瀬さんを認めてあげてよ！」

緊張に耐えられなかったのだろう。東海林君が思わず叫んだ。

心なしかフツとモヒカン猿の目が緩んだように思えた。モヒカン猿は東海林君を見つめた。それは、優しさと寂しさをたたえた男の父親の目だった。その目は、どこことなく潤んでいるようにも見える。モヒカン猿はその潤んだ目を皆瀬さんに向けた。皆瀬さんの目からも緊張が解けている。皆瀬さんもまた、泣きそうな顔をしていた。モヒカン猿はノツソリと後ろを向くと、そのまま茂みへと帰っていった。藪がガサガサと揺れ、茶色い背中が遠ざかっていく。

「お父さん！」

東海林君のその声に、モヒカン猿が足を止めた。

「お父さん、また会えるよね？」

しかし、モヒカン猿は振り返ることなく、そのまま深い茂みの中へと消えていったのである。

「お父さん……」

ただ呆然と東海林君は茂みを見つめ続けた。皆瀬さんも、小野さんも、そして僕も茂みを見つめ続けた。

（やっぱり、あの猿は東海林君のお父さんに違いない！）

僕は心の中で、そう確信していた。

僕は見た。この時、東海林君と皆瀬さんの頬から滴がしたたるのを。おそらく、東海林君と皆瀬さんはモヒカン猿と、小野さんや僕にはわからない方法で会話していたに違いない。

「さあ、行こう」

皆瀬さんが鼻をすすりながら、ほほえんだ。その笑顔からして、

どうやら話はうまくまとまったようだ。

東海林君が顔を上げた。彼も鼻をすする。だが、次の瞬間には笑顔を浮かべて言ったのだ。

「やっぱり、この村に来てよかったな。お父さんが二人もいるんだからさ」

「はははは、気が早いぞ！」

皆瀬さんが豪快に笑いながら、東海林君の背中をたたく。

小野さんと僕も笑った。僕も自然と目の前がかすんだ。

山を下り、東海林君の家に帰る。すると、東海林君の母親が家の前で待っていた。

ワゴン車は優しいブレーキで、東海林君の母親の前に停まる。東海林君も、小野さんも、僕も一斉にワゴン車から飛び降りた。

「お母さん、ついにやったぜ。釜の主を釣り上げたんだ。82センチの大イワナだ！」

「そう、それはよかったわね。でも、みんな無事に帰ってこれたのが、一番のおみやげよ」

東海林君の母親は慈しみ深いほほえみをたたえて、そう言った。

「ただいま」

遅れて車から降りた皆瀬さんが、東海林さんの母親に向かって言った。

「おかえりなさい。ありがとうございます。なんてお礼を言っているのやら」

「いえいえ、お礼を言うのはこっちですよ。こんなチャンスを与えてくださったのですから」

皆瀬さんが爽やかにほほえんだ。

「ところで、あの人には会えましたか？」

「はい。我々を見守ってくれました。そして、最後に」  
「最後に？」

東海林君の母親が体を乗り出す。

「皆瀬さんを認めてくれたんだ。お父さんは山の中で、自由に自然に暮らすってさ」

そう答えたのは東海林君だった。

「お父さんは言っていたよ。『俺は死んでいない。そして、人は今とこれからをどう生きるかだ。お前はいい理解者に恵まれている。』

それは一生の宝だ』だって」

「うつつ、あなた……」

東海林君の母親が泣き崩れた。

「お母さん、すっかりしなよ。お父さんは皆瀬さんに最後、『正をよろしく』って言ったんだぜ」

東海林君が母親の肩を支えた。それは男らしい仕草だった。かつて、「一杯一杯だ」と言っていた彼の姿はそこにはなかった。

東海林君の母親は、体中の水分が抜け出てしまうのではないかと思っくらい泣き続けた。

それを皆瀬さんは優しくそなまなざしで見つめていた。今は自分が出るべきではないと自覚しているのだろうか。皆瀬さんはただ、見守り続ける役に徹し、母親の介抱を東海林君に任せていた。母親を支える東海林さんの顔は男の顔つきそのものだった。



## 最終話

週が明けた月曜日の放課後、学校の児童の大半がため池に集まっていた。高田君の持ち込んだ「カワスズキ」ことブラックバスを返すためである。

バケツの中で窮屈そうに身をよじる黒い背中が、早く解放され、自由を得たがっているようでもあった。だが、下アゴを突き出し、どこことなくぼけた顔をしたその魚は、見れば愛嬌があるではないか。

ブラックバスはこの一週間、僕たちにいろいろなことを教えてくれた。水槽の底に沈んだミミズを食べる様など、愛嬌たっぷりだった。それに、泳ぐ力は小野さんが持ち込んだウグイの方が勝っているようで、先に餌を取られてしまうのだ。それどころか、一回り大きいウグイに追い立てられる一面もあった。そんなブラックバスに、教室のみんなからは「かわいそう」という声まで聞かれたほどである。

いつしかブラックバスはどう猛な殺略者から、哀れみの対象へと変わっていた。もつともこれは、僕たちの学校の中だけの話だが。

「さあ、放すぞ」

そう言つて、高田君がバケツをひっくりかえす。バシャバシャという音とともに、緑色のよどんだ水に、透明な水が注がれる。だが、それはすぐに緑色と同化してしまった。

黒い魚体が滑った。それは緑色の水の中に落ちると、しばらく動かなかつた。いや、エラとヒレをゆっくりと動かしながら、その場に定位していたのだ。まるで、僕たちとの別れを惜しむように。

やがて、ゆっくりとブラックバスは泳ぎ出した。深い緑色の水の底へと消えていく。僕たちはそれを、ただ黙って見送った。

「また、大人たちが駆除するかな？」

高田君が心配そうにつぶやいた。だが、東海林君は笑う。

「俺たちが黙ってれば平気だよ。それに俺はここではもう、ブラックバスは釣らん。どうしても釣たかったら竜山湖まで行くさ。あそこはブラックバスを認めてくれているからな」

そう言う東海林君の口調は、非常に爽やかだった。

「そういえば、父ちゃんが言っていたっけ。ため池でブラックバスを釣っていた連中は、ゴミを平気で捨てたりして、ものすごくマナーが悪かったって」

高田君がうなるように言った。

「そいつらと俺を一緒にするなよ」

「あははははは」

夕暮れのため池に、みんなの明るい笑い声が響いた。

もう暦は十月に入っていた。九月いっぱいイワナやヤマメなどの渓流魚は解禁期間が終了する。つまり、十月からは禁漁となり、それらの魚は釣ることができないのだ。秋は渓流魚の産卵期であり、乱獲により種の絶滅を防ぐ目的がある。

そして、その日は朝から強い風が吹き荒れ、西の空に暗雲が立ち込めていた。

「台風十一号と台風十二号は連なりながら、次第に勢力を増し、北上を続けています。今日の正午過ぎには本州圏内も暴風域に入る見込みで……」

僕は胸騒ぎがした。

あのモヒカン猿が台風十号を退けてくれたのだとしたら、いつかその仕返しができるかもしれないと思っていたのだ。予感的中し、台風は二連結で来るという。

「あなた、通勤、大丈夫かしら？」

母親が心配そうに父親を見やった。

「ワゴン車でも、四駆だからね。たぶん大丈夫だよ」

父親はのんきにトーストをかじりながら、コーヒーをすすった。

雨は登校時間には降り出し、すぐ連絡網が回ってきた。

「健也、今日は休校だった」

母親がそう言いながら、次の連絡先をプッシュする。

雨はすぐさま、バケツをひっくり返したような豪雨となった。

僕は空をにらんだ。

(もしかして、あの釜の主の怒りに触れたかな?)

そんなことを思ったりもした。

昼過ぎになって、外はすさまじい雨と風で、とても外出できるような状況ではなくなった。

だが、そんな僕の家の前を通り過ぎた者がいる。

(…………?)

僕は一瞬、誰だかわからなかった。だが、それが高田君であることに気がつくのに時間はかからなかった。

僕は慌てて、玄関を開けた。

「高田君、どうしたんだ? この台風の中を」

「うちは農家だからよ。田んぼや畑が心配なのよ」

レインコートがお粗末に見えるくらいビショビショになった高田さんは、深刻そうな顔をして言った。

「だからって、この台風の中…………」

「うちはこれでメシ食ってるんだ。これから、笹熊川の様子を見に行くんだ」

「危なくないか?」

「そんなことは百も承知だ」

僕は思った。これは高田君の独断だ。おそらく、彼の両親は田畑に出ているだろう。川の増水が気になって、いてもたってもいられなくなったのだ。

「よし、僕も行く!」

僕は玄関につるしてあった釣り用のレインコートをおもむろにつかむと、それを着た。

「おい、バカ。遊びじゃねえんだぞ」

「笹熊川がどうなっているか知りたいし、何せ、村の危機だ」  
「わかった」

笹熊川は既に怒り狂っていた。

その音はゴウゴウなどという生易しいものではなく、ドドーツという、学校の大太鼓をずっと鳴らしっぱなしにしているような音を響かせている。腹に響くような轟音だ。

そこには普段の穏やかな流れはなかった。すさまじい勢いで流れる茶色の濁流が、まるで竜のごとく駆け抜けていたのである。

「おい、君たち、何やってるんだ！」

そんな濁流に見とれている高田君と僕に声を掛ける者があった。

遠くから、雨がっぱを着た男の人が近寄って来る。

「あつ、皆瀬さん！」

「桑原君、だめじゃないか。洪水警報が出ているんだぞ。笹熊川も警戒水域に達しているんだ」

皆瀬さんは僕たちの姿を確認すると、すぐに帰宅するように促した。

「でも、笹熊川が氾濫したらうちの田んぼや畑が……」

「大丈夫。笹熊川は治水工事がしっかりしているからね。堤防も簡単に決壊しないよ」

それでも高田君の顔から不安の影は消えない。心配そうに濁流を覗き込んでいる。

「さあ、ここから先は大人たちにまかせて。子供の出る幕じゃないよ」

「ジジーツ！」

皆瀬さんのトランシーバーが鳴った。

「こちら水無川を警戒中の庄田。水無川も警戒水域を大幅に超え、増水中！」

それを聞いて僕はハツとした。そして、水無川の方へ駆け出した。  
「おい、ちょっと待って！」

そう叫ぶ皆瀬さんの声も聞こえなかった。

水無川は笹熊川に注ぐ支流のひとつで、僕の家より少し下流で合流する。

その名のとおり、普段の水無川にはほとんど水がない。しかし、今は増水し、警戒水域を大幅に超えているという。

僕の父は、この水無川に架かる貢橋を渡って通勤しているのだ。もし、増水が著しければ父に連絡しなければなるまい。

案の定だった。貢橋はもう少しで濁流に飲み込まれそうだった。

水無川は川幅が笹熊川ほど広くない、そこにたくさんの水が一気に押し流されるわけだから、濁流の威力もすさまじい。

「おーい！」

遅れて皆瀬さんと高田さんがやってきた。

「危ないじゃないか！」

皆瀬さんが僕を一喝した。

「うちのお父さん、この貢橋を渡って通勤しているんだ」

「そうか……。それは心配だな」

皆瀬さんが同情するようにつぶやいた。

「しかし、この水勢は危ない。早く帰ってお父さんに連絡したまえ」

「はい」

そう返事をして、ふと、目を貢橋から川上に逸らした時だった。

「皆瀬さん、あそこのブツツケ、今にもエグレそうですよ！」

僕のその声に驚いた皆瀬さんが振り向く。

そのこのカーブは激流が勢いよく堤防に打ち付けられ、今にも決壊しそうだった。

「本当だ。こりゃヤバイな。あそこが決壊したら畑はメチャクチャだ」

皆瀬さんがトランシーバーを口に当てた。

「こちら皆瀬、こちら皆瀬。ただ今、水無川を警戒中。貢橋の上流100メートル付近の堤防が決壊寸前。至急対策を求めたし！」

「こちら災害対策本部。了解した。土嚢を持って対策に向かう」  
くぐもった声がそう答えた。

「ありがとう。君が気が付かなければ見落とすところだったよ」

皆瀬さんがニツコリと笑った。高田さんも胸をなでおろしている。

「じゃあ、本当に後は大人たちに任せてもらおうよ」

「よろしく願います」

高田君と僕は、皆瀬さんに頭を下げてその場を立ち去った。

「ちょっと、健也！」

家に帰るなり、母は烈火のごとく怒り狂った。

「この台風の中、川へ行つたですって？ いい加減にしてちょうだいー！」

「でも、僕が水無川の堤防の決壊を食い止めたんだ……」

「そうかもしれないけど、万が一ってことがあるでしょう？ お母さん、心臓のあたりがキューツとなったわ」

母親として怒るのは無理もない。

「お願いだから、心配掛けないでちょうだい……」

そう言つて、母は僕を強く抱きしめた。

「そつだ、お父さんに連絡しないと、貢橋が沈んじやいそつだよ」

「そ、そつ……。わかつたわ。お母さんが連絡しておくから……」

母の頬は滴で濡れていた。

僕は少し思慮が足りなかったことを反省した。

「お母さん、ごめんなさい……」

「もう、危ないことはしないでね」

「釣りはいいだろ？」

「そのくらいはね」

母が受話器に手を伸ばす。

「もしもし、桑原の家内ですけど……、いつも主人がお世話になっています……。あ、あなた？ 水無川の貢橋が増水で沈みそつなのよ。え、そつ……。うん……。わかつた。それじゃあ」

母は静かに電話を切った。

「お父さん、何だつて？」

「今夜は会社に泊まるって……」

母はようやく安心したような顔をした。そして、口からは「はあ」という深いため息が漏れる。

「水無川の竜が戻ってきたのかもしれないね」

僕がそう言うと、母親がキョトンとした顔をする。

「何それ？」

「この前、釜の主釣りに連れて行ってくれた村役場の皆瀬さんが、何でも以前に村史ナント力課にいたとかで、水無川の伝説の話をしてくれたんだ」

「どんな伝説なの？」

母が身を乗り出してくる。

僕はとうとうと語り始めた。

ずっと昔のこと。

水無川にはまだ豊かな水が流れていた。

その川のほとりに一郎という百姓が住んでいて、毎日、よく働いていた。

ある日、一郎は自分を見つめる若い娘に気づく。

若い娘はおりゅうといい、一郎に想いを寄せていたのだ。

一郎もまたおりゅうに惹かれ、恋仲となる二人。

一郎は仕事帰りにおりゅうの家へとよく行った。だが、そこは武家屋敷のように立派であったという。

一郎は「武家の娘とは一緒になれぬ」と、おりゅうと結ばれることをあきらめるが、おりゅうはお許しを得ていると言う。

そんな一郎の行動を不審に思う者たちがいた。村人たちだ。

一郎は仕事が終わると、川の中へと入っていくのだ。

だが、一郎はおりゅうと会っているだけだと言って、村人の話を聞かない。

そのうち、一郎には妖怪が取り憑いているに違いないということになり、一郎は猿ぐつわをはめられ、納屋の中へ閉じ込められてしまった。

おりゆうは必死で一郎の名を呼ぶ。一郎はうめくが、その声はおりゆうには届かない。

何日かが過ぎ、ようやくおりゆうの声がしなくなった時、一郎は開放された。

しかし、おりゆうはもう、姿を現さない。

一郎は生気が抜けたようになり、仕事もしなくなった。

そして、川に身を投げて死んだのである。

その時であった。川の水が空高く舞い上がり、竜の姿となったのは。

竜は一郎のなきがらを抱えていた。

その瞳は美しい玉のようでありながら、深い悲しみをたたえているようでもあったという。

竜はそのまま、いずこへと去って行った。

ふと、村人が川を覗き込むと、水は涸れ果てていたという。

これが水無川の伝説である。

「ふーん……。おもしろい話ね。地元になんな話があるなんて、今まで知らなかったわ」

「鬼女沢の伝説もすたれてしまったみたいだし、語り継ぐ人がいてもいいと思うんだよね」

僕はやや、力説するように言った。

「そう言えば、中学校に郷土資料部っていう部活があるわよ」

「へえー……」

「今もつぶれていなければの話だけどね」

母がおどけるように笑った。

「もし、つぶれていたら、僕が建て直そうかな」

「その意気、その意気！」



母親にようやく明るい笑顔が戻ってきた。

台風も落ち着いた金曜日の晩、僕は釣りの仕掛けを作っていた。川の餌釣りの仕掛けだ。何せ、明日の土曜日は小野さんと、笹熊川に釣りに行く約束をしているのだ。心が踊るのも無理はないだろう。トントン。

「よー、熱心だな」

ドアをノックして入ってきたのは、父親だった。

「魚じゃなくて、女の子を釣るのが目的だったりして」

父が茶化す。金曜日の晩ということもあって、既に父親の顔は真っ赤だ。相当の量の酒を飲んでいるようだった。

「そんなんじゃないよ。ただの釣りだよ」

僕もこの時、赤い顔をしていただろうか。

「そっか、もう釣っちゃったのか？ あはははは！」

「お父さん！」

一階から母の怒鳴る声が聞こえた。

「でも、釣った魚にちゃんと餌はあげるよ。はははは」

父の足は既に千鳥足だ。よくテレビのバラエティー番組で観る、酔っ払ったサラリーマンと大差はない。

「ところで餌釣りをするんだらう？」

「うん」

「じゃあ、これを持っていけ」

父の手に何やら袋が握られていた。袋の中には桜色の粉が入っている。

「何、これ？」

「サクラエビの粉だよ。これを練り餌に混ぜると、よく釣れるぞ。」

お父さんはな、子供のころから釣り名人で、友達と競ってもこの粉を混ぜて、いつも圧勝していたのだ」

父親は自慢げに鼻の下をこすった。

「ありがとう。もらっておくよ」

確かに明日は練り餌を使おうと思っていた。練り餌とは粉状の餌を水で溶き、適当な硬さにして使用するものだ。明日は万能タイプの練り餌に、サナギ粉と呼ばれるものを配合するつもりでいた。それに、このサクラエビの粉を混ぜるのも悪くない。

「いつもありがとう、お父さん」

「なーに、かわいいせがれのためだ。いってことよ」

父親はいつも、酔っ払いながらも、僕に的確なアドバイスをしてくれる。それで偉ぶったりはしない。

僕はそんな父親を心から尊敬し、いつも何かを吸収したいと思っている。

「じゃあ、明日のデート、たっぷり楽しんでこいよ。おやすみ」

「お父さん、おやすみ」

僕は父親の背中に、元気な声を返した。

翌朝、待ち合わせ場所の落合橋へと向かう。既に小野さんらしき人影が遠くに見えた。

十月に入ると禁漁となるため、釣りの対象はウグイやオイカワなどの、いわゆる雑魚となる。それはそれで楽しいものだ。小野さんと一緒ならば、たとえどんな釣りだって楽しいと思えるだろう。

「おーい！」

僕は人影に大きく手を振った。人影の手も大きく揺れる。僕は駆け出した。

「待った？」

「ううん。私もついさっき来たところ」

息を切らして尋ねる僕に、小野さんがにこやかに笑って答えた。

「実はね、私、昨日はあまり寝られなくて」

「僕もさ」

「うふっ」

「あはははは」

二人で照れるように笑った。

「どの辺りで釣るうか？」

小野さんが川面を覗き込みながら尋ねる。

「そうだなあ。この前は橋の下で釣ったから、もう少し上流へ行ってみようか？ でないと、また高田君に見られちゃうよ。」

「あ、言えてる、言えてる。」

二人でまた笑った。そして、僕たちは上流へ向かって川沿いのあぜ道を歩き始めた。真つ赤な彼岸花が土手を彩っている。

「あの花って、綺麗なのか、毒々しいのかわからないわね。」

「自然ってそんなものじゃないかな。たとえば水芭蕉やリンドウ、スズランなんかは眺めるだけならいいけど、毒を持っているからね。」

「へえ、そうなんだ。知らなかったわ。」

「この笹熊川だって田畑に潤いをもたらしてくれるけど、台風の季節にはよく大水を出すものね。自然をあなどっちゃいけないよ。」

僕は偉そうにも説教ぶってしまった。しかし、小野さんはそんな僕の話に耳を傾けていた。

「ふふつ、やつぱり桑原って。」

「何？」

「ううん、何でもない。」

小野さんがいたずらっぽく笑う。そんな笑いをされると、気になるものだ。

「何だよ？」

「いや、桑原って、思ったとおりだなって。あはは。」

そう笑った小野さんは照れを隠すように、僕の前を歩き始めた。

僕は鼻の下をこする。少し、いい気分だ。

「ねえ、手をつなごうよ。」

「いいよ。」

小野さんは僕の申し入れを、快く受け入れてくれた。僕は竿を持つ手を持ち替えて、小野さんと手をつないだ。温かかった。いつか、釣竿越しに感じた温かさよりも、直につないだ方が温もりが伝わる。

お互いの手は少し汗ばんでいたような気がする。

どのくらい笹熊川を上流に遡っただろうか。淵で釣り糸を垂れる二人組みを見かけた。

「あつ、あれ！」

小野さんが叫ぶ。見間違はずもない。その二人組みは皆瀬さんと東海林君だった。

僕は一瞬、二人のところへ行こうかどうしようか迷った。何せ、今日は小野さんと二人きりだ。あまり邪魔をされたくないのが本音だった。

しかし、皆瀬さんと東海林君とは深い絆で結ばれている。このまま無視するのも気が引けた。それは小野さんも同じ思いだろう。

「行ってみようか？」

「うん」

小野さんはやはり快くうなずいてくれた。

僕には東海林君が餌釣り用の溪流竿を振っていることが、珍しく新鮮な光景に思えた。やはり彼にはルアーのイメージが付きまとう。

小野さんと僕は彼岸花と女郎花が咲く土手を降りていった。

「やあ、何を釣っているんだい？」

皆瀬さんも東海林君も振り向いた。

「やあ、未来の夫婦のお出ましだぞ」

手をつないだ僕たちを見て、皆瀬さんがからかうように言った。

「ふふふ、もうすぐ親子になる人達が仲良く釣りをしているわ」

小野さんも負けずに応戦する。皆瀬さんも東海林君も苦笑した。

東海林君のウキが沈んだ。彼はヒョイと釣竿を上げ、魚を抜き上げる。

小さな、金色にくすんだ魚が東海林さんの手のひらに収まった。

それはピチピチと跳ねながら、元気一杯に暴れている。

「アブラハヤだね」

「そうさ」

東海林君が答えた。

「今日はアブラハヤがターゲットなんだ」

アブラハヤと言えば、普通は外道（目的以外の魚）だ。それを専門に狙っているという。

「アブラハヤはね、漁協が放流しているわけでもないのに、たくさんいる。簡単にいくらでも釣れるんだ。あれだけの台風の後なのにね」

そう言いながら東海林君がアブラハヤを川に返した。

「まあ、それだけこの笹熊川が豊かな証拠だよ。ちゃんと生命の再生産ができているんだからね」

皆瀬さんがそう言いながら、魚を抜き上げた。どうやら、この淵には相当な数のアブラハヤがたまっているようだ。

「いつか高田君が、アブラハヤを使ってうどんのダシをとるって言うっていたよ」

それは古くから地元に密着した、生活の知恵だと僕は思う。雑魚でもその恩恵にあやかれることは、喜ばしいことではないか。

「どうする？ 僕たちもここで釣らせてもらおうか？」

僕は小野さんの顔を覗き込むように尋ねた。

「うん。ここにしよう」

小野さんも異存はないようだ。大きな淵は四人の釣り座を十分確保してくれている。

小野さんと僕は早速、釣りの支度を始めた。僕は練り餌と一緒に父親からもらったサクラエビの粉を出す。見れば皆瀬さんと東海林君も練り餌を使っている。

「ちょっと、秘密兵器があるんだ」

僕は自慢げにサクラエビの粉を持ち上げた。逆光の手からぶらさがる透明のビニール袋。青空に淡い紅色が浮き立っていた。

「何、それ？」

小野さんが興味深そうにビニール袋を覗き込む。

「サクラエビの粉だよ。練り餌に混ぜるのさ」

「ほう、それはおもしろいな」

その僕の声に皆瀬さんが反応した。皆瀬さんも東海林君も釣竿をかついで、僕たちの方へ寄ってきた。

「俺も勉強しなきゃな」

東海林君が笑いながらつぶやいた。

「俺は皆瀬さんと相談して決めたんだ。将来はうちの県の職員になつて水産試験場に勤めるんだってね」

「すごい。もう将来設計、建ててる」

小野さんが東海林君の言葉に驚いたように言った。考えてみれば、僕も将来設計など建ててはいない。もつと小さいころは宇宙飛行士になりたいと考えていたが、かなり大ざっぱな夢だ。果たして実現などできるだろうか。

「ふふふ、それがだめなら、釣り具店の店長さ」

「そう、その時は私に釣り具を安く売ってくれることになっているんだ」

皆瀬さんが笑いながら言った。

「あー、僕にも」

「私にも」

僕と小野さんが後に続いた。

「どっちかというと、釣り具店の方が私たちにはいいわよね？」

小野さんがおどけながら同意を求める。

「どちらにしろ、魚と関わる仕事がしたいな」

そう言う東海林君の瞳には力がこもっていた。

「僕は、まだわからないや。先は長いもんね」

僕は負け惜しみではなく、気楽に、肩の力を抜いてそう言った。それを否定する者は誰もいない。

小野さんも僕も釣り支度を始める。細い糸が竿に結ばれ、伸びていく。それが川上から吹きおろす風になびいた。

手元にはサクラエビの粉をまぶした練り餌が、茶色の中に綺麗な紅色を添え、まるで和菓子のようにだ。

「さあ、みんなで釣ろう！」

僕たち四人は並んで竿を振った。竿が風を切り、糸が舞う。そして、着水したウキがゆっくりと流れ出した。まるで僕たちの村の時間を象徴するかのようによっくりと。

この川の流れも、夏休みに僕がカサゴを釣った海へと流れ込み、水蒸気となった海水は、再び雨となって川になる。

そうだ、僕たちの人生は長い。そんなことを思っていると、ウキが沈んだ。

ククツと伝わる小さな生命の感触を楽しむ。抜き上げられた金色のくすんだ魚を愛しそうに撫でると、水へと返してやる。

隣では小野さんも、東海林君も、そして皆瀬さんも次々とアブラハヤを釣り上げていた。

今日も絶好の釣り日和だ。

(了)

## 最終話（後書き）

長く、少々マニアックなお話にお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

最後まで読んでくださった方々、どうもありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4570i/>

---

僕の村は釣り日和

2010年10月8日14時34分発行